



真剣<sup>マッケン</sup>で私<sup>ワタシ</sup>に  
お球<sup>オマル</sup>隷<sup>リ</sup>属<sup>ゾク</sup>しなさい!!

川神学園。  
多くの武士娘を要する名門には、  
武神川神百代とそれに匹敵する実力を持つ松永燕がいる。  
彼女達二人は同学年ということもあって仲が良い。

「モモちゃん、来週また川神院にお邪魔してもいい？」  
「もちろん。燕ならいつでも大歓迎だよ」

「良かった。納豆持参で参加するね」



いつものように放課後の昇降口で雑談している時だった。

二人の後ろから男子生徒が近付いてきた。  
話しかけてくる気配を察した燕が反応する。

「何か用かな？松永納豆なの……」

「あ、あの！」

納豆の話を通るようにその男子はサッと距離を詰めて  
燕の前に立った。



おまぢぢぢ……面白くないな。はな。



「ええっ！ちよ、直球だね」  
「ぞ、それじゃっ」



「僕、天羽操哉って言います」  
「松永燕さん。す、好きです！」  
「っ、このラフシターをもうってんたい！」



手紙を渡すと足早に去っていく天羽操哉。  
あまりにも急で、燕も呆氣にとられていた。

「好きって言ってラフシターまで渡してくるなんてね。  
このパターンは初めてだよ」

「なかなか思い切ったな。ふふ、面白いじゃないか」

驚いている様子の燕に対し、外野の百代はどこか楽しそった。



「天羽操哉か。大和ほどじゃないが、可愛らしい奴じゃないか」

「いやあ……ラフシターは何回も言うてるけど、手渡し直球でラフシターですって言う子は初めだね」  
「ある意味男らしいというか」

「好きってことはまず伝えて、どこが好きとかそう言うのは手紙でっついでっついな」

「ま、それだけ真正面から告げてきたんだ。ちゅんと返事してやるんだな」



「そっだね。家に帰って読んでみるよ」

「なかなか年上を引き付けられるものがあったな」

「いいものが見れて弟を補充したくなってきたし私も帰るよ」



「うん。バイバイ」

「じゃあな」



確かに年上に好かれそうなお子だね。

けど……モモちゃん言う通り大和くんほどじゃないんだよね。  
残念だけど……

中身は読まずとも答えは決まっている燕。  
帰宅して中身を読んでも、それが変わることは無かった。





翌日、告白の返事をするために燕はある部室を訪れていた。

ラフレターに操哉はMC（ミックス・チャレンジ）同好会で一人部長をされていて、毎日部室にいと書いてあり、それはつまりここへ来れば会えると言うことを意味していた。

# MC mix challenge



「お邪魔しまーす……」

「燕さん！来てくれたんですね！」

昨日の今日で来てくれた燕に、操哉は喜びを隠さず出迎えた。  
しかしそれが燕には気まずく思えた。  
告白を断りに来たからだ。



「昨日は手紙ありがとう」

「い、いえ。僕こそ突然ですいませんでした」

「ううん。嬉しかったし、すぐへ気持ちば伝わったよ」

「……だけで」



「だめ……ですか？」

「……ごめんね」

告白慣れしている燕は、  
こういう時どう断るべきかを知っていた。

変に希望を持たせるより、ちゃんと断った方が  
相手のためにもなるし変な誤解も招かない

「どうですか……ほ、他に気になる人でも？」

「……気持ちをぶつけてくれたから正直に言っよ」

「気になってる男の子……いるんだ」



他に好きな人がいる。  
ありがちなだが、残酷な理由だ。

「ど、どうですか……」

操哉の表情はショックからか青ざめ、  
数分前の無邪気な笑顔が唯のように暗くなった。

それだけならまだよかったが、  
ここからは燕も予想していなかった。



「う、う……うわああああんっ」

「えっ!?!? ちょ、うどっ!?!?」

崩れ落ちて号泣しだした操哉に、燕も慌てる。

フラれたからくらいで泣く女々しさに内心幻滅したが、このままさようならというわけにはいかない。

「だ、大丈夫?」

近寄り、体を支えようとしたその時だった。



ピタッと、胸に何かをつけられてしまう。

「何これ……うっ……？」

驚いて胸に張りついたそれを取り除こうとするが、  
体の力が抜けて手が上がらない。  
さらに意識にも影響が出始めた。



「う……ん……っ」

危険を察知して後ずさるが、歩く力すら出ない。それを見てニッコリ笑うのが操哉だ。

「成功だね」

号泣が唾のような純粋な笑顔。

だがその表情が意味するところを知る前に、燕の意識は完全に失われてしまう。





「おっととと、倒れるとは思わなかった」

意識が飛んだことで燕はその場に倒れ、壁にもたれ掛ってしまふ

幸い、沈み込むようにゆっくりと倒れたことで頭はぶつけずに済んだようだ

「それにしても……想定よりずいぶんと耐えたな」

「一瞬で意識を失う計算だったのにな」



間近に近寄り、燕の眼に光が無いのを確認する。  
念のため頬を指でつついてみるが、反応はない。

『……ひひ』

この状態を見て燕を完全に無力化できたことを確信し、  
操哉はほくそ笑んだ。



「千ヨロイもんだな！」

「武道四天王だっけ？ 楽勝じゃん」

正体を現したと言わんばかりに悪い顔を見せる操哉だが、彼の無邪気で純粋な表情も嘘ではない。

明るい好青年の顔、高圧的で悪辣な顔、そのどちらも演技ではなく両方を持ち合わせているのだ。



普段は純粋な好青年の部分が強いかから、裏に潜む悪意に気付くのが難しいから、

殺気が出ているわけでもないのに、燕ほどの武士娘であっても警戒せず近寄り、隙を晒してしまっただのだ。

「さて、と。それじゃあ始めるでしょうかな。」

「ようこそ松永燕さん、これから本当のMC部の活動だよ。」

操哉は腰を落とし、耳元で囁いた。  
「これから洗脳してやるよ。」

「ウチの同好会さ、MC部って略してるけど、本当は  
マインドコントロール部って直球の名前にしたかっただよ。」

「けどそれじゃあ申請が通りそうもなかったから  
MC部として略して、意味はミックスマッシュで  
ことにして申請したんだ。」



「まあ、ミックスマッシュってのも半分は本当だしね。  
他人同士の人格を混ぜたらどうなるのかって興味あるし。」

「いつか人の人格を抽出して、  
ごちゃ混ぜにしてから戻すってしてみたいもん。」

「……今は技術的にできないんだけどね。」

「でも、君につけた装置もなかなか凄い物なんだよ？」

「服の上からでも張り付いた瞬間に強力な薬で、対象の動きを封じることが出来るんだ。」

「さらに記憶や人格、

肉体的情報を全て抽出・解析することもできる優れたもの。」

「しかも装置を外さない限りいつでも自由に脳を弄れるから操り放題♪」

「我ながらなかなかの発明だと思っなあ。」



P.H.E



START



操哉はゲーム機に偽装して作った端末で、燕の脳を弄る。  
内容は事前に考えてきてあるので、それをインフラットするだけだ。

「ふふ、さっ、そくだけと実際に脳を弄ってみようか。」



SELECT

MIND.CONTROL.PORTABLE

P.H.E



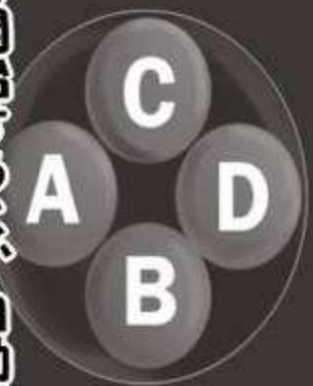
START



Now inputting

「後ほろっと待ってたね」

イベントを開始するぞ、自動で洗脳がスタートする。



SELECT

MIND.CONTROL.PORTABLE

燕の脳を書き換えている最中は胸のマークが赤く光る。

その光を見ながら、た装置のことを振りかえっていた。

意識がある状態でも書き換えはできるんだけど、今の性能だと速く時間がかかっちゃうんだよね。

睡眠中や意識が無い洗脳しやすい状態ですらそれなりに時間がかかるし、あまりに特殊な内容や複雑なインフットともなると数時間必要……。

特に装着してすぐの洗脳はデータの抽出・解析をしながらだから余計に時間がかかる。

装置は直接脳に干渉できるから、強制的に体を支配して人形状態で動かすこともできるけど、そこまで自由には動かせない。

本人の解釈が違おうと予想外の行動しちゃうだろうし、そもそも経験や知識の無い行動はできない。



「まだまだ改善の余地あり……だね」

警戒している相手に装置を取付ける手段や、  
取り付けた後に目を離せないなど他にも多くの欠点はある。

それでもこれだけ小さい装置で人を洗脳できるといのが  
最大の武器で、これが何かを知らない人が見ても不気味な  
装飾品にしか見えないという点も強みだった。



この人のことを良く知ってからボク好みに改造していきみたいから、  
まずはまたこの装置を取り付けられるようにして……  
ボクの言う事を聞くようにしておくだけでもたいぶやりやすくなるから、  
とりあえず特定の言葉に反応して従うようにしておく。

特定のキーワードで従わせるようにはしたが、  
思考停止した人形状態で命令を実行するだけの形を取った。

素の状態に従わせることを思いとどまったのは、  
そこまで受け入れさせるとに精神や認識を弄るとなると  
時間がかかり過ぎてしまうためだ。

その点人形化状態で命令を遂行するようにすれば、  
極端な命令でも抵抗感を抱くことが無いから安全なのだ。



しばらくして燕の胸に付いている装置が青になった。  
入力したデータが全てインフラット完了するまで、  
自動的に青に戻るのだ。

「よし。今度は強制操作のテストもしてみようかな」

操成は燕を強制操作モードにして、立ち上がらせた。



「OK。ちゃんと立ち上がったね。」

「ちゃんと操作できるか不安だったが、簡単な動作だったこともあり上手くいったようだ。」

「つづいて部室内を歩かせたい、適当にポーズをさせてみたいのだが、そのどれもが操作通り問題なく動かすことに成功した。」

「思ったとおりちゃんと動くね。地頭が良いから操作をちゃんと理解してくれるのかな？」



「ふふ、これだけできるなら……アしもしちゃあっかな。」

「本当は意識がある時に試したいけど、もう我慢できないし……どうも……じゃあぶらぶらするしかないでしよ。」

「操哉はしゃがんで立膝になるように燕を操作し、そのままフエラ千才をするように入力した。」

「ん……んぶ……」

フェラチオを入力された燕は千んポを啜るほじたものの、  
動きがぎこちない

「うーん、あんまり上手くないな」

松永燕にしゃぶらせているという事実に興奮して  
勃起はしているが、それ以上の快感は得られそうもなかった。

漠然とフェラチオって行動入力したからかな……。

本人がフェラ未経験っほいし、  
詳細にインフラットするにもフェラチオそのもののデータが不足して  
そのうちセックスマス上手な人からデータ取って、  
気持ちいいフェラをインフラットできるようにしよう。

「ん、んん……」

「ボクも経験無いかうこのままでも  
そのうちイケるかもしれないけど……」

「この方が楽だし気持ちいいよね。」

燕の頭を掴み前後に腰を振る、所謂イラマチオをする。

「んっ、んっ」

喉の奥へと千ンポを押し込むように腰を振ると、燕も表情は変わらないが少し苦しそうな声が出る。

一方で操哉の方は一気に快感が高まっていた。

「あ、これいい。オナホールより全然いいや。」

激しく抜き差しすると、時よりカリの裏筋が舌にあたり、その度にビクビクと全身が震える。

高まった快感に流されるようにさらに激しく腰を振ると、堰を切った白濁流が一気に尿道を駆け抜け抜けてくるのがわかる。

「ううう……い、イイク！」

「ふっ……！」

ドブツビュルツと淫靡な音を立て、熱く白濁したザーメンが燕の口に注がれた。

「ふっ……」





「気持ち良かったじ、ごっくんするとこまで見られたし満足だよ  
それじゃ装置を取り外そうかな。  
服の上についてるのはいくらなんでもまずいし」

制服の上から胸に着いている装置に手をかけた、  
その時だった。





「あーいけない！」

掴みかけた手を止め、慌ててポケットからハンカチを取り出す。

「口元の精子拭いておかないとさすがにヤバイし、記憶も弄っておかないとまずいよね」

操哉は記憶を改竄している間、精液を拭ぐってやった。

「ふふっ、気を付けないとね」

あぶないあぶない。さっ、き外してたら大変なことになってたかも。

今後の下ごしらえに罪悪感を強烈に植え付けてはおいたし、僕の電話には必ず出るようにもした。

あとは今日の出来事は僕の告白をフツただけで、そのまま帰宅するつもりだったって記憶にして……と。

記憶の改竄だけだからこの入力はすぐに終わるかな。

予想通り記憶の改竄は数分程度で終わり、廊下で目が覚めた燕は意識の空白に少し戸惑いはしたものの、何事も無く帰宅した。

強烈な罪悪感を胸に抱いて……。



一方の操哉もあのあとすぐに帰宅していた。  
燕のデータがぎっしり詰まっている装置を  
手に入れたのだから無理もない。

情報は機械で読み込むこともできるが、  
この装置はより正確かつ直接的に理解する出力方法がある。



それは直接体につけることで、  
燕の全てを脳で読み取るという方法だ。

「……良しっど。それじゃ、読ませてもらおうよ」

「記憶も感情も全てね」

装置を起動させると、胸の光が青から赤へ変わり、  
情報が出力され出したことを示した。



出力された情報が頭に流れてくる。

燕の全てを知っていくことに快感を覚えるのか、操哉は恍惚とした表情を浮かべていた。

「ああ〜いいねえ……すっごい濃厚な人生歩んでるなあ」

「この相手の全てを覗き見る外道でハレンチな背徳感……」



「あゝたまらない。うち、勃起しちゃっつよ」

家族しか知らないこと、本人だけの秘密。

これまでの人生全てを覗き見るのは、同じ覗きでも着替えを覗くようなのとは比較にならない背徳感があった。

お父さんとお母さんのこと好きなんだね。うわ〜……若いころのお母さん美人！

え？うわ、すごいな。今でも美人！老けないんだね！



オ十二ー経験はあり……けどやっぱり処女かぁ。

ふふ、結構ガード固いんだなあ。

次々と秘密が露わになるなかで、気になるところも出てくる。

九鬼紋白に川神百代を倒すよう依頼されているという記憶だ。

だから川神百代と仲良くしてたとは……すごい裏を見ちゃったなあ。

「……ん？」

川神百代に対する記憶や感情を掘り下げてみていくうちに、さらに大きな感情を発見する。

おや？

……おやおやおや！

それは、燕の抱く恋愛感情だった。

なるほど、直江大和先輩のことが気になってるんだね！

僕を振った時の言葉、アしは嘘じゃなかったってことか……。

いや……この感情は……「気になる」ってのが嘘だね！  
直江大和が見た目も性格も好みで目が離せない……こりゃ相当好きだね！

「ふくん……そっかあ」



この感情良いね！

対象を弄るだけで別人を好きにできちゃうから、  
こういう感情を持っていると負荷が少なく脳を弄れるんだよね。

「恋愛感情、ごっそりもらっちゃおうっしょ」

邪な計画を思いついた操哉は、  
性的興奮を燕の記憶をおかずに解消したのだった。





翌日、燕は川神学園の屋上で考え事をしていた。

天羽操哉の告白を断った前後の記憶に違和感があり、  
何かかひっかかかってスッキリしないのだ。

どうしても胸の奥に嫌な感じが残っているんだよ。

断ったからとがさういっただけじゃなくて……。

燕は違和感の奥にあるものが  
自分の領域を犯されたような危機感や嫌悪感だと感じていた。

もう一度天羽操哉に会ってみれば原因がわかるかもしれない。  
そう思っ  
て移動しようとした矢先、電話がかかかってきた。

「登録してない番号……誰だろう？」

知らない番号だが、なんとなく出なくてはいけない気がした。

「はい、松永です」

「あ！燕さんですか。良かった、出てくれたんですね。」

「えっと、どなたですか？」

「ああすいません、僕です。天羽操哉です！」

今から会おうとしていた相手からの電話にドキッとなるが、燕にとっては好都合だった。しかし、ここでもまたある違和感が。





あれ？  
なんで私の番号知ってるんだろう？

そう思った矢先だった。

「納豆女は無様な人形」

「えっ………」



意味不明な言葉を言われた途端、意識が無くなる。  
いや、意識が無いと言うよりは意識がないと言う方が正しい。

視覚も聴覚も触覚も、  
思考も正常に働いているがそこに自分がいなくなった状態。  
意志の無い人形、そんな状態に燕は陥ったのだ。

そんな人形状態になった燕に、電話口から命令を与えられる。

「ミックスチャレンジ部にすぐ来ること」

「今日、他に用事があればキャンセルすること」

「部室内では天羽操哉の命令に従い、行動すること」

これらを命じ、その内容を操哉は復唱させた。



「ミックスチャレンジ部に……すべ……行きます……」

「他に用事があればキャンセル……します……」

「部室内では……天羽操哉の命令に従い……行動する……」

復唱を聞いて、操哉は電話を切った。

通話が終わると、燕は命令通り即行動する。

「用事をキャンセル……しなくちゃ……」

携帯を使い、友達にメールでドタキャンメールを送る。  
内容は「今日 行けなくなった ごめん」とだけだ。

送信が終わると、MCの部室へと移動した。

屋上から階段を下りていけばすぐなので、  
一分とがからずに着いた。



「失礼します……」

部室にやってきた燕はやはり人形状態で、意志の無いまま行動している。それを確認して、操哉も安心したようだ。

「とりあえず傍にまで、パンツ見せてもらえるかな」

「はい……」





スカートをめくりあげ、パンツを見せる。

下から見上げても決してパンチラしない燕が、男にパンツを見せている。

「素直に見せてくれて嬉しいよ」

「ふふ、可愛いパンツだね」

今の燕に意志はないから抵抗感など一切なく、ただ指示された通り行動しているだけだ。

普段なら絶対断るようなことも、意志の無い状態なら簡単にさせてしまえる。



そんな燕を相手に操哉は下着越しにアソコの匂いを嗅いだり、指でふにふにと触って楽しんだ。

「アソコってこんなに柔らかいんだね。ふふ、匂いといい、本当に僕好みなんだなあ。」

「……おっと、今日は下半身より上半身が目的の日だった。」

「パンツ見なくなっちゃってうっつい。じゃ、上半身脱いで。」

「はい……。」



「おお……」  
服を脱ぎ露わになった豊かな二つの丘、  
たわわな果実のように実った乳房に目が釘付けになった。

操哉は両手で胸を包むように触れる。

ピタッと掌が触れると、  
沈み込むような柔らかさと少しの反発を感じた。

「ぞっかあ……これがあっぱい……いいわこれ」

むにむにとした心地良いあっぱいの感触を楽しむと、  
今度は乳首で遊びたくなる。  
コリコリと手でつまんでみたり、舌で舐めたりした。

「ちゅるるっ……」

ん……乳首は舐めるより舐める方が好きかも。

人形状態なので反応はないが、  
それでも十分過ぎるほど燕の胸は操哉を楽しませた。

ひとしきり満足した操哉は装置を取り出すと、  
再び燕の胸に装着した。

「うん、いい感じだね。」

服の上からではなく肌直接接触は、  
接着している『脚』の部分の厚みが数ミリ程度と薄い。  
機能が集中している発光体の部分は1cm程度あるが、  
胸の谷間に隠れているので服を着れば目立たない設計に  
なっている。

服の下に隠してしまえば、  
日常生活の中でも蒸を操れるというわけだ。



装置の上からフラを着させても邪魔にならなかった。  
しかし多少窮屈ではあった。

「うーん……ワンサイズ大きいフラ買わせればいいのかな」  
「あ、いやまてよ……そうだ！」

操成は燕のフラを外し、燕の思考を書き換えることにした。

胸の装置はフラの代わりにつけているという認識にして、  
風呂や寝る時でも外さない物だということにした。

「なんだ、お嬢はいいな。」

このあと燕に命令して制服を着させる。  
理由は、このあとすることを終えた時に服を着させるのが  
面倒だからだ。

「さ、お待ちかねの……初体験」

「ふふ、これから処女奪っちゃうわけだけど、僕の童貞も捧げるんだからお互い様だよな？」

「いやむしろ感謝して欲しいくらいだよ」

「僕の童貞と君の処女じゃ全然……  
ぜんっぜん釣り合い取れてないんだから」

勝手に処女を奪うのに感謝しろとまで言う操哉の発言は本心からで、本当に自分の童貞の方がはるかに価値のあるものだと思っでいるのだ。

だから燕に対する罪悪感や微塵も感じていない。

「ちょうど良い高さの机も用意してあるんだ」

「パンツ脱いでからそのテーブルに仰向けで横になって、足開いてくれる？」

「は……」

足を開いて横になった燕の前に立ち、  
無防備に開かれたアソコにチンポを宛がう。

「ふ、この辺かな？」

入口を確かめるように亀頭の先でなぞり、  
押し込めそうなどころを発見する。



「なんが下キアキしてきた……！」

亀頭をあてがっただけでも童貞にとっては興奮材料だ。

操哉も自分で感じた事の無い興奮に、  
下半身に力が入っていた。

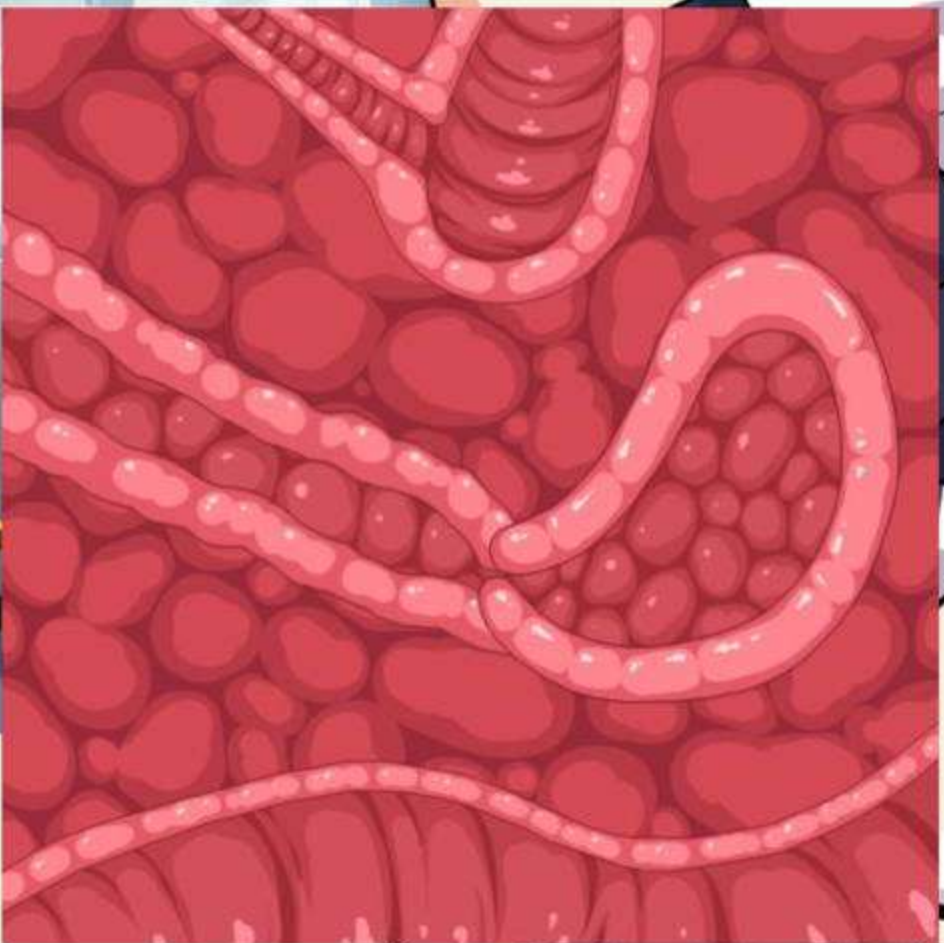
亀頭の先端を少し押し込むと、意外にもそれほど抵抗はなく、そのまま亀頭全体を入れることが出来た。

「あ、熱い……！」

「う、このまま押し込んでいいのかな……」

亀頭にじんわりとアソコの熱が伝わり、さらに興奮が高まる。

さらに奥まで侵入しようとして腰を突きですが、さすがに処女だけあったところから先はかなり窮屈さを感じた。



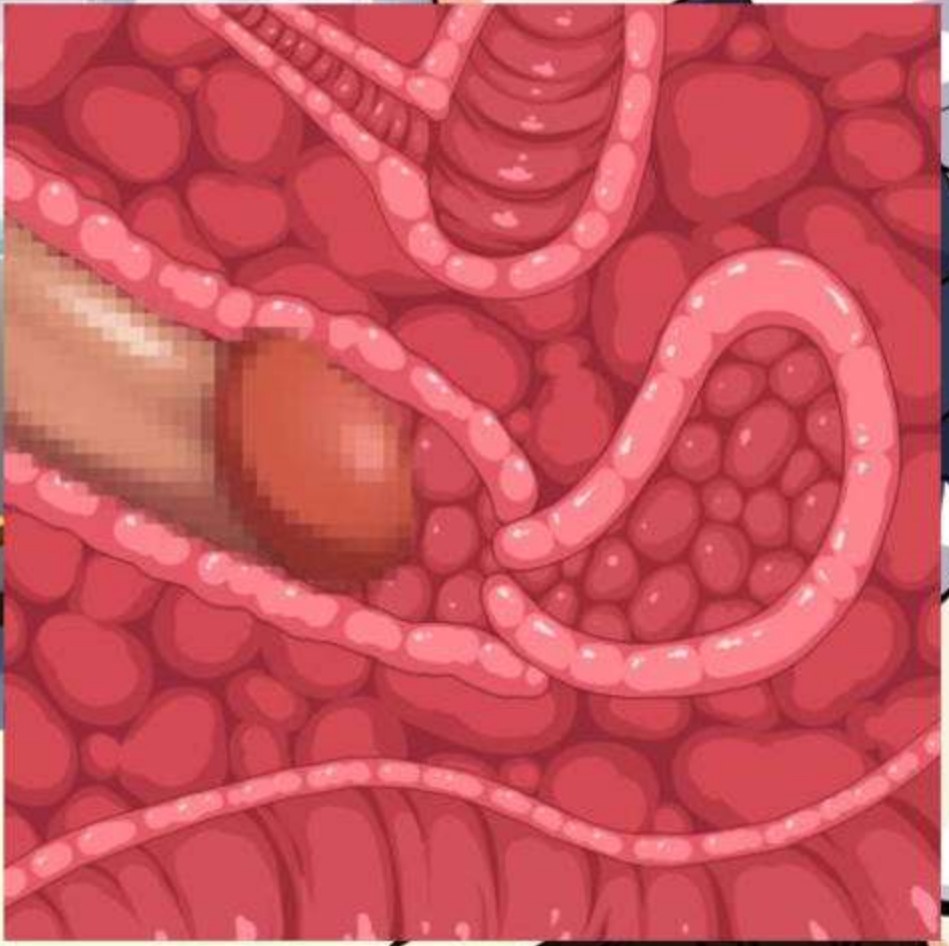


「これはかなりキツイね……けど……」

みっちりと隙間なく埋められた膣肉を  
ガクガクに勃起したチンポが押し広げながら侵入していく。  
感触をじっくり感じながら膣内を抉るように蹂躪し、  
最奥を目指す。

「んっ……んん……」

ずぶ…ずぶぶ…と肉壁を掻き分け、興奮を必死に押えて  
少しずつ征服するかのようにチンポを中へと押し込んでいく。

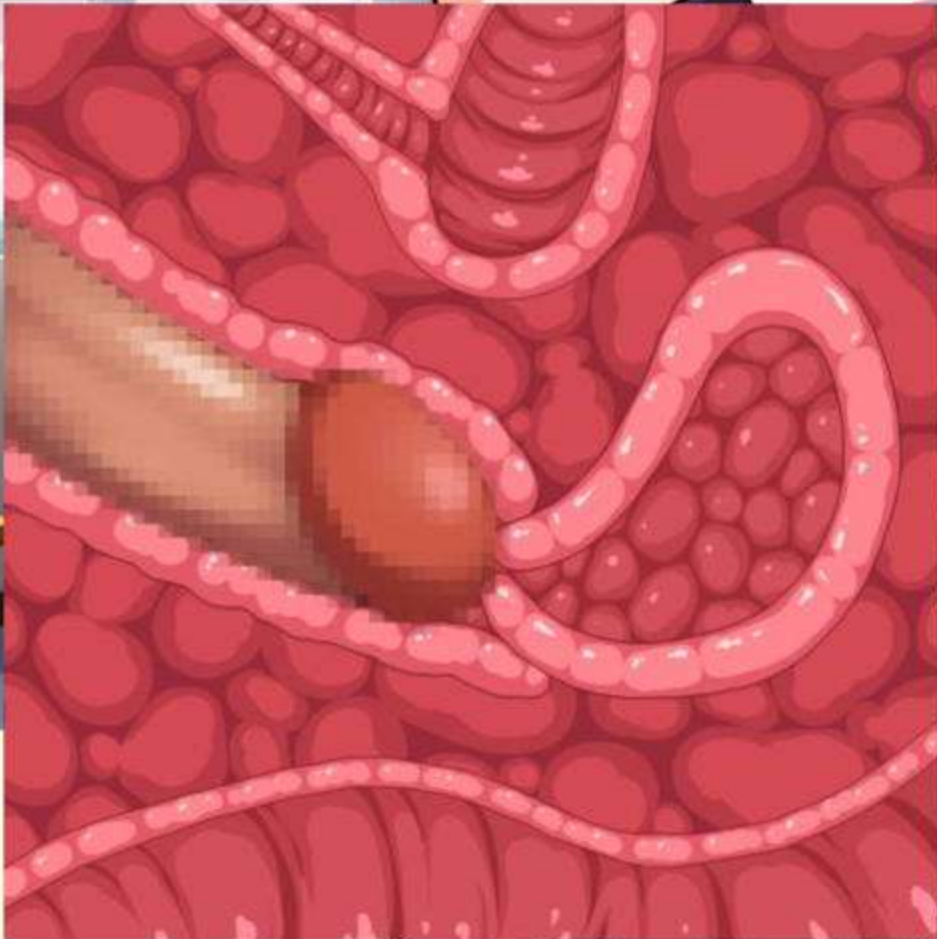


「あ〜……これやばい」

先端が最奥に到達すると、  
ちゅーと千シポの根元までマシコに埋まり、  
竿全体が完全に臍肉に包まれた状態となった。

「僕の千シポは標準サイズくらいだと思うけど、  
それでも奥に到達できるもんなんだね」

「うっ、気持ちいいっ。  
これで動がしたうっうっうっ……ちゅーんたろっ……」

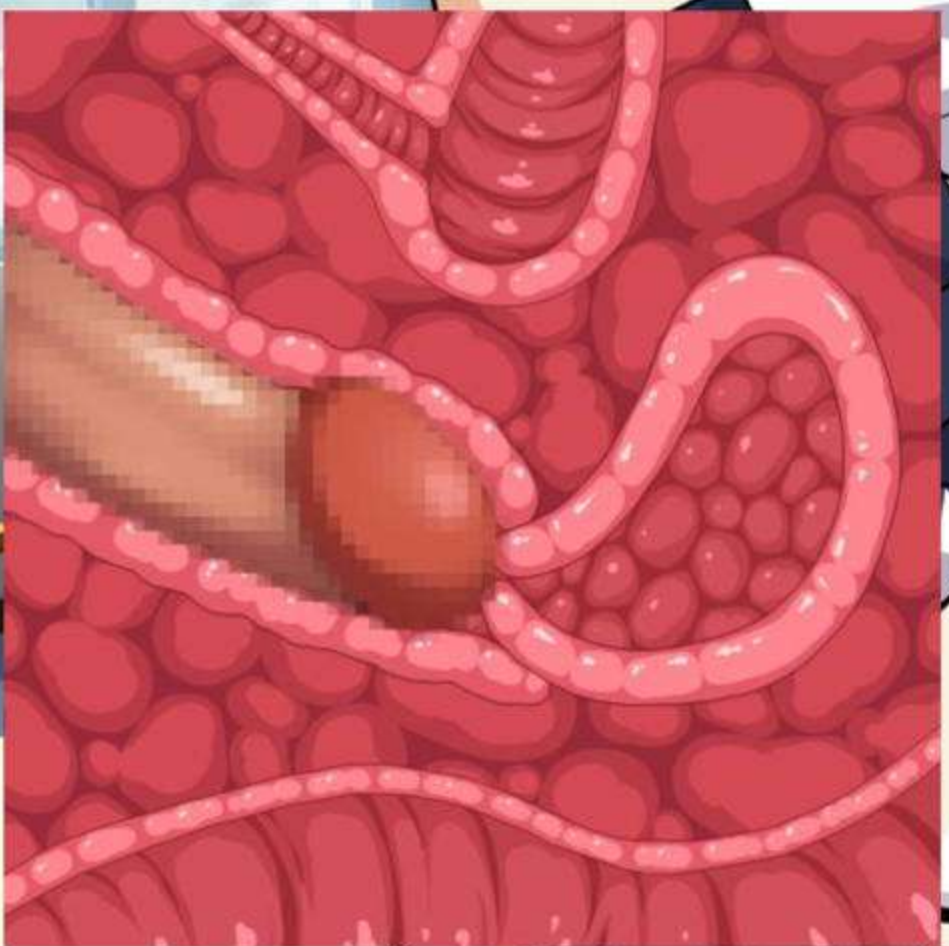


締めつけがキツいので激しいピストンはできごつもなく、  
ゆっくりと腰を前後に動かして抜き差しする。

引き抜くときにカリが膣肉と擦れあい、  
自分の手でするオナニーではありえなかつた快感がチンポから  
電気がはしるように背筋まで到達する。

「はうっ！」

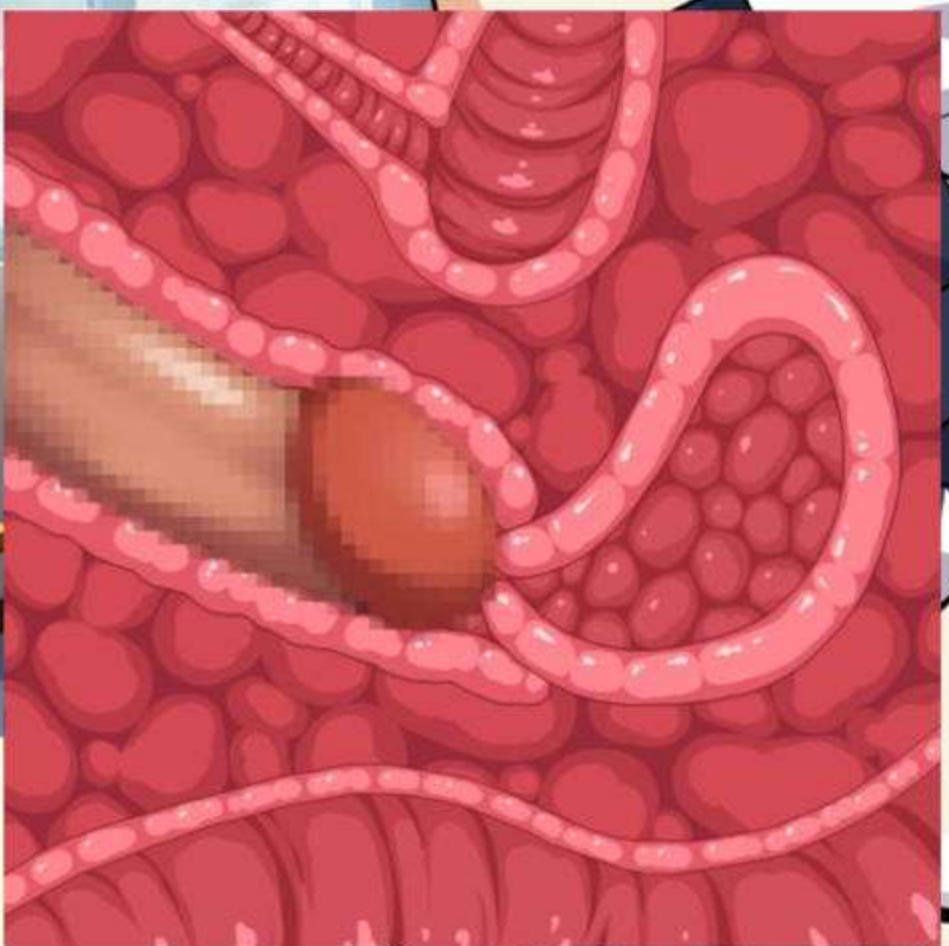
「す、すごいっ、これ、お、オナニーと全然、全然違うっ」



一突きするたびにタマから吸い出されるかのような射精感が押し寄せてきて、高まりが抑えられそうにない。

ピストンしている間、瞳からは破瓜の印である血が出ていたが、興奮でまるで気にならなかつた。

何度かピストンすると、アソコも自然な反応で濡れはじめ、滑りが良くなってくる。

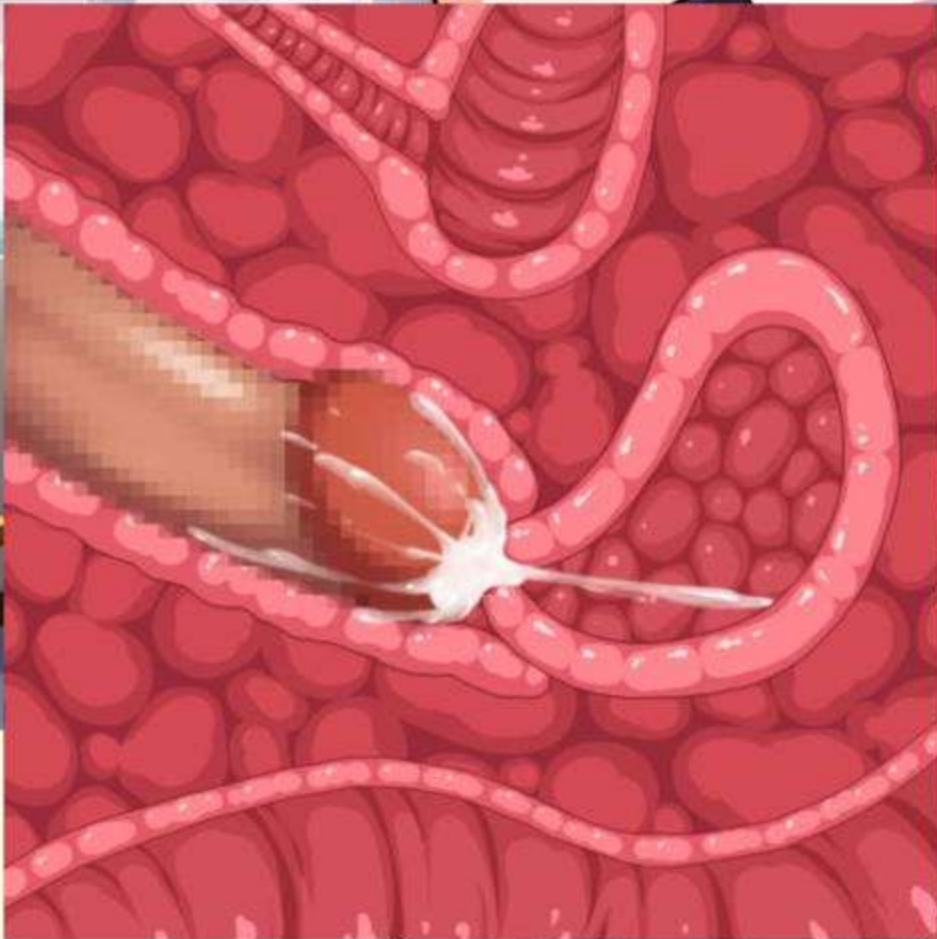


「うっ！で、はぁうっ！」

処女特有の締めつけの強さに、濡れて滑りが良くなったことで干んポの感度も増す。

こうなると童貞の操哉が我慢できるはずなどなく、亀頭に射精間際の重く激しい快感が集中しそのまま暴発した。

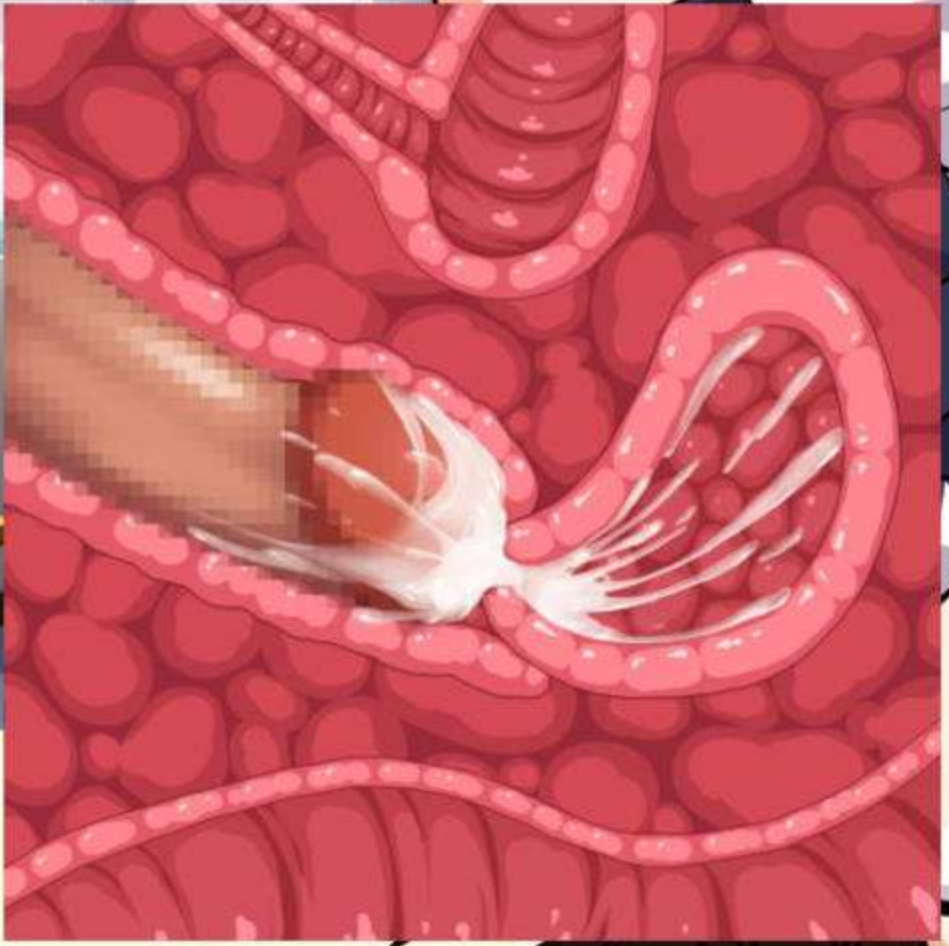
「あぁ、いっ、はいクッ！」



「うっっっ！」

ドクンドクンと血管が脈打つように  
先端から精液を吐き出し続ける射精。

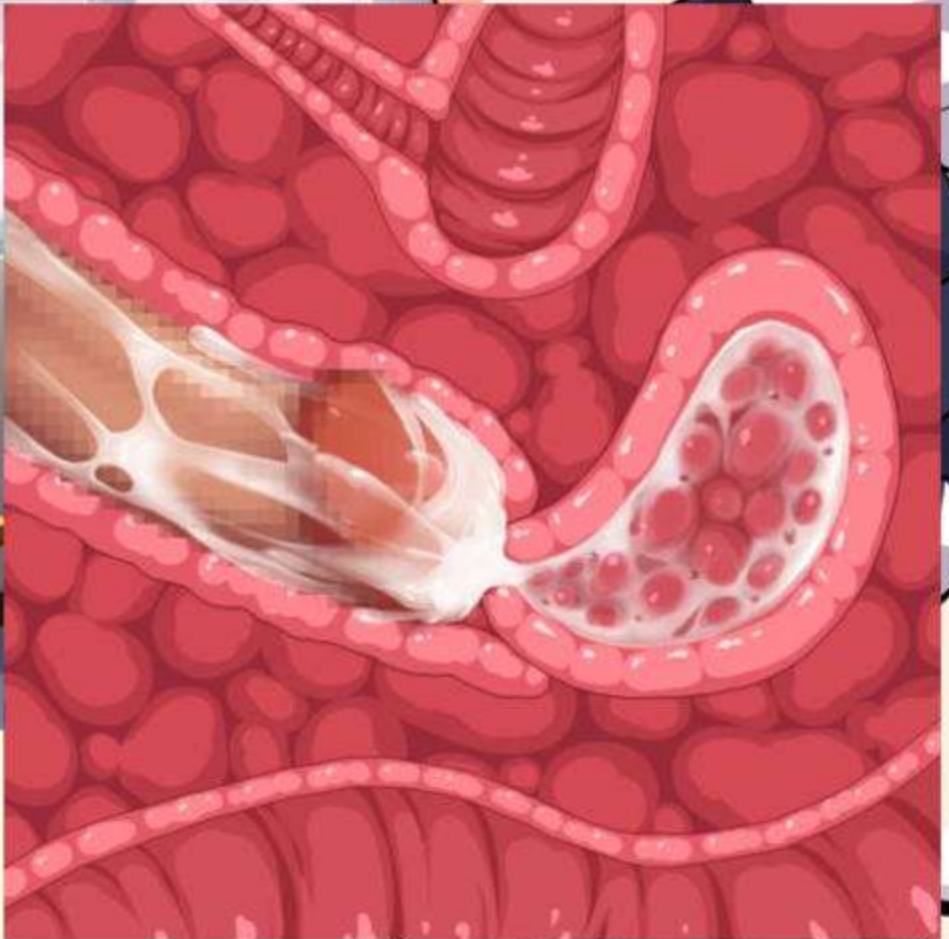
ビクッ！ビクッ！と竿が跳ねるたびに先端からいつまでも  
精を吐き出し続けたその時間は  
操哉にとつて至福の時となった。



「ふう〜」

「……間違はなく今までで一番気持ちいい射精だったよ」「  
「こんなだ……んっ、マンコが気持ちいいなんてね」

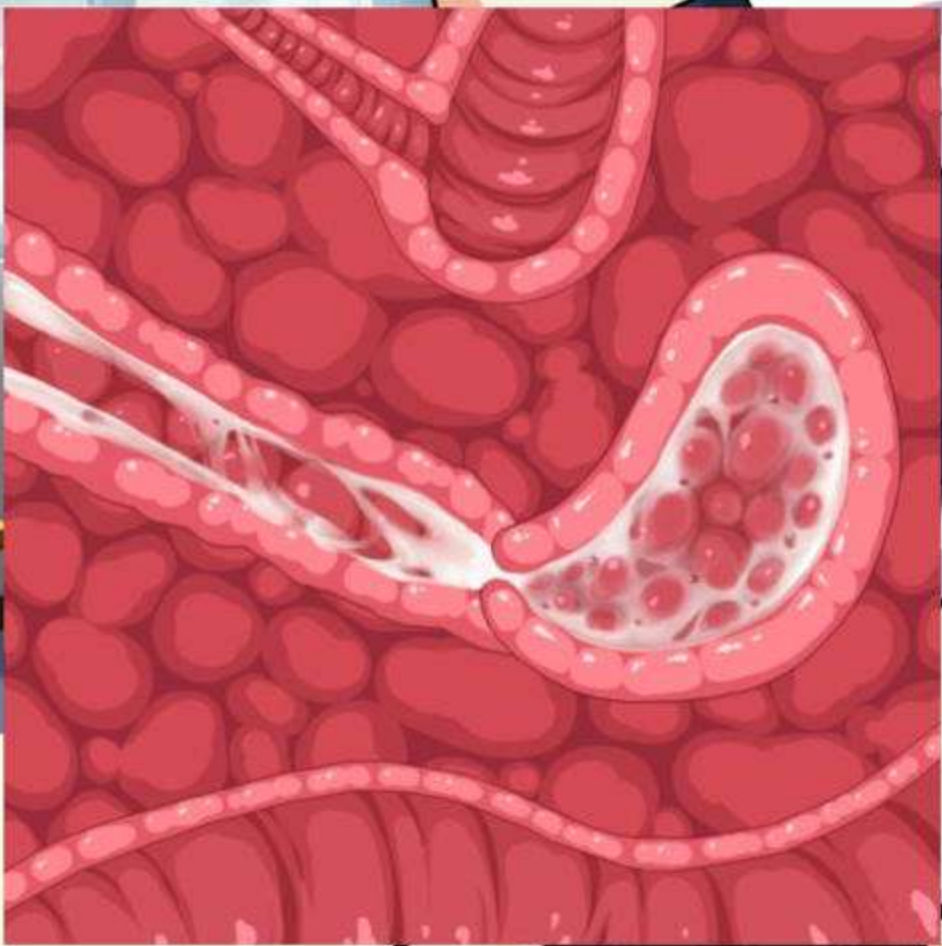
射精し終わってもまだ余韻が残っていて、  
これほどの快感は二度と忘れないだろうと思っただのと同時に、  
何度でも味わいたいという欲求も湧いてくる。



千んポを抜く時も、  
敏感になつた亀頭と竿が反応してビクビク跳ねる。

「んんん」

スポンツと千んポが抜けると、  
燕のアソコから精液と破瓜の血があふれ出てきた。





「うわ~~~~」

流れる血と精液を見ると、改めて松永燕を犯したんだという達成感と征服感が湧いてくる。

「このマンモで童貞卒業したんだ……ふふ」

チンポ抜いたら結構溢れてくるね。

これはちゃんと記憶調整しないとダメだねー！  
痛みとかも消しておかないと。

それとこのマンモはさっさと処理した方がいいな。  
嫌いなんだよね、アソコのもじやもじや。

操哉は再び装置を使い、一連の出来事に代わる記憶を与え、  
屋上でずつと考え事をしていたことにした。

数日間は破瓜により痛みを感じないように、  
膣と腰回りの痛覚も調整した。

「……あれ？」

燕の意識が戻った時、既に夕方になっていた。

私……あれ？あ、ぞっか、ずっと考え事してたんだ。

でもなんだろう。

何か……前も感じたこの違和感……。

記憶はしっかりかきと繋がっているが、  
やはり意識が飛んだという感覚がどこかにあり、  
それが違和感になつていた。

うーん、体も重い気がするし……やっぱり何かへん。

破瓜の痛みは消されたが、疲労が抜けているわけではない。  
痛覚がほとんどなくなっている腰回りは普段と感覚が違うし、  
急に消耗したような謎の疲労感もある。

何かがおかしいと感じるが、思い当たる節も無い。

「……今日はもう帰ろう。」

燕は帰宅し、  
疲れを取るために長めの入浴をしてから就寝した。



「なんか今日はほんとに疲れたよ……」

自宅で就寝した燕は、電気を消して天井を見上げる。疲労感がとれほいいいなど思いながら瞼を閉じ、そのまま眠りに落ちたい。



「お……おっ……」

眠ってしまった。眠ってしまった。

燕の胸についている装置の発光体が赤に変わったのだ。  
これは装置が彼女の脳にアクセスしている証だ。



装置を起動したのは当然天羽操哉だ。

「まぐまぐ……っくん」

夜食を食べながら燕が寝るのを待っていた操哉は、  
脳が睡眠状態になったシグナルを確認して装置を起動した。  
夜寝ている時であればより確実に洗脳可能で、  
かつ時間もたっぴりと取れる上に邪魔が入る心配もない。

「思ったより寝るの早いんだね」

「まだ十時だし、これならガッツリ確実に洗脳できるね」



P.H.E



START



「さーで、まずは恋愛感情をこっ、そりいただいちゃおっと」  
「直江大和への愛情はもちろん、他の人への好意も何人分か適当に奇せて集めて、僕に集中と♪」  
A  
「ついでに言う事を聞かせる時、人形状態じゃない  
平常時にいいなりに出来るワードも入力……と」  
SELECT

MIND.CONTROL.PORTABLE



「あとはそうだな、僕以外の男とは接点を持たないようにしちゃおうと」

「余計な邪魔が入っても嫌だしね」

「特に直江大和にはできるだけ近寄らないように、無意識に距離を取るように……というより拒絶させる」

本当は僕以外の男そのものを毛嫌いするようにしちゃいたいけど、変化が分かりやすすぎてトラフルになりそうだし

だから……徐々にそうなるようにしよう。

僕以外の男はこれから一切好感を抱かないように……ね。

操哉以外の男に好感を抱かないということは、燕の中で増していく感情は嫌悪感だけということになる。

普通は人と接すれば大なり小なり良い感情と悪い感情が湧き、それらを相殺して良い感情が勝れば好き、悪い感情に傾けば嫌いという風に分かれていく。

そのバランスを悪い方にだけ傾けるといことは、今後燕は操哉以外の男を日増しに嫌いになっていくことであり、操哉が何もしなくても燕の中で位置が上がる状況になる。

もちろん操哉に対して恋愛感情も与えたので、より顕著に燕の気持ちをも自分に向かせることができるというわけだ。





翌朝、昇降口にいた燕に操哉が話しかけてくる。

「燕さんっ。おはようございます!」

「おはよー」



「うわー、朝から燕さんに会えるなんて嬉しいなあ」

「う、うん」

あれ？私も……嬉しいかも。

操哉との会話の中で、昨日までと違う自分の気持ちに燕も気付く。

普段は好きないような緊張感もあるが、それは好きな人に対して感じるいわゆるトキメキの類だ。

「どうして燕さん」

「何？」

「今度その、僕と遊びに……」

途中まで言いかけた言葉が止まる。



「……だ、ごめんなさい！」

「えっ……なんで謝るの？」

「だって……すいません。僕、フラれたばかりだ。て言っのにデリカシーないですよ。」

「ごめんなさい！」

頭を下げた操哉は走って自分の教室に行っていました。

「行っちゃった……」

残された燕は操哉の慌ただしさに振り回されてしまったが、嫌な気持ちは湧かなかつた。

まな……デートに誘おうとしてくれたあなたも。

そのまま誘ってくれればOKしたので、残念な気持ちが残ることになった。





自分の気持ちの変化に戸惑いが無いわけではないが、急に強い愛情を感じて「目惚れに近い感覚に陥っている。」

「あんなこと言わなきゃよかった……」

そう呟いた時、メールが来た。

「ど、操哉くん!？」

「……えええっ!？」

なんとメールの差出人は操哉で、その内容を見て二度驚く。

「もしよかったら、放課後うちにお茶しにきませんか?」  
「……ていきなり家に誘ってくる普通!？」

さすがに性的な下心を持って誘ってきたとは思えないが、それでもいきなり家に誘われたことは燕を大いに動揺させた。



「な、何も起きやしないよな」

燕は行きますと返信した。

フラれて動転しているのか、気の迷いなのか、あるいは焦っているのかももしれないがとにかくもう一度誘ってくれたのだ。この機を逃すわけにはいかない。

家という場所は気になるが、ここで断ればもう二度と誘ってはくれないだろう。

むしろ燕の方にチャンスを逃したくないという焦りがあった。

メールはすぐに返ってきて、そこには住所が書いてあった。

お、お土産買っただけかなへんや。



「あ、あのマンツインだよな……。  
このマンツインの機体じゃあ絶対おのなるんはないな。」

ドキドキしつつつやってきた燕だが、  
いざ実際にマンツインに来るとかなり緊張した。

「あ……は……」

深呼吸して落ち着いてから、  
インターホンを押して、オートロックを開けてもらう。

エレベーターに乗っている間も、  
平静さを保とうと必死に高鳴る鼓動を抑えた。





「燕さん、ようこそ。来てくれて嬉しいです！」

「お、お邪魔します」

「あの、これお土産」

「うわー！なんだろう、ありがとうございますっ」

操哉くん……か、かわいい。

無邪気にお土産の封を開ける操哉に、胸がときめく。それを誤魔化すように部屋を見渡すと、あることに気付く。



高級マンションの上層階だが、1LDKの間取りはどうみても家族で住んでいるようには見えない

親はどうしているのかと自分から聞くことはできなかったが、そのあたりの事情は操哉から話してくれた

「うちは両親は海外にいます」

「実は日本での事業にちょっと失敗しちゃって、海外で巻き返そうと頑張っているんですよ」

「そうなんだ」

「……」

親がいないと思って緊張していた燕だが、一人暮らしの男の家に来てしまったという事実の方が緊張した。操哉も男、なにがあってもおかしくないからだ。



「ど、どころで操哉くん、その服……」

「ああ、僕カープファンなんですよ。」

「燕さんが来るまで、デーゲームを見て応援してたんです」

「へー、最近強いチームだよな！」

「私は野球とか詳しくないからわかんないけど、女子にも人気なんですか？」

「はい！良かったら今度一緒に見に行きましょうよ。」

「関東でも試合見れますから、僕がチケット取るんで！」

「う、うん……」

「可愛い……と強引だけど……とこもまた……。」



勝手に野球観戦を決められたが、全然嫌ではなかった。  
むしろ嬉しく、興味の無い野球も見たいという気になった。

「どうりで燕さん」

「何？」

「今日は空気が澄んでますね」

「ん？そっかな」

「ふふ、そうですよ」

操哉の言った言葉は燕に対するキーワードだった。  
これを燕が聞くと、操哉の言ったことを何でも当然と思い、  
命令にも抵抗無く従うようになるのだ。

どこでも使えるキーワードにしたのは、普段の燕を操るために  
他人がいても使える言葉を選ぶ必要があったからだ。



操哉はさっそく、燕に対してルールを与えた。

「燕さん、今日この家の中では下半身はパンツだけているのが決まりです」

「おしっこに行きたくなったらパンツを僕の前で脱いで、限界まで我慢すること」

「限界が来たたら棚にあるジヨッキ দিয়ে、自分で飲んでくださいわね」

「ウ千のトイレは僕専用なんだから、使っちゃだめですよ？」

「……うん。わかった」

普通に言ったら即通報ものなルールを聞いても、

燕の反応は普通だった。彼女にとって当然のことだから、特に変わった反応はしない。

そして、当然のことだから言われた通りスカートを脱ぎ、下半身はパンツだけになる。



よし、ちゃんと聞いて聞いてみるな。

燕の行動を見て思わず悪い表情が出てしまう操哉だが、他の相手ならその表情の意味を考える燕も好感を植え付けられた今はその程度は全く気にしない。

「ねえ、操哉くんも脱がないと」



「え？あ、そうですね……」

そっか、あの説明だと下半身パンツの指定は僕も対象か。

冷静な燕は操哉の表情の変化は気にしなかったが、  
ルールの矛盾はすぐに突いてきて  
操哉も慌ててスポンを脱ぐ

「い、今脱ぎますねっ」

「うん」

ぞ、操哉くんのパンツ姿が見れちゃうんだね……。



「脱ぎました」

「これで良い、だね」

操哉くん……トランクス派なんだね。

子供っほいかラフリーフ予想だったけど、これはこれで……。

「燕さん、とりあえずテレビでも見ましようか」

「おかしと飲み物持ってくるんで、適当に座ってください」

「うん。ありがとう」

一緒にテレビを見たり、会話して過ごす。

操哉も手を出したりはせず、純粹に会話を楽しんだ。

そうしてしばらく経つと、燕がパンツを脱いだ。





おっ？  
もうトイレに行きたくなかったのか。  
思ったより早かったね……ん？

緊張で飲み物を多く口にしたらからか、  
燕は予想より早く脱いだ。だが、股間に視線を送った時だった。  
それ自体は良かったのだが、





「あ、ううん！なんでもないですよ」

「なんとか取り繕い、その後も会話を続ける。  
小一時間が経った時、燕が話を変えた。」

「どうしてなの、操哉くん……ジョッキ借りていいかな？」

「あ、限界ですか？」

「いいですよ、棚にあるの好きなの選んで使ってください」

「うん、じゃあちよっと失礼するね」

ちよちよく限界か。くたろない会話に付き合っの疲れちゃったよ。

燕がジョッキにおしっこをして、それをゴクゴクと  
飲んでるのを鑑賞しながら、操哉はPSPを取出した。  
飲尿が終わったのを見て、意識を落す。

「う……………」

「マン毛判ってから来させるべきだった」



「ま、楽しみが増えたと思えばいいか！」

悪い顔を前面に出した操哉は、燕をテーブルの上に乗せた。  
開脚させ、剃毛を自分の手でするつもりだ。

「このようにカキカキしてやるわー」



「アハハ、剃れる剃れる！」

何かのスリッパが入った様に昂りながら、

髭剃り用のムースを使用しているが、  
思いのほか良く剃れた

大事なところに傷がつかないように気を付けて、  
全ての毛を剃っていく

元々手入れもされていない陰毛は、  
大した量ではないのであつという間に終わった。

「綺麗になったわ！」

「あーっ……ここからが本当のお楽しみタイムだ」

パイパンにした燕の体を楽しんだ操哉は、  
燕の記憶と認識を調整して帰宅させた





「ま、気のせいだよわー！」

違和感を感じると、それは気のせいだと強く思い、すっぱり気にしなくなるようにしていたのだ。

そして気にしないと自分で決めると、それがトリガーとなってとても晴れやかな気分になるようにもしてある。

違和感そのものを消すのではなく、違和感を自己処理させることで解決する方法は燕の様なタイプには特に有効だった。

気持ちが晴れた燕はこの日もぐっすり眠ったが、その間 胸の装置は赤く光っていた。



翌日は休日で、燕も予定が無い。  
そこで彼女は「レンタルビデオ店」に行くことにした。

新作でも借りて、今日はフェラチオの練習しようかな。

ふふ……♡  
私がAV鑑賞しながら、Hやチをマクマクニマクマへのが趣味なのを知って、  
幻滅されちゃうかな

でも……たかがアノキ……興奮してグァッ……♡

燕は人目を避け、川神から離れたショップに行った。





「えっ……」

フエラチネってコーナーはないか。  
パンターズはあつた。ほらの探せほらいかな。



午前中だったのだから、ほとほと客はいなかったが、  
それでも何人かはいた。客はこのコーナーに燕の様な美少女が  
堂々と入ってきたことに驚いていた。



夜、操哉にメールが来る。  
寝る前に一日の報告メールを送るように脳を弄ったからだ。

「ふむふむ……」

メールにはフェラ千オの練習の為にAVを借りたことと、  
仮想フレラ千オの相手に操哉を妄想したことが書かれていた。  
ずっとAVを見ていたせいで七回もオナニーしてしまった  
ことも赤裸々に書かれていて、  
その内容はメールとしてはかなりの長文だった。



「いいねいいね！」

「練習したフェラがどれくらい気持ち良いかも体験したいし、そろそろ本格的にアタックかけてみようかなー」

操哉は休日明けの月曜日、さっそく行動を開始した。



「燕さん、こんなところで会えるなんて嬉しいですよ」

屋上に燕がいてるのを確認し、偶然を装ってちっぴをかきかける。

「操哉くん……わ、私も会えようわじつに」

明らかに好意を向けてきている燕に対し、今回は大きく揺さぶりをかけるのが目的だ。

「燕さんと話していることが楽しくてです」

「ああ……もし燕さんと恋人同士だったらなあ……」



「えっ!?!」

「あ、いえ、すみません。忘れてください」

「ボク、フラたのにまたまなごと言っ……」

「う、ううん。あ、あの、そのね」

動揺した燕がオドオドしているのを見て、逃げるように去る。

「そ、それじゃあ失礼しますッ」

「あっ!待って!」

「……はあ、行っちゃった……」

この揺さぶりがどう影響したかは、夜の報告メールにて明らかにした。



燕は今日のことがあって、自分から操哉に告白する選択肢も頭を過ったが、冷静に考えて一度フツッて傷つけてしまっただ側がすぐに告白することはできないという結論に達した様だ。

「だけと操哉への気持ちは高まり続け、どうすればいいのかわからない。」

葛藤に葛藤を重ねている状態だ。

「なるほどね……。思ったよりいい方向に向かっているじゃん。」

「僕をフツッた罪悪感でもう一度告るの躊躇ってるわけだ……。」



「だったら……。」

「もう一度告る方法を与えてやあげればいいわけだわ。」

「なるほど、よかったな……。」

操哉は装置を起動し、燕に新たな認識を与えることにした。

P.H.E



START



善は急げだし、  
このインフ、<sup>↑</sup>が終わったろう目を覚ませせて即行動させなせう。

「上下座してフツた自分が愚かだったことを認めさせて、  
その上でなんでも言う事を聞くから彼女にして欲しい。」と懇願させる。  
ふふ、僕好みに染まっ、てくれるいい彼女になりさう。  
A B C  
「浮気OKでなんでも言う事を聞きたいなり彼女にしちゃえほ  
他の女を墮とすのにも役に立つだろうし、この案でいい。」

SELEC

MIND.CONTROL.PORTABLE



川神学園は素敵な女の子ばかりだね。

早くみんなを犯してあげたいなあ。

強く、美しい武士娘達を犯す光景を思い浮かべながら、  
燕の頭を書き換えていく

一時間で終わり、少し間をあげて燕を睡眠から目覚めさせる。



MIND.CONTROL.PORTABLE

P.H.E



START

SELEC

「う……ん……」

夜中に目が覚めた燕は、少し頭がぼーっとしながらも、枕元の携帯を手にとった。

「操哉くん……電話しなくちゃ……」



「天羽です」

「松永です。夜遅くに電話かけちゃってごめんね」

「いえ！燕さんから電話いただけるとは嬉しいですよ！」

「今日は夜更かししてたんですか？」

「ううん、今はベッドだよ」

「どうしてもその、明日伝えたいことがある……  
こんな時間に急ぎすぎると思っけど明日……」

自分でもなぜこんな時間に電話してしまっただろうかと  
申し訳ない気持ちになったが  
操哉の答えは予想より嬉しいものだった。

「実は僕、明日学校サボって家で遊んでるつもりだったんです」  
「良かったら燕さんも一緒にサボりましょっよ」

「い、家……」

「はい！ニんっきりで楽しましょっよー」

「ふ、ニんっきり……」

学校をサボって男の家で二人っきりになる。  
それは今の燕にとってあまりにも魅力的で、  
断る理由が無かった

「う、うん！わかった、じゃあ午前中だけ、行くから」

「わかりました。それじゃあお待ちしていますね」

約束を取り付けて付けて電話を切った燕は、差し入れに手料理を  
作って持っていくことを考え、そこから寝ずに準備した。

「まあ、これは成功確率をあげよう……俺は何かを準備したぞ、トコナド」

燕に取って明日は一世一代の大勝負であり、  
ラストチャンスでもある

わずかでも成功確率が上がるような誠意を見せる為、  
必死に準備した

「お邪魔します」

「燕さん、いらっしゃい」

家に来た燕は、手料理のお土産とテパートの高級お菓子、それから操哉の好きな球団グッズをお土産として渡した。

「こんなにいっぱいありがとうございます！」

「わざわざ来てもらったのにすいません。でも、すごく嬉しいです!!」

「ど、どう。喜んでもらえたなら私も良かったよ」

可愛い……!

こんな素敵なお笑顔をみせてくれる人を……私はフッちゃったんだね。

最低だ……私……。

どうしてこんなふう……私……。

思いのほか派手に喜んでくれたことで、燕も話を切り出す勇気が湧いた。

この流れなら、きっと許してもらえる。そんな確信めいたものさえあった。

「操哉くん……あのね」

「はい？」

「今日はずっと言わなくちゃいけないことがあるんだ……」

「言わなくちゃいけないんですか?」

「うん……」

そう言って少し俯きな表情を見せた燕は、意を決したように床に膝と手を付き、そのまき頭を下げた。

「ええー急げど、どうしたんですか燕さん！」

マシカ……ハハ、いきなり土下座とは予想できなかったな！

これから言う言葉をまず行動で示した燕は、土下座しながら告白を断ったことを謝罪した。

「本当にごめんなさい！」

操哉くんも考えずに酷いこと言って……

「他に好きな人がいるなんて、最低な断り方だったよね……」

「ごめんなさいー！」

「わ、わかりましたからとりあえず頭を上げてくださーい」

思いのほか激しい謝罪に、操哉も思わず肩を抱いて顔を上げさせる。



流れが変な方向に行かないように、ちょっと促すか。

「燕さんが僕に申し訳ないと思っているのはわかりました」  
「けど、それだけが言いたいわけじゃないでしょうっ？」

「う、うん……その、あのね……」

燕から告白しやすいように仕向け、次の言葉を待つ。

「今更かもしれないけど、  
もし……もしまだ気持ちが残っているなら、私と……」

「私と付き合っただけがいいの。私……操哉くんの事が好きなの……」  
「元々操哉の方から一方的にアタックしていたこともあって、  
この告白は燕としては勝算があった」

だが、好きだと言った直後の操哉の表情は何故か硬く、  
怒りを含んでいるようにすら感じられた。



「……僕は今でも燕さんのことが好きです」

「でもフラれてかなり傷ついたのも本当です」

「そ、それは……そうだよね……本当に……みんななら……」

「告白をフツたことは、さっき謝ってくれたから許します」

「な、なる……!」

「でも、だからと言って今更喜欢いと言われた、  
すぐ付き合おうっていうのも僕の中では違うんです」

「そ、操哉くん……」

言葉に詰まる燕を追い打ちをかけるかのよう、  
さらに黙ってしまふような質問を続ける。

「なんで僕がもう一度告白しなかつたかわかりますか？」

「……………」





この流れは完全に断られる流れ。

ここから先は、なぜ付き合えないのかを突きつけられる地獄の時間になる。

そういう直感が燕の頭を過り、大きな絶望感が湧いた。

「フライドですよ。やっぱり僕も男だから、女の子には自分の言う事聞いて欲しいし、付き合うなら自分色に染まってくれる女の子がいいんです」

「裏切られたりするの怖いです」

「だから、付き合うなら尽くしてくれる子が良い」

「尽くす子……」

「僕と付き合うならそういう女性じゃないといけません」

「燕さんは……そんな僕好みの女になれますか？」

「……ア……」



「こうすれば」という希望の糸を垂らされて  
掴まない人間はいない

まして、謝罪している立場で許してもらえろという状況なら  
なおさらだ

「な、なります!」

「何も言う事を聞く、操哉くん好みの女になる!」

「絶対に裏切らないって約束するし尽くすから!」

「だから許して下さい!……」

「私と付き合ってください!操哉くんの色に染めてください!」

「ふん……」

これだけ言わせたことで内心溜飲が下がったが、  
あえて険しい表情を崩さず、これからのお互いの関係性を  
決定的にするため押し問答をした

「僕、口だけの女って嫌いです」

「なんでも言ううことを聞かって簡単に言いますけど、例えば燕さんに僕が風俗で働けって言ったら働くんですか？」

「それは……」

「僕の為に友達や家族を裏切れって言われたら？  
それでも僕の言う通りにして、尽くしてくれるんですか？」

「うっ……」

そう言われて固まる燕だったが、次に口を開くまで時間はかからなかった。

そして、何を言うかはもう決まっていた。

操哉によって洗脳された時、ここでする返事……さびらうより宣誓の内容は脳にインプットしてあったからだ。



「……裏切れます」

「操哉くんのためなら……誰だって裏切れます」

「体を売れ、て言うならそれでも構いません」

「……だから私と付き合ってください!!  
私を操哉くんの女にしてください!!」

強い口調で答える燕。

その真面目な表情からは、硬く強い決意が感じられた。

「へえ……本心で言ってるっほいな」

「燕さんの気持ちの本気だ、てのはわかったよ」

「だから最後にもう二つだけ確認。  
今からセックスして相性が良かったら付き合、てあげる」



「せ、セックス……」

「そう。体を重ねて、燕さんの……いや、燕の抱き心地が良ければ僕の彼女にしておける」  
「それでどうかな？」

「圧倒的上から目線での発言は、普通なら怒りを覚える暴言だろう。」

「しかし決意を固めた燕にとっては、大好きな男と付き合うための最終試験だ。」

「それで付き合っ……てさうなるなら、探検くんのロマン……」  
「喜んでしますー！」

「……」  
「……」

「せ、わせてくれたわー!」

「セックスさせてください。  
そして私の処女、操哉くんがもらってくれたわー!」

「お願いします!」

ここまで言わせたことは、  
操哉にとって一種のカタルシスがあった。

武神に匹敵する武道四天王の一人、  
松永燕が平日に学校をサボって一人の男の前でひざまずき、  
遜りセックスを懇願しているなど誰か想像できるだろうか。

それを自分が発明した装置によって実現したことは、  
射精してしまいそうなほどの征服感と達成感があった。

「そこまで言われたらしかたないわー!」

「いいよ、処女貰ってあげます!」

「本当ですか!?!あ、ありがとうございます!」

ホントはさっへん処女じゃありませんわー!

「燕のオマンコ、薄いピンク色で……とても綺麗だよ」

明るい部屋の中、目の前に花開かせている女性器をまじまじと見つめていく。燕も初めて男の見せたマンコを褒められ、恥ずかしさと経験の無さからどう応えていいかわからない。

「ふふ、ちょっと触るね」

「ほ、はい……」

反応に困っていた燕だが、頭より体が先に応えてくれた。

ぱっくりと開かれたマンコの奥でひだが生き物のように蠢き、操哉のチンポを求めるかのように愛液を流し始めたのだ。

「うわぁ……女のマンコって触ってほいしても濡れるんだね」  
「うん……どの好きな人に抱いてても濡れる……」  
「うん……どの好きな人に抱いてても濡れる……」  
「うん……どの好きな人に抱いてても濡れる……」

前戯もせず濡れたことは思いのほか操哉を興奮させたようで、我慢できないとばかりに勃起したチンポを膣の入り口にあてがった。







「あっ……♡んっっ！……ふああっ♡」

（声が出ちゃっっ）

好きな人と繋がっている幸福感がそうさせるのか、快感に対して声をだすのを我慢できない。

自然と出る甘い喘ぎと、千んポの深くゆっくりなピストンは快感をポンプで送るように断続的に脳に伝わり、それが神経細胞を痺れさせこの行為の幸福性を刻み込んでいく。

「んっ……あっっ♡」

「うっ……んっっ！すっ……あっっ！んっっ……」

快感を刻み込んでいるのは操哉も同じで、瞳内で完全に勃起した千んポはその内部をみっちりと埋め尽くすように膨らみ、余すことなくマンコから与えられる刺激を脳に伝えていた。

ガ千ガ千の陰茎を柔らかい肉が包み込みツワツワとした蠕動運動で奥へ奥へと飲み込み、永遠に味わっていたいと思えた。

「まっ……気持ち良すぎるっ」

「あはあんっ♡お、奥をぐんぐんっ♡……♡」

「んあぁーぶあっー!!」

「くっ……うっ……!!」

龟头から先走り汁が止め処なく溢れ始める。

なんともいえないソワツとした快感を何度も味わいたくてピストンを何度も繰り返すと瞳内がキュッと今までにない締め付けを始めた。

「お…オマンコがゴタゴタっ♡……んっ♡……!!」  
「うっ…んあ!!」  
「も、もっっ…!!我神が…!!」

「突きするたびにタマから吸い出されるかのめっな射精感が押し寄せてくる

瞳内が収縮してキュキュッと締め上げてくるご龜頭とジーンとした鈍い快感が走る

「んっ……ぐっ……っ……で、出るっ……!」

「ぶあっ……!はっ……♡だっ……操成くんの精子出っ……♡♡  
ギョッギョーッと搾り上げられる様に強い圧力が加えられると  
今まで我慢していたものが一気に腰から噴き出す  
溜めに溜めていたせい尿道口から吹き上げるザーメンは  
今までにないくらいの大量なモノとなっていた

「んはあッ……ぶあ……!」

射精の余韻でビクッビクッと痙攣を繰り返しているチンポに、  
声にならない吐息を吐き出しながら悶える

「あ……すっ……っ……ん……ん……♡♡」

燕も臍内を埋め尽くすほどの精子に  
確かな手応えと充実感を得ていた

射精の快感に顔を緩ませている操哉を見れば、  
自分の体で気持ち良くなってもらえたことは間違いない。

「ハァ……っ……っ……っ……っ……♡♡」

こうして、非処女と非童貞の初体験は  
強烈な快感と記憶を脳と体に刻み込んだ。

だがこの二回で終わるわけも無く、  
体位を変えてセックスは続いた。



「んんっ♡あああ……♡」

「ど、どうですか、私の腰振りっ♡き、気持ちいいですか♡」

「き、気持ちいいよっ。」

「か、カリがひっかかるといって、浅く動かしていい」

「えっど、っ、どうかな……っ」

「ほうっ！っ、これすごいっ、ヤバいっ」

操哉くん、こっが気持ちいいんだね♡

指示通りに腰を振って、  
気持ち良くなってもらえることが嬉しかった。

頑張って操哉の感じるところを勉強して、  
もっともっと彼色に染まろうと思った。



「う……ああっ！」

騎乗位は燕が腰を動かしているの、快感を制御できない操哉は精液を搾り取られる様に射精した。

「はぁ……はぁ……♡熱い……精子が……ふぁっ……♡」

「おなかいっぱいに……♡んんっ、熱くて……♡」

私の動きで射精してんだな……♡あ……♡……♡



「あの、操哉くん……」

「なにっ？」

「で、でうた。たかな……私の……その、抱き心地……」

めっちゃめっちゃ気持ち良かったけど……まだ許すには早いかな。

「……そりゃ射精しちゃってるし、  
気持ち良くないと言えば唯になるけど」

「でも、二回しかしてないし、まだ判断なんてできないよ」

「ぞ、ぞっか……」

「だからこのままやりまくって抱き心地を確かめるね」

「今日は家に帰さないから、  
親に今日は友達のところだでも泊まるとか連絡して」

「お、お泊り……」

「嫌なら現時点で結論だしてもいいんだよ？」



「う、ううん！わ、わかりました、今電話するからっ」

燕が連絡手段を電話と言ったことで、あることを閃く。それはAVなどで良くあるシチュエーションだった。

「あ、じゃあこのまま今電話して」

「ええー？」

「……嫌なんですか？松永燕さん」

操哉の敬語は今の燕にとって、自分から心が離れているという意味に受け取れ、背筋が凍るような恐ろしさがあった。

「い、しますー！」

「このままで電話するからっ、ちゅ、ちゅと待って」

千んポを入れたまま、燕は父親に電話をかけた。





「あ、オトノ？」

「あれ、燕ちゃん学校だよな。どうしたの？」

「あ、うん……えっと、今休み時間なんですけど」

「あ、そうなんだ」

ふふ、本当にAVみたい。

となれば悪戯するしかないよねっ

会話に集中している燕の太腿を掴み、  
操哉はわずかに腰を引いた

「で、今日は女達の家に泊まらしてあげるよな、たの」

……ぞわっ。



「んあっ♡」

「燕ちゃん？」

ぞ、操哉くんっ！？

不意に突き上げられたことで声が漏れてしまい、慌てて取り繕う。

「な、なんでもない」

だがそれが、逆に操哉をさらに調子づかせてしまう。

ほうほう、我慢できるかな〜？

「だ、だからね、あっ♡」

「きょ、今日は夕飯んっ♡用意できなら……のっ♡」

ああんっ♡だ、だめっ♡声む……はっ♡っ♡っ♡♡

「ぞっかー。今日はこれかう九鬼で打合せがあるから、帰り足で食べて帰ることにするよ」

「ぞ、ぞうしてっ♡」

声が上がってはいるものの、言葉自体は詰まらせずにしゃべっていたことで、電話の向こうの父は異変に気付かなかったようだ。仮に多少変だと思っても、まさか学校をサボって男の家でセックス中だとは想像もできないだろう。

「じゃあお友達に宜しくね」

「う、うん。お、オトくんも栄養のあるもの食べて……」

「んっ！……ねっ♡」

「……ぞ、それじゃあっ」

「はいはい」

最後に軽くイキかけてしまったが、  
なんとかババしらずに電話を切ることに成功した。

き、緊張したようっ。

オトくん、お付いてなかつたよな……っ



「良く我慢できたね」

「う、うんっ。でも驚いたよ」

「急に腰動かすんだもん」

「そりゃそうでしょ。男だったら誰もが一度はしてみたいと思うやつだし」

確かにAVにもさっついのあっただけや……。

「そっちなら？」

「うん。男のロマンだよ」

「……じゃ、お泊り許可も出たことだしこのままやりまくるよ」

「僕が満足するようにせーせー頑張って下さいね」

「は、はい。が、頑張ります……」

やりまくるといふ言葉通り、操哉はこのあとずっとセックスを続けた。

燕もどんな要求にでも応えて見せ、気付けば日付が変わるほどの深夜になっていた。



「これでラスト……だ、だまごー！」

「ああんっ♡は、はいっ♡」

「出して下さいっ♡操哉くんの精液注いで下さいっ♡♡」

シーツが愛液まみれになってしまった。たベッドから降りて、  
最後は床でバツクで突きまくった。

犬のような格好の燕を尻を掴みながら抱くのは  
最後の締めには最高だった。

「あ、あぁ……イクッ！」

「あああ~~~~♡♡♡♡」

最後の射精が終わり、  
燕の抱き心地を確かめるといってテストは終わった。

「じゃるっ、んっ♡んっ♡」

操哉は事後、  
愛液と精液にまみれたキンポをお掃除フェラさせながら、  
燕の抱き心地について感想を言った

「いや……厳しめに評価しようと思っただけど、  
これだけ夢中でやりまくったあとだと唯になっっちゃうよね」

「じゃるっ、じゃるるっ♡」

「んっ♡んっ♡んっ♡……」

期待に目を輝かせ視線を送っていく燕は、  
操哉も笑顔でうなずいた

「うん。抱き心地は最高だったから……合格」

「僕の彼女にしてあげる」



「ほ、本当ですか……!?!」

「うん、これから宜しくね」

「ぞ、操哉くん……!?!」

感極まった燕はうっすらと涙を浮かべ、すぐにお礼を言った。



「ありがとうございます！」

「操哉くんの彼女になれるなんて、本当に嬉しいですっ♡」

言われずとも土下座の格好でお礼を言う燕に、操哉も満足気だった。

今日一日ずっと操哉優位で抱いたことで、燕は自分の立場が操哉よりも圧倒的に低いと認識したのだ。

「これからは恋人同士だね」

「は、はいっ♡」

「……だけとわかってると思うけど、僕たちの関係は対等じゃないからね？」

「わかっています。」

私は操哉くんに尽くす……都合の良い女でいいんです。」

「付き合っていたただけるだけで……幸せですっ♡」

「うんうん。そうだね。だからこれからはタメ口は許さないし、僕のごときは様付けで呼ぶこと、いいね？」

「わかりました。操哉……様♡」

「もちろん人前でもだよ。僕たちの関係はオープンでいくから」

「……はいっ、操哉様っ♡」





燕を物にした操哉は、洗脳装置を取り外してやり、色々なことを教えてやることにじた。

それはこれからどういう関係を利用していくかもそうだが、操哉自身のことや洗脳装置のこととも含まれていた。

操哉は少年の心を持った純粹な自分と、極悪でサティストな自分がいるといい。その両方が本当の自分だという。純粹な自分とサティストの自分に共通しているのが、人を操って弄びたいという支配欲求だというのだ。

それを聞いた燕は少し意外そうだったが、今となってはそれも受け入れられたようだ。

「彼氏様がそんなワルだ。たなんてビックリです」



「そう、僕は客観的に見て結構悪い人間だと思う。けどね、僕自身は悪いとは感じてない」

「だから僕からは悪意を感じなかったでしょ？」

「言われてみれば……」

ま、ネタバラしはこれくらいでいいかな。

操哉は燕のことも洗脳したとは言わなかった。真実を告げても彼女が支配から脱することはないだろうが、万が一もある。

強い女がたくさん手に入。たらネタバラしするのもいいかもね

「とこころで燕」

「お前、川神百代に勝つように依頼を受けてるよね？」

「え……!?!」

「な、なんで知ってるんですか?」

九鬼紋白からの極秘の依頼は、  
自分の他には父親じか知らないこと。

操哉がそれを知っているということは、  
どこかから情報が漏れたのでは思い動揺した。

「なんとなくそんな気がしてさ」

「大丈夫、誰かから聞いたとかじゃなから」

「ぞ、そうなんですか。操哉様は凄いですね」

本当にすい……そんなことまで見抜くなんて……。

ふふ、お前のことならなんでも知ってるよ。

目的や依頼主を悟られないことにはかなり気を張っていたのに、  
それをあっさりと看破され畏怖に近い感情を覚える

この人には隠し事は出来ない。  
全てを曝け出すしかないぞすら思った。

「で、実際のところ本当に依頼されてるんだろ?」

「……はい」

「正確には、私とオトンの二人でございませう……」

燕は依頼を受け川神学園にきたことと、ターゲットである川神百代の研究と対策がほとんど大詰めのところまで来ていることを告白したが、操哉は燕が戦う必要はないと言ったが

「ぞ、操哉様がモモちゃんを倒す!？」



なんと操哉が自分で川神百代を倒すと言い出したのだ。これにはさすがに驚いたし、絶対に無理だと思った。だが操哉には倒せる根拠があるらしい。

「もちろん無策じゃないよ。つまりね……」

「なるほど、モモちゃんを洗脳装置で弱くする……ですか」

「そう。技術を忘れさせても良いし、薬を投与して肉体的に弱くしてもいい」

「意識を残して肉体だけ操作っていうことも出来るから、絶対に勝てるよ」

「凄い……！凄いです操哉様♥そんな方法があったなんて」

「実は川神百代は僕も狙ってたんだ。僕みたいな弱い男に武神が負けるのってどんな気分なんだろうね」

「考えただけでワクワクしちゃうなあ」

彼氏の頼もしさをみて、燕はさうに心酔した。

自分も出来る限りのことは協力すると約束し、二人で川神百代を倒すことが当面の目標となった。

「そうだ、燕の戦闘服、あれちょっと貸してよ。研究してアレンジするから」

「わかりました♥」

「あと、明日川神百代に僕と付き合ったことを教えておいて、僕が燕の恋人って認識させておいたほうが、色々やりやすいから」

「……かしこまりました♥」

モモちゃん、驚くたごうなよ♥

「それとね……」

操哉から指示をなされた燕は、翌日百代に報告を行った。

「昨日サボったのは、そういうことだったのか」

「驚いたよ。まさか燕に彼氏ができるなんてな」

「ふふ、実は最初告白断っちゃったんだけどね」

「何回も告白してきたのか？」

「ううん。一度断って気付いたの。私には彼しかいないって。だから私から付き合ってた下さいって後からお願いたんだ」

「私にはできないな。そういってさ」

「ふふ、つったあとにわかる愛もあるんだよん♥」

「自分でつったのに、操様しか私にはいないって、すっごく悲しくなっちゃったんだもん」

「様付け呼んでるのかよ……」

「これが意外としっくりにくるんだよん。彼氏様って感じがね♥」

「年下相手になあ……」



あっ、言い流れ！  
これなら操哉様の御命令通りに……そいつ？

「いいの。私はあの人……操哉様に戻っすって決めたから」  
「なんだよー、妬けちゃうなー」  
「今度どいつ紹介しろよー」



……っど。

ちょっとイラッとしちゃったけど、抑えないぞ。

「……じゃあモモちゃん、  
今度私の彼氏様の家に遊びに行かない？」

「操哉様のこと紹介するから、お泊り会しようよ。」

「楽しそうだな！」

「……でも男の家に泊まるのはちょっとだな。」

「そんなこと言わないでせ。」

「お風呂とかすっごい広い……っついで、楽しいよっ。」

「それに……いくら彼氏様とはいえ、  
私も男の人の家に一人で……まだ不安なの。」

「だからモモちゃんが一緒に来てくれると心強いんだけどなあ。」

「うーん、さうらうっついでなあ。」

このアピールは意外と有効だったようで、百代は少し悩んだ  
末に燕と一緒に風呂に入れるならという条件で了解した。

「ありがとうモモちゃん！」

……良く、これでモモちゃんゲット確定。軌道修正完了だねっ。♡

上手く約束を取り付けた燕は、夜にそのことを報告した。

家に来るなり燕は抱かれ、騎乗位で腰を振りながら付き合った報告の反応や家に誘った時のことを一部始終報告した。

「じゃ、川神百代は土曜に泊まりに来るんだね」

「はいっ♡」

「何時くらいになる？」

「ああんっ♡と、土曜は大会があるぞっでっ♡」

「んんっ！よ、夜の八時くらいになるっ♡言っ♡てまじっ♡たっ♡」

「そっかー。うん、わかったよ」

「言っ♡た通りすぐにセッ♡ティングっ♡してあげたいがとね」



「あぁっ♡ぞ、操哉様の御命令でいなななっ♡♡」

操哉は次のターゲットである百代をどう料理するか  
今から楽しみみでしかたがなかった

ああしてこうしてと洗脳する内容を考えていると興奮し、  
射精感も一気に高まった

「ごっごっごっ……イクよ」

「ぶあずっ♡はいっ♡だ、出っっ♡♡」

「燕の中に出してくださる♡♡」

「うっ、あ……い、イクっ！」

「あずあず〜♡♡」



そして土曜日。

予定通り大会を終えた百代を燕が家に連れてきた。

「改めまして、燕…さんと付き合っことになっ。た天羽操哉です」

「よろしくおねがいます」

「もう、操哉様は私にさん付けなんていうなんでしょうよ♡」

「なんだよー、来た途端のろけみせっけられるのかよー」

軽い自己紹介を済ませた、三人で茶菓子をつまみに雑談する。

「大会で優勝するなんて凄いですね！」

「私は出た大会で優勝以外したことないぞ」

「ええ!？」

「ま、今日は燕やまゆまゆも出てなかったしな」

「私が出る時はモモちゃんに勝つって確信を得た時だよん♡」

会話は弾み、空気も和やかだった。

姉気質の百代は年下の操哉相手は話がしやすいのか、簡単に打ち解けることができた。

「で、お前達どこまでいったんだ？」

「ちょー！？モモちゃん何言ってるのっ」

「あはは……」

「キヌヘラいはしたんだろ？」

してるよー！  
キヌとごころかオマンクをたっくわキムホビスホスボつてもうったよー  
って言いたいけど言えないこのまじかっわ。

「あ、その……まだです」

「ふーん？っつてことは燕の唇はまだ奪われてないわけかー」

「冗談半分に視線を送られた燕は、唇をサッと手で隠してウインクした。

「だーめ♥」

「なんだよー、ケチー」

二人をイジる百代だが、  
実は一番初心なのは自分だとは知る由もなかった。

初心そうな操哉がもう何度も燕とセックスしていて、  
避妊せずに中出ししているなんてことは想像すらしていない。

「モモちゃん、そろそろ風呂に入らな？」

「どっちな。広いんだろ？」

「ええ。二人なら十分な広さだとは思いますが」

「わざわざあ操哉様、モモちゃんと一緒に入りますね」



「うん。百代さんもごゆる〜い」

「ありがとう」

ふふ、これが楽しみで来たようなものだいなー。

燕をたっぷり可愛がってやるか♥

ウキウキしながら風呂に入った百代だが、  
先にちゅっかいを出したのは燕だった。

「モモちゃんお肌すべすべだね」

「と、とっした、やけに積極的だね」

「モモちゃんの体、前から触ってみたくっ♡いる♡」

「ふふ、私まだと燕♡」

可愛い女に目が無い百代は、燕のことを実力以外のところでも当然気に入っていた。そんな燕から積極的にこらわれるのは嬉しいことだった。

「どったモモちゃん、これつけてみて」「ん？」

燕は自分の体の後ろに置いてあったソレを手にとって、サツと百代の体にくっつけた。





「お、なんだこれ……う……？」

着けた直後だった。

体に何かが入ってきたと思っただ瞬間、  
スツと力が抜けて意識が遠のく

「お……い……」

「……」

念のためグツと力を入れて百代を拘束するが、薬によつて  
最初に体の力が抜けるため、百代が暴れることはなかった。

「……………」  
意識を失ったのを確認して、燕も緊張を解く。

「ふー……緊張したあ」

「……でも、正直ソクソクしちゃった♡」

「人を尻に嵌めるって楽しいんだね」

「これから楽しくなりそう♡」

意識の無い百代の耳元で囁くその言葉には、  
これから百代を洗脳してあげるといふ意味が込められていた。

「ふふ、それにしても流石だね」

「これを付けられたら体の力が抜けるのと一秒の差も無く  
意識を失うはずなのに、数秒は意識あったもんね」

「それじゃあここで待っててね」

「今、操哉様呼んでくるから♡」

燕は百代を風呂場に寝かせ、  
リビングで待っている操哉を呼んだ。

「あの川神百代ですらこうなっっちゃうかー」

「僕って本当に天才だよわ」

「はい♡操哉様の素晴らしい発明にかかれば、モモチちゃんもこの通りです♡」

倒れている百代を見て、操哉は燕の時以上に満足気だった。

最強無敵と恐れられる武神をこれほどまでに無力化したのだから当然と言えば当然だ

「じゃ、さっそくこいつの人生データを抜き取りつつ、洗脳もはじめよっか」

「相手が相手だけに放置しておけないから、洗脳している間はここで見張らないとね」

「その間は暇だから、燕には千ンポをしゃぶってもらうかな」

「かっじまりました♡」

洗脳内容はあらかじめ用意していたので、すぐにインフラトが開始された





「胸が赤く光って……これが洗脳中っ！ひたひたまでっ！」

「どう。赤く光っている間は脳を弄り倒している……この姿だけでも興奮しちゃうよね！」

「なるほど……ふむ、操哉様って本当にSなんですね」

「うーくん、Sかどうかはわからないけど、少なくとも悪い奴だなんては自分でも思っつよ」

「そんな、操哉様は悪い人なんかじゃありませんよ♥」

「燕に取ってはね。時期にコイツほどっ、ても悪い人じゃなくなるケド、」

「はいっ♥せせちゃんも操哉様の物になるのが楽しみですよ♥」

人が洗脳されるところを始めて見たからか、  
燕は興奮気味だった







「びゅん……スッキリしたあ」

「んん……たへんっ♡♡」

「はっっ……♡も、もう一度しますか？」

「ううん、大丈夫。多分その時間は無いから」

「もう洗脳終わるんですか？」

「どうだね、あと五分くらいかな」

燕の時はかなり洗脳に時間を要したが、  
武士娘最強クラスである燕の肉体情報を得たことで  
装置も改良出来たらしい

「パージョンカッブしたおかげで少し強めの洗脳でも

体や脳への負荷はほとんど無いし

しかもかなり短時間でできるようになった」

「ほんと、燕のスペックを参考にしたおかげだよ」

「一般人と体質そのものが全然違うんだもん、

洗脳に時間がかかるわけだよ」

「どうだったんですか。操哉様のお力になれて嬉しうですわ♡」

「さなみにモモちゃんはどういう風に洗脳しているんですか？」

「いろいろだけとわがりやすいのはこの家にいる時は

全裸なのが当たり前で、渡された服や装飾品なら

身に着けるのが普通のことか



「うん、それもあるね。ただ一番の理由は装置を外してから」  
「もう一度着けさせるための理由付だけとね」

「……」

そう言いかけたところで、百代の装置が青に戻った。



「洗脳終了したみたいだね」

「僕がここにいると不自然だから、装置を外したあとに起こすのは燕がして」

「わかりました。操哉様はどうされるんですか？」

「僕は部屋でこいつの人生を読み取って楽しんでるから、しばらく風呂でイチャついててよ」

「はい。モモちゃんも風呂から上がるって言い出したら、何がで合図しますね」

「うん。まあ僕が読み取っている間は大丈夫だと思うけどね。長風呂派にしておいたからさ」

「そんならごまかすまで変えられちゃうんですね」

「なんでも変えられるよ？」

「それこそ根本的な部分から細かい癖までなんでも……ね」

「本当に凄い発明ですね……」

私の彼氏様……オムネとオムネが……

自信あふれる操哉に、  
燕も絶大な信頼と尊敬の念を改めて抱くのだった。



「モモちゃん、モモちゃん……!!」

「う……ん……?」

洗脳装置を外した百代を立たせ、意識を呼び戻す。

「燕……」



「モモちゃんどうしたの?」

「せっきからポーツとしちゃって」

「あ、ああ……すまん。なんか気が抜けたみたいだ」

「もー。武神がそんな隙だらけなんて、襲っちゃうよん?」

「んー、私は大歓迎だぞ♥」

「ふふ、じゃあイチヤイチヤしっちゃあっかなー♥」

「ほんと、今日は積極的だな」

「せっかく二人でお風呂なんだし、肌と肌の触れ合いもしてみたいなーって」

「その方が長く入っていられるし」

「……そうだな、風呂は出来る限り長風呂がいいもんな」

燕……私に可愛がられたいってことだな♥

モモちゃんとの触れ合いなんて別にしたくないけど、操哉様の為にも時間稼がなくっちゃね

お互い思惑は違うが、少なくとも長風呂する点では一致して、裸の付き合いに興じた





「一方どの頃、  
操哉は百代から抜き取った彼女の全てを読み込んでいた。」

「あ〜……すごい……」

「なんて濃密で……激しい人生なんだ」

「自墮落で適当なのに……熱い……！」



「けど……闇も抱えてる……」

「さすが武神の人生……はあ〜……たまんないよ……」

燕の時もそうだが人の人生を隅々まで覗く背徳感はずまじく、  
ましてそれが百代程の人物ともなればその中身も  
凄いとしか言えないものだった

しかもその人生を知ったうえでそれを自分の意のままに  
洗脳して作り変えられるのだ  
興奮しないはずがなかった。

「燕、そろそろ風呂からあがりよう」

「えっ、なんで？」

「私はもっと入ってられるが、燕がのほせても困るしな」  
「それに家主を待たせすぎても悪いじゃないか」



そろきたか……。

でもそろそろ操哉様も読み取り終わってるたぶんじ、上がった方がいいかな。

「……うん、じゃあ、あがりっか」

「いやー最高の風呂だった」

「金持ちっつてすごいよなー。こんな広い風呂があるっつわ」

「それは良かったです」

風呂から上がってきた二人は全裸だった。

燕はともかく、百代もまったく動じずその一糸纏わぬ姿を晒している。

さらに操は勃起しているが、裸が当たり前という認識のせいかわれも気にならない様だ



洗脳、バツキリだね。

はい♡



視線で百代の洗脳が出来ていることを確認した二人は、そのあとは普通に会話を楽しんだ

「ふくん、昔は名家だったのか」

「天羽ってあんまり聞いたことない名前だけごなあ」

「元々メーカー傘下の開発者一家ですからね」

「特許料とかが主な収入源でしたし、表に出る名前ではなかったんですよ」

「ある時期に開発競争で負けたりして、天羽の家は没落しちゃったんですけど……」

「頭脳や技術自体はボクも受け継いだし、今も特許料で生活できるくらい収入はあるんです」

「親は海外で機材のリース事業をやりつつ巻き返そうと頑張っていますけど、なかなかうまくいかなくて……」



「そっか。上手くいくさいいな」

「はい。いつかは家をまた大きくして、九鬼を超えたいって思っています」

「はは、凄い目標だな」

無名に等しい天羽が九鬼を超える。

そんな野望をからかうわけではないが、本気とも思わず冗談半分に受け止める。まさか将来、自分が野望の手先となるとは想像もしていない。

「とっついで百代さん、これ付けてもらえますか？」

洗脳装置を取り出し、百代に渡す。

「いいぞ。とっくに着けるんだこれ？」

「モモちゃん、それは胸にペタッと張るんだよ」



「これでいいか？」

「うん、バッチリ」

「ところで百代さん、せっかくだしバルコニーに出ませんか」

「うちは夜景も綺麗ですよ」



「どうなのか？」

「じゃあ、せっかくだし出てみよっか」



「じゃあ、じゃあ、じゃあ」





尿意はそれほど無かったが、何らかの意図があって言ってきたのだろうと察し、どう答えるか考えるすると先に百代が反応した。

「燕、おしっこなら早く言ってくれよ。私が手伝ってやる」「手伝う?」

「こっちはバルコニーなんだから、抱えてもらって排水溝がけてするのが普通だろう?」

「……やっらいっついでな!」

これは操哉様からのサプライズだね。

予想できなかったな!

まさかモモちゃんじゃなくて、私に恥ずかしいことをさせるおつもりだったなんて♥





「じゃあモモちゃんにお願いしていいかな？」

「ああ、任せておけ」

「燕におしっこさせるならあっちに排水溝があるんで、そこを狙うえるように抱えてあげてください」

「……あれか。了解だ」



「燕も、バルコニーの床を汚さないようにしっかり狙ってね」



「わかりました♥」



「は、恥ずいねこれ……」

百代に抱えあげられた状態は股があっぴろげで、アソコがぼちり見えている。

こんな姿で、しかもバルコニーとはいえ屋外で放尿するのが恥ずかしくないわけがない。



「トイレでする見られるなら恥ずかしいのもわかるけど、ただ外でおしっこするだけだぞ？ 恥ずかしいか？」

「そ、そっだよね」

モモちゃんは外だと見られても恥ずかしくないって認識なのかな？

「さ、遠慮せずパーッとしちゃってよ」

「……わかりました。ん……」

股間に意識を集中し、かんで尿道を開くと、外に出て腹が冷えたからか、すぐに放尿することができた。

「おー、出てる出てる。」

「これ本当に耻ずかしいー」

おっ、「おそろしく見られちゃって……おそろしく……」

ジロロジロロと放尿するところをまじまじと見られ、  
燕は顔を真っ赤にして耻ずかしかった。



「結構たっぷり出るんだね」

「はっはっ……」

ダメ、これダメ。へへんなのに目覚めちゃいぞっつっっ♥

屋外放尿しているからか、  
放尿を視察されていることなのか、  
はたまたその両方か。

いずれにせよ今の状況に性的興奮を覚えてしまっ燕だった。

僕もムラムラしてしまっっちゃっ、たな……

操哉もこの光景を見て性欲が高まり、  
百代を装置で眠らせ、その間に燕で発散するつもりだった。







「~~~~~」

「イックフックフックフック」

「ずずずずずず~~~~♡」

燕は射精と同時に  
誰にも見せたことのないようなアへ顔を晒して絶頂した。

「はあはあ.....ひひ、燕。夜はまた長いからさっ。」

「おっ♡」

「っっおっおっおっ.....うんぱっおっ♡」

「操哉様、おはようございます」

「おはよ  
」

「ちゅるっ、っぺろっ……っゅんっ  
」

「ちゅんっちゃんも……っゅんっはよー  
」

「ちゅるっ、っゅんっ  
」

翌朝、燕が起きると裸の操哉と、  
床に座って何かをすすっている百代がいた。



「おはよう燕。じゃあねっ」

「なんかまじっかにいいな。この王様、いいところだわ〜」

顔にベッタリと精液が付着し、  
手のひらにもこぼれ落ちそうなほどの精液が乗っている。

それをどこか嬉しそうに囁る百代に、燕も笑顔がこぼれる。

モモちゃんのお洗濯、バッチリ完了したんですね♥

「ああ、これは泊めてもらったお礼に朝フェラしてやったんだ」  
「そしたらこいつが射精しちゃってな、せっかくだしてくれただ  
ザーメンがもったいないから、舐め取ってただ」

「百代さん、床に落ちたのも舐めて綺麗にしてくれたんだよ」

「え、そうなんですか!？」

「モモちゃん……そこまじっかだったんだ……」

「当たり前だろうっ」

「精子の「いつも残れば舐め取れっ」て、常識とは思ってほしいな」

「……水たね♥」







「そっか。美味しいもんね、操哉様の精液……」

あのモモちゃんか……洗脳でこんなに変わったっちゃんですね。

確かに人を操るって……凄く興奮するかも♡

「へっへっへっ……」



精液を美味しくそうに舐めている姿を見て、  
燕もソクソクした背徳感を感じていた。

……あわっ

ふと、百代が服を着ていることに気付く。

「どうして百代ちゃん、なんで服着てるの？」

「これから帰るから、せっき服を着たんだ」

「ちゅるうっ、れろお……本当は玄関の外に出ているから服を着るべきなんだろが、それはさすがにな」

この話のタイミングで、操哉から燕に視線の合図が送られた。

こもこもサササ、さささささささささささささささ

了解いね♡

「あ〜……セセちゃん帰っちゃうんだね……それは残念」

合図に従って次の誘導に移る燕は、  
本人が気付いているかどうかはわからないが  
邪で悪意に満ちた笑顔だった。



「帰るのはいいんだけど、「お土産」はもらったの？」

「……ん？」

「お土産が……どうも言えはじつたな」

「でもいいの？」

「こんなに射精したあとなのに、お土産までもらってこ」

「僕なら大丈夫ですから、是非お土産もらってください」

「お客さんが帰る時にお土産の精液をアソコに注いで渡すのは当然の礼儀ですから」

せっかくの御好意だしな、受けないのも悪いが。

書き換えられた認識と植え付けられた思考に誘導され、百代は納得してお土産をもらうことにした。

「そっか。じゃあお願いしようかな」

いざなほどう時間がかからず、アソコを一回眺めた。

服を脱いだ百代はお土産をもらったために股を開き、一度も挿入を許したことのないアソコを晒した。











「それにしても……お土産を貰っただけなのに、  
なんかセックスしてるみたいで恥ずかしいな」

「ぶー……ま、気持はわかります」

「キンポでマンボを突っくって動作は一緒ですからね」

「アハハ、これがセックスじゃなか、たらなんなんだよー」

「武神はギャグセンスもあるんだね。」

「間抜けなことを言う百代に興奮し、  
ピストンはさらに早まり、より奥深くまで突いた。」

「は、激しいなっ」

「ん、うう……んずっ♡」

思わず百代からも喘ぎ声が始める。

この百代……結構はまりこんだ。

「ま、百代さん、おんねん♡……」

「いねのなんせはさっしやっすん」

「あ……うん……あ……おんねん、おんねん……」



「……着替えもしたし、忘れ物もなし、と」

「素敵なお土産ももうっ、たごごだし、私はこれで帰るよ」

「はい。また来てくださいね」  
「ももちゃん、バイバイ」

全裸の二人は玄関で百代を見送った。  
服を着ていても中出しした精液を膣内にたっぶりど  
溜めている百代はどこか歩き辛そうにして帰って行った。



「いや〜……ハハ、大成功だったね」



「はい！セックスしてるのにセックスしてるみたいで  
恥ずかしいなんて言うもんだから笑っちゃうとこでした」  
「あー、あれね。僕もだよ」

洗脳した百代の術態を振り返り、二人は笑いあった。

「どうして昨晚モモちゃんのプローターを買ったんではあなっ。」  
「うん、バッチリ人生の全てを覗かせてもらっ。たよ。」  
「いかがでしたか？モモちゃんの人生」

「まあさすがと言っかなんというか凄く濃いね」

「ただ……」

百代の全てを覗き、自分達に対する感情も見えた操は、  
少し懸念材料を見つけたという

それは、百代が内心は燕のことも  
ある程度以上に警戒しているという事実だった。

「私がいつか倒すつもりで研究していたのは  
気付いてたでしょ。うししかたないですね」

「うん。当然だけと僕はもっ」と警戒されてたよ」

「ま、洗脳装置を付けた今となっでは問題ないけどね」

それ以外には特に懸念材料は無く、逆に操哉は今後楽しみめそうなる要素を多く見つけていた。

「意外だけとおぼけが恐いみたいだね。それも相当」

「あとね、自覚はあるようなないような感じだけど、直江大和のことを好き以上に思ってる」

「愛に近い感情が根っこの部分にあっだよ」

「そういう感情って使えそうですね」



「燕もそう思う？」

「はい♥怖いって感情があるなら他のいろんなことを怖がらせたりできるでしょうし、好きって感情は操哉様に向けてしまえばいいと思います」

「それこそ根っこから操助様のことを愛するようにしちゃうか、モモちゃんをいいなりにできちゃうんじゃないでしゅか」



「そんなのダメダメ！」

「それじゃあカタルシスってやつが足りないんだよ」

「で、出過ぎたことを言っただけ申し訳ありません！」

「カタルシス……ですか」

「うん。洗脳支配するカタルシスってとても重要なの！」

「相手は武神だよ？川神百代だよ？」



「ボクに対する恐怖を徹底的に植え付けて、完全服従させなくちゃ、僕の支配欲は収まらない」

「好きにさせるのは、支配してからでいいんだ」

「なるほど。強い人間に畏怖させることの悦び、屈服させた時の達成感……そう、たものがカタルシスだと」

「おっ、いい匂い」

そんなことを熱く語ったせいで操哉は興奮し、自然と勃起していた。

「なんかムラムラムしてきますっもっもっ……」

「燕、するよ」



「はい♡」

「私の体で、ムラムラムを発散して頂きたい♡」

燕は当たり前のように股を開き、チンポを受け入れた。

「んっ……」

「ああんっ♡操哉様のオチンポが奥まで入ってしまいましたぁ♡」

チンポが膣内に入ると、奥に到達するまでには程よい抵抗感があった。押し開いていくような感覚が気持ち良かった。

根元までずっぽりと挿入されると、締りが良くなりチンポ全体を包むように壁がまとわりつく。

無駄なく吸い付く膣壁は、まさに操哉のチンポにフィットした状態だった。

「燕のマンコ、入れるたびに良くなるっ♡いな」

「ふぁあっ♡う、嬉しいっ♡」

「操哉様のオチンポの形、覚えよう♡てぃもオマンコも必死ですかっ♡」

「これからもっ♡と使い込んで、僕専用オマンコに仕上げてあげるからっ♡」

「ありがとうございますっ♡♡」

「んあっ♡んんっ♡あああっ♡♡」

「あ、ああっ♡イクッ、もう私イッチャいますっ♡」  
「あひっ♡はっ♡かはっ♡あああっ♡」  
「い、イキマンコやばい！」

ビクンビクンと体を小刻みに震えさせ、  
何度もイク燕のマンコは激しくうねり、  
絶頂の度にチンポをギュウギュウと締めつける。

「あ、ああ！」  
「気持ち良すぎてっ、だ、だめだっ」

自分専用になりつつあるマンコは  
容赦なくチンポに刺激を与え、操縦も射精感を抑えられない。

「あ、ああんっ」

「はいっ♡ふああんっ♡だしてっ♡」

「あひっ♡私のマンコにだしてほしいわっ♡」

「く……うー」

「駆け上がるような射精感と共に精液が発射され、  
燕の膣内を満たしていく」

「熱くドロドロとした濃い精液がびゅるるっ、と音をたてて  
注がれるたび、燕も絶頂する」

「ああんっ♡ああんっ♡」

「操哉様の精液っ♡オマンコにっ♡」

「ふああんっ♡っ、幸せなっ♡」

「はあはあ……っ」

「あースッキリしたあ」

「燕のオマンコ、ごちそうさま」

「私もイカせてもらってありがとうございます♥」

「いつも悪いね。オナホみたいに使っちゃってさ」

「いえ……恋人ですから、  
体を重ねたい時に重ねるのは当然です♥」

「あ、でも、自由なのは操哉様だけですから！」

「私はわがまま言っただりしません」



「良い心がけたね。それでこそ僕の彼女だよ」

「はい！これからも捨てられないように頑張ります♥」

捨てられないように……か。いい傾向だね。

自分への依存を示す言葉を口にした燕に、  
操哉はもはや手を加えなくとも支配から脱却する可能性は  
ゼロだと確信した

「とここでだけど、  
百代のデータはもう一つの装置にコピーを取ったから、  
これから燕も読み取ってみると良いよ」

「ありがとうございます」

「って言うか、洗脳装置ってなんだったんですね」

「これは予備だよ。本機の方はメンテナンスしようと思ってる」



「わかりました。じゃあ今からいいですか？」

「うん」

予備の洗脳装置を受け取った燕は、  
操哉がメンテナンスをしている間に百代の人生を覗いた。

「どうだった？濃い人生だったでしょ。」

「操哉様の仰る通り、モモちゃんの人生は凄かったです。」

「モモちゃんの何もかもを知って、強さの秘密がわかりました。」

「そっか。なら川神百代に勝つ方法も思いついたんじゃない？」

「はい！基本スペックは互角でしたけど、テンションが高まった時のモモちゃんは私じゃ抑えきれません。」

「でも準備して挑めば勝てると思います。」



「そっか、良かったね。」

「準備すれば武神に勝てるって、やっぱり燕も強いんだ。」

「それでも納豆小町兼、武道回天王ですから♡。」

百代に勝つ算段が付いて嬉しそうに燕に、操哉はさらに勝利を確実にする方法を教えた。

それは百代のテータを燕にインフラットすること、百代の戦闘技術をそっくりそのまま手に入れるというものだった。



「実は僕も燕や百代の戦闘技術を自分に入れてみたんだ。だから相当パワーアップしてると思うよ。」

「そんなことが出来るんですね!」

「とは言っても、僕の体は肉体的スペックが低いからさ、技術が手に入っても武士娘には勝てないかな。」

「多分、武蔵小杉と互角くらいが関の山だと思う。」

あの子へくさくさ、技術ははじいじいばあばあにだけ……。

「ま、僕は試してみたただけだからいいんだだけさね。」



「あとで燕にもインフラットしておけるよ。そうすれば川神百代より絶対に強くなれると思うよ。」

「ありがとうございます♡」

「是非お願いします♡」

百代の戦闘技術を手に入れる為、洗脳装置を胸につけようとした時だった。

燕はあることを閃く。

操哉様は肉体的スペックが低いから弱い……？

そうだ……！

「操哉様、ちょっと提案があるんですけど」

「提案？」

「はい。モモちゃんを倒すの、操哉様がするっていうのはどうですか？」

「僕が川神百代を倒す？」

「そうです。モモちゃんは基本的に誰が相手でも見下している  
とというか、舐めてますけど、実際に敵無しの強さがあるから  
それも仕方ありません」



「けどそんなモモちゃんが武を志してない一般人の操哉様に  
負けたら……これはもう相当シッコだと思っただけですよね」

「なるほど。そりゃそうだろうね」

「僕、自分で言うのもなんだけど弱い」

「そんな操哉様がモモちゃんを完膚なきまでに倒して、その上でこれでもかかって犯しちゃうんです♥」

「完全敗北したモモちゃんの心に恐怖植え付けて、自分から屈服させる……」

「これって操哉様の言うカタルシスが凄くあると思っってます」

「カタルシス……確かに！」



まさか燕がこれほど自分の趣向を汲取った提案をしてくると思  
まていなかっただので、感心して話を聞く

百代にとっては武神としての敗北、  
女としての屈辱を与えることができ、操哉にとっても  
征服欲と性欲の両方を満たす魅力的な提案は、  
非の付け所が無かった

「いいね！それ採用するよ」

「ありがとうございます♡」

「ふふ、想像してきたらまだらまだらしてきちゃった」

「燕、口で抜いてくれる？」



「かっこ良かったです♡」

この後、百代のデータをフィードバックした燕は大幅にパワーアップし、その実力は百代をも超えた。

操助も百代を敗北させるための準備を行った。

翌日、操哉が学園に行くとき下駄箱で百代が待っていた。

「おはようございます」

「おはよう。お前を待ってたんだ」

「何か用でも？」



百代が待っていた理由は当然知っているが、  
適当に話を合わせる。

「私の都合で悪いんだが、パンツを預かってくれないか？」

「百代さんのパンツを僕が？」

「ああ。今日は学園にいる間はノーパンって決めていたんだが、  
預ける相手がいなくなってるな」

「それで僕ですか」

「うん。燕の彼氏なら、信用できる」

「わかりました。今ここで脱いでくれるなら、預かりますよ」

「どうか！助かる」

「今脱ぐからちょっと待ってくれ」



百代は人目につかないようにサッとパンツを脱いで、  
まだ温かいそれを操哉に手渡した。

「ほっかほかですね」

「どりゃ、脱ぎたてほやほやだからな」

ああ……このスースー感、たまらない♥

「放課後になったら返してくれ」

「わかりました」

ノーパンになった百代は、その解放感に体を震わせて喜んでいた。

元々かなりスカートを短く履いている百代は、スカートが少しでもめくれれば簡単にアソコが露出する状態だ。

それが男には見えないように過ごす。

そこに悦びを見出す変態性癖を植え付けられてしまったのだ。

「預かってくれている間は好きにパンツを使ってもいいぞ」

「使っても……どういう意味ですか？」

「もー、女の子にそれを言わせるのか？」

「おまえが履いても良いし、頭に被ったっていいんだ」

「なんならタンポを尻にくのに使っても良いぞ」

「百代さんのパンツでオナニーできるのは嬉しいですけど、返すときに精液がついていたら困りますよね？」



「別に構わないぞ。精液がついていようと私は気にしない」

「そのまま履くってどうですか？」

「当たり前だろう、私のパンツなんだから」

「ふふ………そうですね」

操哉は洗脳された百代の発言に征服感を覚えながらパンツをポケットにしまった



「それじゃあ僕も自分の教室に行きますね」

「おっと、待ってくれ」

「預かってもらうお礼をしたいんだ」



百代はお金は払えないが、  
その代わりに何かして欲しいことがある、  
たら協力すると言っ。

「百代さんにしてもらいたいこと……うん」

わざとらしく悩む操だが、  
要求することはすでに決めてある。

それは、百代と一対一での直接対決だ。

「私と真剣勝負……だぞ？」



「はい。誰の邪魔も入らないところで、  
正真正銘一対一の勝負をして欲しいんです」

「もちろん手加減抜きで、  
どちらかが負けを認めるか戦闘不能になるまでです」

「……」

百代は数秒押し黙ったあと、怒りを含んだ語気で問いかけた。

「……正気か？」

「どういう意味ですか」

「そのままの意味だ。お前は私と戦うなんて、自殺行為だぞ」

「それはどうかわかりませんが……僕も男です」



「だからなんだって言った」

「男は強さに憧れるものじゃないですか」

「僕も男なんで、武神川神百代と一度戦って見たかったんです」

その場で聞いて、百代は呆れたようにため息を吐いた。

「……はあ」

ちやちやれ、身の程知らずなごもほひがあるな。

はて、ペンダント預かっけもろおならいけならいなあ……。

「百代さん、僕どの勝負……受けてくれますか？」

「そこまで言うなら受けてやるが……  
それなりに痛い目を見ることになるとよ」

「覚悟しておけよ」



「はい。わかりました」

痛い目を見るのは……僕じゃありませんわね。

双方思惑は違うものの、勝負の約束が成立した。  
時間は今晚、場所は学園の屋上だ

それぞれ普通に生活をして、夜を待った。

百代は放課後にない、一旦帰宅するつもりになっていた。  
放課後の昇降口で、黛由紀江に会う。

「お疲れ様です」

「おー、マユマユか。お疲れ」

「今から帰りますか？」

「うん。今日は夜に用事があるんだ。それまではワン子と  
一緒に特訓でもして時間潰さっかなーってな」

「どうなんですわ」

そんな風に雑談をしている時だった。



「!?!」

「どうだ、マユマユも一緒だ……」

「風でスカートがひらりとめくりあがり、ノーパンと思わしき股間を目撃してしまう。」

「一瞬のことではあったが、動体視力が常人の比ではない。由紀江には百代のアソコがはっきりと見えてしまったのだ。」

ええっ!?!  
も、百先輩……!?!?

「男相手にはノーパンであることを隠し、そのことに興奮する性癖を植え付けられた百代だが、女相手には警戒しないようにされてしまっている。」

「だから由紀江の前では無防備にスカートの内側を晒したのだ。だが洗脳されている事実を知らない由紀江にとっては、ノーパンを目の前で晒されて驚きしかない。」

絶句する由紀江の様子にさすがに違和感があったのが、百代がどうかしたのかと聞く

「いい、いえ！ななな何でも、何でもありません。」

明らかにパニックに陥っている口調だが、由紀江は普段でも頻繁にこうなるため百代も気にしなかった。

「で、マユマユも一緒に訓練に付き合わないか？」

「く、訓練？あ、そ、そうでしたね」

「すみません、今日は用事があるんです」

「ぞっか。じゃあまた今度だな」

「は、はい」

そう言って百代は先に帰り、由紀江は少し間を置いて学園を出ていった。

「……ッ」

聞けませんよ……。

なんで下着を履いていないんですか？なんて……。

由紀江がその理由を知るの少し先のことだが、その時には既に手遅れになってからだった。





その夜、操哉は川神学園の屋上で百代を待っていた。  
時間より早くやっできて、燕と電話で連絡を取る。



「操哉様、こちらは準備万端です」

『あいつが姿を見せたら、すぐに宜しくね』

「かしこまりました♥」

学園から少し離れた位置に待機している燕は、  
百代が現れると同時に装置を使う予定だ。

万が一のことも考え、  
すぐに助けに入れるように準備運動も済ませている。

「御指示通りすぐに力を抑えますからご安心下さい」

「モモちゃんは無意識に九割九分九厘抑えるようになり、逆に受けるダメージは痛覚を百倍くらいに調整します」

「ですのでこれから操哉様が戦う川神百代の戦闘力は、子供以下です♥」

「そっか、了解」

「あっちのダメージそんなに大きくしちゃって大丈夫かな？」

「それは問題ありません」

百代のデータを手にした燕は、  
百倍でも致命傷にならないことを知っていた。

それほど常人の操哉と武神川神百代のスペックは  
かけ離れているのだ。



「こちらでも常に監視していますし、御命令通り色々サポートしますので安心して下さい」

「気ままにモモちゃんの蹂躪してお楽しみくださいね♥」



「頼むね。あー、楽しみになってきたなあ」

「私も楽しみ……む！」

「どうしたの？」

「モモちゃんの気配が学園に近付きました」

「そろそろ切りますね」

「気配わかるなんてさすがだね」

「それでは楽しい時間をお過ごしください、操哉様♥」

「うん！」

電話を切った操哉はワクワクしながら百代を待ち、  
燕は装置を取り出して百代の戦闘力を極限まで低下させる  
操作を行った。



「待たせたか？」

「待ちましたけど、ワクワクして気になりませんでした」

「私相手にワクワク……ね」

何か勝算があるのか？まさかな。

近くに燕の気配も感じるが……「対」だしなあ。

正直戦うなら燕の方が良いが、この勝負はパンツを預けたお礼なのでどうは回しなかつた



「まずはパンツをお返ししますね」

「ああ。悪かったな、急に頼んで」

「いいんですよ、こうしてお礼に戦ってもらえるわけですし」

「そうか……実を言うとな」



「パンツを履きながら、百代は感じていることをほっきりと言った。

「お前みたいに、強い奴に戦いを挑む気概がある男は嫌いじゃない」

「けどな……」

それは落ちて着いた回調だった。だが、かなり怒気が含まれていた。

「無謀な戦いをするのは馬鹿のすることだ」

「そういうのは好きじゃない」

「無謀……ですか」

「この勝負、僕にとって無謀かどうか……」

「判断するのは早いですよ？」



「少なくとも百代さん、あなたじゃ僕を捉えられない」

「なんだと？」



今の言葉が合図となり、操戦のシナリオが始まる。

「モモちゃん」の思考停止。」

燕が装置を使い、百代の思考を一時停止する。

この状態にすると、百代は完全に意識を失うので、時間が止まっている状態と等しい。

Now inputting

その間に操哉はゆっくりと百代の背後に回り、死角に入ったところで思考停止を解除する。

すると百代には操哉が瞬間移動したように映るといっわけた。

P.H.E

START

MIND.CONTROL.PORTABLE

SELECT



「百代さんの背後、取っちゃいましたね。」

「な！？ば、馬鹿な！？」

私の目でも動きがまるで見えなかったと……？

こんなやすやすと背中を取られたことは人生で初めて。  
百代に冷や汗が流れる。

体つき、発するオーラ、それらを見れば  
相手の実力はすぐに見破れる百代から見れば、  
操哉が自分の背後を取ることなどできるはずがない。

しかし現に背後を取られてしまったという事実には  
驚きを隠せない。



「このスピードでも無謀ですか？」

「確かに見えなかった……」

「けど、早いだけで私に勝てると思うな！」

百代は体をひねり、振り向きざまに素早い蹴りを放つ。

威力よりスピードを重視した蹴りは、  
操哉が本当に素早く動けるか確認する為のものだ。

が、意図に反して蹴りは簡単に受け止められてしまう。

「よっわ……これが武神の蹴りかあ」

「クッ!?!」

そんな……全力ではないにせよ私の蹴りを片手で防ぐのか!?



自分が意図的に力を極限まで抑えているということを知り、  
自覚していない百代は、啞然とする。

素早さで負け、蹴りも簡単に受け止められる。

それは完全な実力負けを意味しているからだ。

「武神と言われる百代さんなら、今のだけで僕との力の差が分かったと思いますけど……」

「せっかくなんで武神を超える強さをお見せしますね」

「ちゃんと受け取ってくださいいね？」

「僕からのプレゼント……」

「敗北を」



ま、まずい！  
とどかくつは守りに徹して……！



攻撃態勢に入った操哉に警戒心を強め、受けの構えを取る。

だが、そんな完全防御すらも操哉の攻撃は簡単に突破してしまう。

「あぐっ！う、ぐああっ！」

攻撃を簡単に貰ってしまった百代は、ドゴッ バキッ と  
重い衝撃を体に受ける

馬鹿な！？なんとという早く鋭い、そして重い攻撃なんだ……！

それにこの攻撃……川神流……！

いや、わ、私の……！？

「ほらほら、考え事してちゃ攻撃防げませんよ？」

まさか自分から読み取った戦闘技術を振るわれていて  
思いもしない百代は、操哉の戦闘スタイルがあまりに  
自分に似ていることに驚愕する

だが、そのことを考える余裕は与えられず、  
連続攻撃で追い詰められてしまう。

この詰めも、普段百代が対戦相手に行っていることだ。

「ぐあああっ！」

だ、ただ受けきれないっ。

燕の彼氏はこんなにも強かったのか！？

こつも簡単に攻撃をもらい、大きなダメージを受けるのは洗脳装置によって力を制御されているからに他ならない。無意識に回避できないようにインフラットされているので、自分では避けているつもりでももらってしまっているのだ。

Now inputting



「よし、こいで技コマンドも入れちゃうよん」  
「モモちゃんにとってこれ以上ない究極の超必殺技……  
だと思ってるマヌケ技 発動♥」

あらかじめ頭に植えておいた「ある技」を使うように  
思考を操作する

P.H.E



START

SELECT

MIND.CONTROL.PORTABLE

「……こうなったらあの技でお前を倒す！」

お？あれを使うんだね。

「へえ？僕に通用する技があるんですか？」

「この技を実戦で使うのは初めてだが……男相手なら  
確実に戦闘不能にできる技だ」

「ふふ、それは楽しみだなあ♡」

「その余裕、後悔させてやる！」



「お前は確かに強かった……」

「燕の彼氏になるだけのことはある……」

「だから私も敬意を持って、せめて興義で葬ろう」

「……受けてみる!!」

さて、茶番に付き合っ、てあけるとしますか?

「川神流無様興義……」

「おちんぽ舐め舐めザーメンでっくん戦意喪失拳!」

「う、うわー!」

「な、なんなんだこの技は!」



「そんなー！体が動かないよー」

体が硬直してしまった演技をする操戦に、  
百代は勝利を確信した。

「やはりこの技は効果ありのようだな」

これもダメなら危なかった……。

内心余裕が無かったのを悟られないように、  
笑みを崩さずに近寄る。





「この技を受けた男は、私のフェラチオで射精するまで身動きできなくなる」

「そして私に射精させられたお前は圧倒的敗北感から戦意を失い戦闘不能になる……」

「な、なんだってー！」



「諦めろ。お前の負けはもう確定している」



勝利宣言をしながら、スポンジのジッパーを下し、その場で跪く

そして開いた社会の窓からゆっくりとキンポを取り出した。

「ふふ、こんなに大きくして……  
これから屈辱を味わうというのに、キンポは喜んでるぞ。」

「そんなことはないですよ。」

「見事に勃起しておいて何を言ってるんだ。」

「しかし、あれだ。もう私の勝ちだから教えてやるが、  
実はこの技……不完全なんだ。」

「不完全？」

「ああ。射精させられなければ完成しない技だからな。」

「相手に射精能力があることが必須だし、  
私が相手を気持ち良くして射精まで導けるかも重要だ。」

「だけと私が運が良い」

「お前のチンポは射精させたことがある」

「それもフェラチオでな♥」

フェラチオで大量に射精させた経験のあるチンポを前にして、  
百代はどこまでも余裕を見せつける。

さっきまでの焦りが嘘だったかのようになり誇る百代は、  
舌先で亀頭を綺麗に舐めてから、パクッとチンポを咥えた。

「ん……じゃあノー。」

「にゅ……にゅぐつとキンポを徐々に回の中に飲み込むようにフェラを開始した」

「じゅぽっ、じゅぽつと頭を前後に動かしてその口へとキンポを飲み込んだり引き抜いたりしている」

「ぶずゅんぶずゅん、れろろろろ、ずゅんぶずゅん」

「へろろろろ、ずゅんぶずゅん」

「そして時折カリから裏スジ舌がなぞると、操哉の体がビクンと跳ねるようになる。」

「あうっーき、気持ちいい。」

「お前の性感帯は知っているんだ。このままイかせてやるー」

「じゃっほじゃっほ、ずゅんぶずゅんー！」

「勝機を逃すまいと激しさを増すフェラ千オ。」

「一番感じる部分を舐めつつ尿道口から搾り取るように吸い込まれ、射精間際のキンポは魚がヒットした釣竿のようによくビクビクと痙攣し始めた」

「あ、ああ！」

「ダメっ、もう、でぢゃうっ……」

「んぶっ！」

亀頭の先端へと到達したザーメンは意識が飛びとっちなほどの快感とともに噴水のように噴出した。

きたー射精してるー

私のロリドクドクと……勝ったー私はこいつに勝った！

回内に含まれたままのチンポからは思いっきり精液が  
噴出され、ビクンビクンと震えながら口の中へ注がれる。

それは百代にとって勝利の美酒にすら感じられた。

「んっんっんっんっ……んんっ」

咀嚼しながら笑みがこぼれる百代。

射精が終わって操哉の体の自由は戻っている設定だが、まるで警戒しないのは完全に戦意を喪失させたと確信しているからだ。

「どうだっ、これで戦う気も失せただろう」

「さっさとキンポをしまえ。お前の戦闘不能で私の勝ちだ」

スッと立上り、射精した操哉を見下す。

言われた通りキンポをしまっ操哉だが、その表情は敗北している男のそれではなかった。

「確かに気持ち良かったし、射精もしちゃいました」

「けど……戦闘不能でもなければ戦意も喪失してませんか？」

「なんだと!？」

「その証拠に、僕のチンポはまだ勃起してますよ？」

「ふざけるな、そんなわけないだろう!」

まさかこの一本……!……!……!

ただならぬ悪寒を感じた百代は、無意識に後ずさりする。

勝てない。

頭は否定していても、体がそう判断して危険を回避しようとしているのだ。

「僕の言っていることが嘘か本当かは……」

「今から犯して証明してあげますね」

腕を掴まれた百代は、大人と子供ほどの力の差を見せつけられ逆襲されていきます。

「や、やめろ！」

なんて力なんだ！？  
これだけ私が全力を出しているのに振りほどけないなんて！  
そ、それに……！

「これでわかったでしょう？  
僕は戦意喪失なんてしていませんって」

「クッ……！」

あの技をくわって射精までしたのにまた戦う気があるのか？

ば、馬鹿な！  
戦いの最中で射精させられて戦意を喪失しない男なんているのか？

奥義も効かず、単純な力比べでも負けていることへの動揺。  
このままだと犯されるといっつかつてない恐怖。

百代は今、人生最大のピンチに陥っていた。



「あああっ！パンツに手をかけるな！」

「いい加減大人しくすれればいいのに」

「まあいいや。そろそろ本気で犯します」

「ふざけるな！絶対にお前に犯されなどしない！！」



「やれやれ、強情ですね」

「でもそれでこそ犯し甲斐があるっでもんです」



操哉は自分のスポシから勃起したチンポを取り出して露わにすると、間髪入れず百代に飛びかき力強くでスカートに手を入れればパンツを降ろしてしまっ。

「やめ、ろおおおお！！」

そのまま突き飛ばされるようにして地面に手をついた百代に、操哉は両手を掴んで完全にバツクを取った。

「お、おい！何をやるつもりだ！？」

「何って、十二ですよ。犯すって言ったでしょ？」

「ッ！」

ヤ、ヤバイ！

このままじゃ本当に犯される！



組み伏せられて、屈辱の体勢で犯される。

人生において凌辱されることなど考えてもみなかった百代は、完全敗北を体に刻みつけられようとしている。

必死にもがくが、操哉の力が強すぎてビクともせず振りほどけそうもない。

「腰を押し込みめは入っちゃいますねー」

亀頭をマンコの入り口に当てがい、先端をわずかに押し込む。

「や、やめてくれ！」

「お前の強さはわかった！ま、負けを認める！」

「だから犯すのはやめてくれっ」



「んん？」

百代の懇願を笑って受け流す操哉は、さらに押し込み亀頭がすっぽりとマンコに入り込んだ。

「だからやめてくれっって言ってるだろっ……っ」

「馬鹿だなあ……っ」

「やめるわけ……ないでしょーっ」

「かはっ！」

ズドンッ。と挿入されたチンポは奥まで一気に届き、  
百代を貫く。

お、男に犯されっ……わ、私が……！

遂に凌辱されてしまった百代だが、  
その現実を受け入れられない



「いや、一度ヤッてますけど、ごうやって犯すってというのは  
また違った気持ち良さがあるな。」

「お、お前っ！」

「はは、ダメダメ。犯される側はもっとな弱弱しく、絶望してなくっちゃ。」

「まあでも僕は優しいですから、犯しはしますけど  
気持ち良くもしてあげるんで安心して下さいね。」

「ふ、ふざけるな！感じるわけ……んああっ♡」

い、今私……か、感じてっ!?

突かれて喘いでしまった百代は、  
自分が感じてしまったことを必死に隠そうとした。

「ふふ、感じてますよね?」

「ち、ちがっ……んんっ♡」



「別に隠さなくていいじゃないですか」

「快感に身を任せた方が犯される屈辱も薄まりますよ」

「あっ♡だ、だから!わ、私は感じてないっ♡」

「そんな声色で言われてもなあ」

「んんっ♡ああ、ああっ!」

「や、やめっっ♥そ、そんなに深くっっっ、っ、深くなあっー!」

何故だっ!  
なんで感じるんだー?!

こ、こんなことされて気持ちいいなんて……そんなー!

ピストンの度にズンツと奥まで挿入され、引き抜くときも  
気持ち良い場所をカリで擦るようにされ、  
どうしても喘ぎが抑えきれない。



苦痛なっ堪えられたかもしれないが、  
快感は我慢のしようがなかった。

「あゝいい。武神を犯してると思うとソクソクします」

「お、お前……ひゃあっ♥」

「気持ちいいですよ。」

「奥をコツンコツンっしてると、感じちゃうんですよね?」

「僕も射精したいし、  
せっかくなんで一緒にタイミングでイかせてあげますからっ、」

「だ、誰がお前なんか……ああっ♡」

「だ、だから奥を突くのはやめっ♡」

「あ、ああっ♡く、くぞっ♡あああっ♡」

「屈辱なハズなのに、感じている自分にわけがわからなくなる。頭は拒絶しているが、それ以上にアツコから伝わる快感が脳を焦がす。」

「イかないなんて無理無理」



「さっき僕のチンポをしゃぶる時、経験があるからイかせられるみたいなの言ってたでしょ？」

「ふあっ♡そ、それがどうしたっ……んんっ♡」

「同じですよ」

「僕も百代さんを抱いたことがあるからイカせる自信あります」

「あ、あれはお土産をもらっただけでセックスじゃ……」

「アハハ！まだそんなこと言ってる」

「そんな間抜けな事を言われたら……」

「僕……もうイッチャいますよ」

「お、おい!? よ、よせっ」

「も、もう我慢が……!」

「一気に射精感が高まった操哉は、自分の射精と同時に百代をイカせるため、激しく腰を振った」



「ゆっくりとしたピストンでも我慢できないほどの快感だったのに、ピストンを上げて快感を叩きつけられてはもうどうしようもなかった」

「だ、ダメだっ。」

「これヤバイッ♥も、もうイクっ♥」

「嫌だーあぁっ、でもイッチャう♥犯されてイクッ♥」

「~~~~ツツ♥」

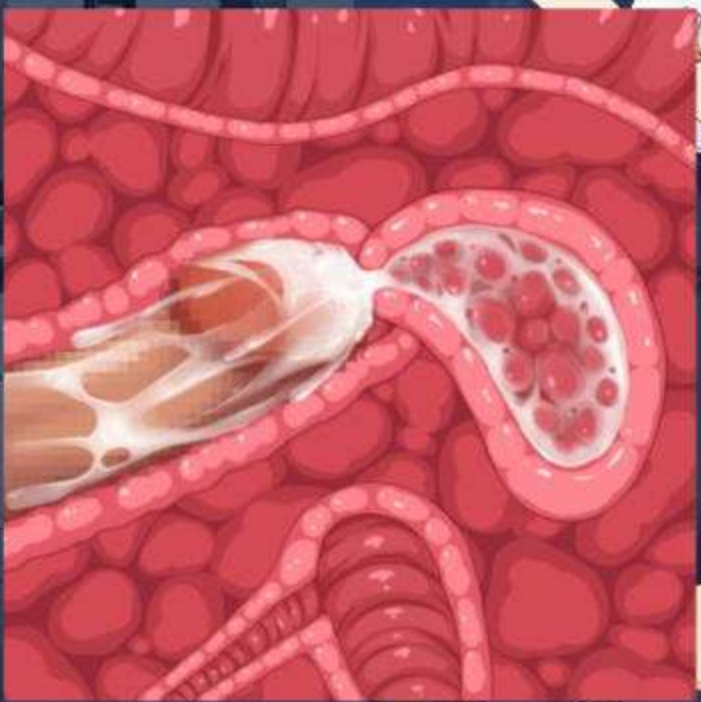


「いっ、ん、んんっ！」

「ああっ ♥」

何度も掻き回されてほぐされた臍内に、  
熱い精液がドクドクと注入される。

柔らかい臍内を押し広げるほどに精液が充満し、その感触が  
しつかりと快感に変換されて百代の全身を支配した時、  
彼女は絶頂した。



「イックウウウウッッ」

あまたがとぶっ♡

もうなにもかんがえられないっ♡

き、きもちよじゅぎっ♡

長い射精に呼応するように、  
百代もビクビクと十数秒に渡ってイキ続けた。

絶頂の快感が電撃のように体中を走り、アソコからは大量の  
愛液が滝のように流れ、わけもわからずただイキまくった。



「……も、もういいだろう。」

「う、これではあるじいっけ。」

「アハハ、この状況で許してもらええると思っってます。」

「川神百代を犯してるんですよ？」

「一回射精したくらいで満足するわけないでしょ……！」



「ううっ……ぞ、そんな……」

挿入したままピストンを再開し、  
精液が充滿するマストンをじゅぽじゅぽと音を立てて蹂躞する。  
どこでも百代はされるがまだまだ、  
だが、ある変化に気付く。

「っっっ……あ……うっっ……っっ」

な、なんだこの感じ……「怖い……」  
わ、私……恐怖を感じて……!?

あれだけ感じさせられてしまったのが「転いで、  
心の中に強い恐怖を感じたのだ」

「気付いてると思いますけど、  
僕のチンポで気持ち良くなっ、てもううのは終わりですよ」



「と、とっという意味だっ」

「えーと、つまりここからは本来あるべき屈辱と絶望、  
恐怖にまみれたレイプを楽しませてもらったことです」

「れ、レイプ……!」

その言葉がキーワードになって、百代は自分が犯されているのだという事実をはっきりと理解した。敗北した自分が尊厳を奪われ、愛じていない男に好き放題される。

初めてのセックス、つまり処女を奪われてしまい、しかも避妊もせず中出しされてしまったのだと。



こいつ、ふ、ふざけ……。

あまりにも酷い仕打ちに、怒りが込み上げてくる。

しかし、その怒りも湧き上がる恐怖が押し潰し、抵抗する気力を奪ってしまふ。

実際百代は操哉を罵倒していたが、その言葉が口に出せなっていた。

血の気が引き、顔が青ざめ恐怖に強張る。

「うっ、あ……ううう……!!」

時折うめくだけで、体から力が抜け、冷たい汗をかいている。これほど百代は恐怖で心を支配されたのは初めての事だ。だが、実は最初の中出し後に精神操作をされていたのだ。燕が快感を抑制し、恐怖と絶望が増幅されるように操作したことでこうなっている。



「ほろほろ、さっ、きみだけにヒロイと言たしてみてくださいよ」

「あ、う……!!」

怖いー苦しいー

嫌だ……な、何で私がこんな目に……。

「ゆ、許して……も、もう犯さないで……!!」

「だから許さないっ、と言っ、んぬんっちゃん」

「僕、今最高の気分なんですよ」

「許してっ、て泣いてる百代さんを犯してるのがね」

「ああ、ひ、ひどい………!」

「ふふ、まだイクそうです」

「い、嫌あ………」

「安心して下さい。  
僕がイク時は百代さんもイクことになってますんで」



「い、意味がわからない………わ、私は………!」

二回目の射精に合わせて百代には新たな操作が加わっ、ていて、  
今の精神状態でも中出しされた時だけ、  
激しく絶頂するようにされていた

そして絶頂の激しさや大きさ、  
長さに比例してより強くて大きい、  
根深い恐怖が百代に刻み込まれるようになってる。

あくまでこの絶頂は優しさで与えるものではなく、  
完全に心を折る為の絶頂なのだ

「ああ、もう我慢できない」

「い、イク………」

「あひいいいっ♡」

「な、なにこりえええええっ♡」

中出しの瞬間、それまでの苦痛や恐怖を吹き飛ばしてしまふほどの激しい絶頂が襲う。

「イグッ♡イッてるっ♡」



「あたまおかしくないゃうううっ♡」

思考が飛んでしまふほどの爆発的な絶頂に百代も流されるしかなかった。

「はあはあ……あ、ああっ!?!」

少しして絶頂の余韻が引いてきたときだった。

百代の心に再び苦痛と恐怖、そして絶望の感情が湧きあがってきたのだ。



「あ……、ううう……！」

嫌っ、こ、怖いっ。

辛い、苦しい、怖い怖いっ、助けてっ嫌、嫌ああっ！

絶頂の大きさの分だけ反動として発生する負の感情。

それは二度と消えないトラウマとして、  
全身の細胞レベルに刻み込まれた。



「僕のこと怖いですか？もうやめてほしいですか？」

百代は声も出せず、ただ頭を縦に振って頷き、  
この仕打ちをやめてもらおうと必死だった。

「犯されたんですもん、そりゃあ怖いですよね。」

「やめてもらいたいって気持ちも凄くわかります」

「……けど、僕はまだやり足りないんですよ」

「ひいっ!？」

「まだこれが続く。それがわかった瞬間、百代はかつてないほど取り乱した。」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌ああ!」

「もうやめてくれええ!」



「犯さないで!怖いんだ!」

「くっ、苦しい、もう、もうやめてくれええ!」

「あゝ……いい。たまらないそれ……」

「そんなに嫌がってくれるなんて、  
犯し甲斐があり過ぎますよ……!」

操哉はあまりの征服感に身震いしつつ、  
百代の服を強引に脱がせ、裸にしてもう一度犯した。

「ああっ……だめ……いやぁ……」

「百代の小さい悲鳴と、アソコを蹂躞するジューポジューポとびう音だけが静まり返った屋上た響いていた

なんて私がこんな目に……。

もういやぁ……。

「百代さんのアソコの締りがどんどん強くなって……」

「ふふ、よっほど嫌なんですね」



「いやそれとも、嬉しいのかな？」

「まあどっちにしても……もう一回同じことを起きるんで覚悟しててくださいね。」

「お、同じっ……」

「さっき凄いいき方したあとに、恐怖感じたでしょ？」

「あれ、もう一回あるんで」

「……」

あの狂っような絶頂と、悍ましい恐怖と絶望がまたくる。

それを予告され、百代は人生で初めて心が折れる音を聞いた。

「う、いめんなわら……」

「もうさめてくたわら……くすっ……」

「何に対してのごめんなさいか良くわかりませんが、やめてあげます」

「ほ、本当？」



「ええもちろん。もう一回したらやめますから」

「瞬間に止めてもらうと思ってた百代をどうに追い詰める。すると百代はいよいよ恐怖が抑えきれなくなり、感情が爆発してしまっ」

「うわああっ！嫌なの！」

「助けてっ！誰か助けてよ！」

「あれ怖いのに！あ、あたまおかしくなるっ」

「おおっ、締まる締まるっ」

「くっ……大情夫、う、この締めなら……すぐイクんで」

「嫌だああ！嫌ああああ！」



操哉は腰を激しく動かしラストスパートをかけた。

恐怖と快感で愛液がたらたらと溢れるアソコをかきまわし、  
チンポの先に快感が集中する。

押し上げるような射精感が竿の中心に広がったと思うと、  
その直後に達した。

「い、イクーああっ……んんっ！」

「ぶっくっ…」

「嫌ああああっ♡」

「これだめえええっ♡」

「あひっ♡と、とぶっ♡頭とぶっ♡」

「おかしくなりゃうううっ♡」

「ふあああああっ♡」





「気絶しちゃったんだ」

「イキ方すごかったもんな」

無防備で気絶している百代は、  
人生初めて完全な生殺与奪を握られた状態だった。

「ふっ……」

操哉が満足そうに自分の汗をぬぐっているぞ、燕がきた。





「操哉様、お楽しみいただけましたか？」

「いや〜……こんなに気持ちいい射撃は初めてだ。たよ」

「武神、犯し甲斐があったなあ」

「……そうですか♡」

私の時より気持ち良かったってことだよ。  
少し……ううん、凄く悔しいけど、操哉様が満足なら私も嬉しい。



「燕が手伝ってくれたおかげだよ。ありがとね」

「そんな、お礼を言っていたくようなことなんて……」



「私は操哉様の彼女として、当然のお手伝いをしただけです」

「それはそうだけど、どうだった？友達をハメた気分は」

「罪悪感あった？」

この問いかけに燕はどう反応するか少し迷った。

罪悪感を抱くのが普通なはずなのに、犯されている  
百代を見てもほとんどさういふ感情が湧かなかつたからだ。

「いえ……操哉様の御命令ですから」

「むしろ犯されているモモちゃんを見て……羨ましいなあって思っていました」

「その返事、いいね」

「これから僕に捨てられたくなかったら、罪悪感なんて抱かずに尽くしてね」



自分の反応が正解だったとわかり、  
燕も満面の笑みで返事をした



「はい！これからも操哉様の為に尽くします♥」

「うん。じゃあ僕はもう帰るから、あとはおまっへん」

「かしこまりました」

このあと燕は操哉が帰るのを見送ってから、百代を介抱した。  
目を覚ました百代はひどく傷心していたが、  
燕に礼を言っで二人で帰宅した。

まっすぐは家に向かわず、夜の山原で黄昏ていた。  
今はどうしても一人になりたかったのだ。

「無様……だな」

「武神だなんだと千ヤホヤされて調子乗って……」

「まるで手も足も出せずに犯されて……」



最悪の出来事を振り返り、うっすらと涙がこぼれる。

自分の力の無さと自惚れに激しい自責の念に駆られ、  
悔しさ止め処なく溢れてくる。

その悔しさは百代に次は勝つという発奮的な感情を  
呼び起こそうとしていたが、そうはならなかった。

「ひっ!?!」

何故だろうその感情に反応するように胸の装置が赤く光り、  
百代の感情を恐怖で塗り潰してしまっただからだ。

「あ、あ……!」

思い出すだけで恐怖が込み上げてきて、  
気持ちを黒く淀んだ底へ引きずりこんでしまう。

寒気が体を支配し、  
犯された時のことが鮮明にフラッシュバックする。



私は操哉に勝てない……絶対勝てない。

戦ったのが間違いないんだ。挑んではいけない相手だった。  
もう二度と戦いたくない。

怖い 怖い 怖い

元々持っていたお化けが怖いという感情を  
極限まで膨らませ、  
百代は立ち直れないほどの恐怖を刻まれている。



何かされても負けた私は逆らえない。

嫌だ 怖い 怖い

同時に屈服の感情も植え付けられ、  
百代は操哉に対するどうにもできないほど大きな恐怖と、  
畏怖を抱くようになった。

翌朝、ほとんど寝つけなかった百代は  
「入トポトポと登校していた

すると偶然、燕に出会う。

「モモちゃん、おはよー」

「あ、おはよう燕……昨日はすまなかつたな」

「うん、いいの。ぼけろい」

「これは相当アラヤマになっ。たみたいだね」

百代の隠せないほど明らかかな憔悴ぶりを見て、  
このあとの計画も成功することを確信した

「……さっさと帰るわ」

「……」

「……」

「……」



川神学園に百代が着くと、  
同じタイムニングでクリスや京も登校していた。

モモ先輩の服装……と、どうしたんだ。

百代の服装が何故か露出気味になっていて、  
ファミリーの三人も目を逸らしてしまっただった。

フラがかなり見えてしまっているので無理もないが、  
百代が酷く落ち込んでいる様子で声をかけづらいが、

「モモせんば……」

「クリス！」

空気の読めないクリスが声をかけようとしたが、  
そこは京が制止した。

百代も三人の姿がまるで目に入ってあらず、  
教室ではなくその足で屋上に行ってしまう。



屋上で一人黄昏ている百代だったが、そこに今一番会いたくない操哉がやっってきた。

「おはようございます、百代さんっ」

「天羽……操哉……!!」

彼の姿を見た途端に百代は全身の血の気が引いて、震えだしてしまう。

「ああ……い、嫌あ……!!」

怖い……もう犯されたくないっ。

じ、逃げなぐさ……。

あまりの恐怖から後ずさりするが、足がガクガクしてその場に転んでしまう。





「うう……ああ……」

尻もちをついて恐怖におびえる百代に、  
操哉は笑顔で近付いた。

「あうう、もしかして昨日のことで怖がっていますっ。」

「……うう」

「うしくないなあ。ちょっと戦って犯しただけですよっ。」

「そんなに怖がらなくなったっていいじゃないですか」

「ほら、今起こしてあげますからね」

そう言って手を差し出すが、百代は体が硬直して動かない。

それどころか、痙攣を見せてしまっついでになる。



「ひっ！」

「うわあ……」

なんとその場で失禁したのだ。

それほど百代にとって天羽操哉という男が恐怖の対象として刻み込まれていたのだ。

「やれやれ、これが武神だなんてお」

呆れつつもクスクスと笑いながらせうせうと近寄り、服に手をかける。

「や、やめてえ……いやあ……」

拒絶の言葉を口にはするものの、それが精一杯で振りほどくことができない。

百代は剥がすように脱がされ、上半身を裸にされてしまう。



「あ……ああ……！」

服を剥がれても恐怖で言葉が出ない百代に、  
操哉がある提案をする

「僕が恐いんだね。わかりますよ、強い人って怖いもんね」

「でもその恐怖を取り除く方法があるだ」

「え……？」

「それはね、ボクの彼女になることです」

「か、かの……じょ……？」

ただでさ恐怖でパニックの状態で、  
考えてもいなかっただことを言われ思考が追いつかない。

「僕の彼女になれば僕か何もかも支配してあげる」

「ふふ、僕に支配された女っていうのはね、  
恐怖や苦痛なんて感じなくてすむんです」

「し、支配……」

支配という言葉に抵抗を感じないわけじゃない。

だが恐怖や苦痛を感じないというその言葉が、  
今の百代にとってはあまりにも魅力的に聞こえた。

この恐ろしい感情が無くなるなら、なんでもいいと思った。

「彼女になれば二度と犯したりしません。なんて言っただって彼女ですから、優しく可愛がるだけです。」  
「だから……僕の彼女になりませんか？」

「あ……う……」

完全敗北し、恐怖でまともな思考ができない百代は支配を受け入れるしかないと思った

この恐怖から解放されるにも、付き合うしかない。

それにもし断ったら、また犯されてしまうかもしれない。

彼女になれば……二度と犯さないと……。

怖いもなくなると……。

気持ちを受け入れる方に傾いたことを読み取った操哉は、グツと顔を近づけて最後の確認をした

「ひっ……」

ただ、燕がそうなように僕は彼女に従順さを求めます」

「僕の言う事ならなんでも素直に従う女、それが僕にとての彼女なんです」

「百代さんも、そんな彼女になってくれますね？」

「う……う……」

終始笑顔な操哉だが、それが余計に怖さを演出し、もはや百代はただうなずいて受け入れるしかなかった。

「良かった。じゃあ、彼女になった証をぶしせんとしますね」「百代さん……」

「いや百代ならきっと彼女になってくれると思ってた。持って来たんだ」

「ぶ、ぶしせんと……」

「うん。恋人の証だよ」

「百代が僕に服従してますっていつのがわかる……これだよ」

取出したそれを百代の首にかキッと嵌める。



「ピッタリだね」

百代に合わせて作られたその首輪はピッタリと隙間なく、しかし窮屈ではないジヤストフベルトで装着された

大きくぶら下がるハートの部分に鍵穴があり、操哉の持つ下がる鍵を使わないと首輪は外せない仕組みだ。

「うう……」

わ、こんなものを付けられて……私ほ……

恥ずかしいデザインの首輪を隠しようのない場所に、こんなに目立つ形で付けられ、百代は絶望するかに見えた。だが、装着してすぐに変化が起きる。





「私……彼女になっ、たんですわ……」

「うん。これでもう僕のごとは怖くなくなっただけじゃ……」

「は、はい……その、自分でも不思議なくらい……幸せで……」

「そっでしょ？僕の彼女はね、僕に支配されていることに幸せを感じるんだよ」

「ふふ、一番怖がっていたあれを見てもきつともう大丈夫」

「ほう……」

操哉はおもむろにジッパーを下し、チンポを取り出す。

昨日自分を犯した恐怖の象徴であるチンポがポロンと飛び出し、顔の目の前で見せつけられる。

だが確かに百代は、恐怖を全く感じなかった。



「あう……」

あれたけんに思いをせよされたの……。  
ひらいて聞かぬ田の道たにてもな……。  
あま、なんて愛おしい形をいばらぬ……。

うっとりとした目でチンポを見つめる百代に、  
操哉は優しく問いかける

「僕のチンポが目の前にあるんだよ」  
「何をすればいいか……わかるよおっ。」

「……はい」

百代はゆっくりと頷き、口を開いた。







百代の口に昨晚アソコに注がれたのと遜色ない量の精液が音を立てて射精される

より顔に近いところなので、射精の音がしっかりと感じ取れ、それがまた至福の音色のように聞こえた

「んんっ♡」  
「んんっ♡♡んんっ♡♡んんっ♡♡」

口の中いっぱい注がれた精液を飲みこき、体の内側からポワッとして幸せが込み上げてくる。

精液を体内に取り込んだことで、支配を受け入れたという実感が湧いて、それがまた一段と大きな幸福感となって体を包んだのだ。

百代に服を着させて立ち上げらせ、  
改めて新しい関係性を確認する。

「これでお前も僕の彼女だけと立場は弁えて僕に尽くしてね」

「これからよろしく、百代」

「はい……宜しくお願いします」

「何か僕に言いたいことがあるらば、聞いておくれよ」

「言いたいこと……ですか」

百代はちょっと戸惑いながらも、  
自分の気持ちをそのまま伝えることにした。

「もう私は……操哉様の物です」

「二度と生意気は言いません。ただ尽くすだけの彼女です」

「なんでも命令して下さい」

「どんなことでも言っことを聞きます」

「だから私を……ずっとなんか支配してほわらら♡」

「それは任せじやあ」

「支配することにかけては自信あるんだ」



百代が完全に支配を受け入れたところで、燕もやってきた。

「操哉様、おはようございます♥」

「おはよう燕」

「あ！モモちゃん、その首輪をっつけてるっ。っっっっっっ……」

「うん。百代は今、僕の支配を受け入れて彼女になった」

「どうでしたかー！」

「モモちゃん、おめでとう。っっっっっっ同じ操哉様の彼女だね」

「ああ、これからよろしくな」

松永燕と川神百代。

二人は武士娘としてではなく、操哉のオンナとして握手を交わした。



「いざよひよ、さ」

「ありがとうございます」

百代の手で燕に首輪が装着される。

操哉に服従する彼女の証であるハートマークの首輪は、燕に取って何よりも誇らしいアクセサリだった。

「ふふ、彼女に首輪付けるのって飼ってる感じが出て良いね」

「はい。この首輪を付けていると……支配されているって感じが凄くして胸がキュンってなります♡」

「私も燕と同じです。操哉様の女になっただって凄く実感が湧いて、幸せです♡」

「でしょ？ちなみにその首輪、通信機能もあるんだ」

「それでお互い連絡し合っで、ボクの恋人同士仲良くしてね」

「はい！彼女同士で争ったりしないのは私も嬉しいわ」

「操哉様に御迷惑をかけるようなことほしません」

「うん！それじゃあ改めてこれからよろしくね」

燕への告白から始まった一連の騒動で、松永燕と川神百代の二人を支配した天羽操哉。

武士娘最強格の二人を彼女という名のいいなり奴隷にした操哉の学園生活は、楽しく淫らなものとなった。



# MC mix challenge

放課後、MC同好会への入部届を職員室に出した二人は  
部室にやってきました。



「今日からは私達二人も自由に出入りOKだって」

「いざいざせぜ学園内で操縦機と一緒に過ごせるわけか♥」



「ま、エッチなことするからいざいざはするんだけどね♥」

「音対策とか、カーテンとか色々考えなくちゃな」

「だね♥バイブとか隠しておく棚とかも用意しないとな」

そんな会話をしながら、部室のカギを開けて中に入る。

部屋に入っても操哉が来るまでは特にすることはないので、  
時間を潰して待つことに。



「どうせならイヤイヤして待ってよっか」

「それもいいが、先にはじめちゃっていいのかな」

「前にここで私が待たされた時、操哉様が言ってたんだ」

「彼女だったらいつでも挿入できるように暇なときはオナニーでもしてろって」

「そうか。なら燕の言う通り二人で高め合っか」

「うん。イかない程度に弄り合って、  
しっとりアソコを濡らしておこうね」

「モモちゃん、胸、すっごい弾力だね」

「んっ♡ぞ、そうか？」

「私のより大きいし、なんか……妬けちゃうな」

「私だって燕には妬いてるんだぞ。あんっ♡」

「私はいつまでたっても、操哉様にとっては燕の次に彼女になった女なんだっつてな」



「ぞっか、それもそうだよな」

「じゃあ操哉様の先輩彼女として、良いことを教えてあげる」

「操哉様はキンタマを弄られるの好きじゃないから、そこは舐めるだけがいいよ」

「そうか。んっ♡」

「あんっ♡先輩の話しはためになるな……ふあっ♡」

燕は会話しながら百代のブラを外し、今度は直接胸を触った。

「んんっ♡」

うわ〜……指が沈んでいくよこのおっぱい。

なのにハリもあるし、すべすべ。  
羨ましいっていうか、これはもっ悔しいくらいこの胸だね。

「ふあっ、んひっ♡」



「あんっ♡ち、乳首が♡」

乳首は程よい大きさだけで、感度は私の方が上かな。

「な、なあ燕」

「何っモモちゃん」

「いや……ちょっとさっと思っただけだよ」

「これまでだったら暇っていうのが嫌だったんだが……」

「今はどうして彼の為に時間を浪費してるのが嬉しいんだ」

「へ、変かな？」

心境の変化を口にした百代は自分で少し戸惑っているようだったが、これは燕も経験したことだった。

「わかるよ。操哉様のためだって思えちゃうよね、いくら放置されてもいいから。」

「私も前に約束すっぽかされたんだけど、全然嫌な気分にならなかつたね。」

「むしろね、結局は操哉様の為に無駄にした時間だから、それはそれで幸せだって思っちゃったんだ。」

「……思っちゃったって言ったけど、今はそう思えた自分を誇らしく思うの。」

「だって、私の生きている時間そのものを操哉様に捧げたんだから、幸せじゃなきゃおかしいじゃない。」

「そっか……そうだな。燕の言う通りだと思う。」

「なんか、そういう話を聞いてると安心するよ。」

自分がおかしいわけじゃないとわかり、百代は安心したようだ。

そのまま体を弄られ、数分すると首輪に連絡が入った。



「百代と燕、今どこにいる？」

「操哉様、私達は二人で部室にいますよ」

「もう行ってたんだ。ごめん、今から行くから待ってて」

「んっ♡わ、わかりました」



「はい、準備してお待ちしています♡」

「準備、ね……ふふ、そっか」

「楽しみだなー。じゃ、あとで」

「さ、お出迎えするよモモちゃん」

「私も初めてだけど、操哉様に教えられた作法があるんだ」



「どっちなのか」

間もなく操哉が来ることがわかった燕は、あらかじめ教えられていた部室での待ち方を実践して待った。

操哉が部室に来ると、  
二人の姿を見て満足気な表情を浮かべた。

「お、偉い偉い」

「二人ともしっかり作法を守ってるお」

部室の中で待っていた二人が、  
言いつけとおり全裸で待っていたのだ。







「お待ちしておりました、操哉様♡」

「操哉様、御苦勞様です♡」

「うん。二人もお疲れ様」

燕と百代は裸で床に手を付いて待っていた。

M.C同好会の女部員は部長である操哉を待つ間、  
全裸で頭を机と同じくらいの高さにして待つ

それが作法なのだ。

なぜなら、その頭の位置は操哉のキムポの高さと同じであり、  
すくじ即尺でできる姿勢だからだ。

「待った？」

「待ちましたが、操哉様の為に時間を浪費するのが  
幸せなことだと知ることができました」

「ありがとうございます♡」

「待っている間も楽しかったです♡」



「そっかそっか」

「待たされても感謝する。僕の彼女はそうでなくっちゃんね」

「それにしても二人がその裸で並んでると壮観だね」

「せっかくだし、新しい方の彼女を使おうかな」

「ありがとうございます♥」

操哉はまるで物を使うかのような口ぶりで百代を指名し、  
千シボを突き出した。





「操哉様、そんなことでしたら私達に言っていただけければ代わりになりますよ？」

「ううん、やらせてください」

「彼氏様が雑用しているなんて……考えただけで申し訳ない気持ちになっちゃいます」



「この申し出に操哉も悪い気はしていない様子だったが、今はまだその時ではないと断った。表だって燕や百代をパシリに使うのは、あまりにも目立つことだからだ。」

「でもその気持ちは嬉しいよ」

「いえ……なんでも操哉様のことを一番に考えるのが、彼女ですから」

「操哉様はこう仰っているけど、目立たないようにサポートしてあげな〜んか。雑用なんて絶対にさせられない……させたくない〜」



「百代、そろそろイキそう……」

「顔にぶっかけていい？」

「……」

「じゃあ、さっ♡♡♡」

「はう！は、激しいっ、や、やばっ」

もちろんですと言わんばかりに激しいフェラチオで操哉の射精を促す百代

強い吸い付きのまま竿の根元から亀頭の先まで、  
激しく出し入れすると、チンポが何度もビクンッと痙攣し、  
一際大きく跳ねた瞬間に口を離すと、  
熱くドロックとした精液が顔に降り注いだ。

「ふぁ……♡操哉様の精液い……♡」

「百代を見下しながらふっかけるの、最高だったよ」

「本当ですか！ありがとうございます♡」

「あの、この精液……甜々いも良いですか？」

「もちろんだよ」





「ちゃるっ♡スうりっ♡」

美味しそうに舐める百代を前にして、  
操哉は感慨深い気持ちでいた。

いさー……「うさ」って顔ぶっかけるでま配していきさって実感が湧くなあ。

「一回抜いたただけでは勃起が治まらないので、  
もう一人を使うことに。」



「今日の初マンコは燕にしようかな」

「百代、燕を抱えてあげて」

「んっ……さくんっ♡」

「はっ♡……はい、わかりました」

椅子に座り抱えあげられ、足を開く。

そうすると自然と操哉のチンポの位置に  
マンコが来るので挿入しやすい。



「操哉様のオチンポ……す、すごく素敵です♥」

「でしょ？最高のチンポを突っ込んであげるね」

「嬉しいっ♥」

「お、お願いしますっ♥」

ガバッと開かれた両足に迎え入れられるように体を寄せ、その中央に煌々と肉の入り口に緊張しきったチンポをそつとあてがった。

ネチネチと膣口に亀頭を擦り付け愛液をなじませるとヌフツツ…ヌフフツツと先端を埋め込んでいく。



「あううっ♡んんっ♡」

先走り汁が溢れてうらと輝く亀頭をオマシヨへあてがうとクチユツツと言う水音と共にぬるんっつと飲み込まれた。

「オチンポがっ♡」

「あんっ♡は、入ってきてるっ♡」

先端を包み込む肉の感触を確かめながら腰を突き動かしていくと操哉のチンポの形を覚えている。膣壁がヌフツツといやらしい音を立てて吸い付き。その快感がお互いの背筋に電気の様に走る。

「んんっ、燕のマンロ……すっくぽんぽん」  
「トロトロで……ふっわふわで……」

「ああっ♡はっ♡ああっ♡」



「わ、私も凄く気持ちいいですっ♡」  
「操哉様と繋がってる……幸せすぎてっ♡」

操哉は快感に悶えながらも腰を動かし続けた。

ねっとりと濡れたオマンコの繋が  
熱いチンポにまとわりつきながらずぶずぶと飲み込み、  
また唾え込んでほらめらめらと吐き出すのを繰り返す

「チンポ……熱っ♡こんなの……はあ……はあ……♡」  
「と、溶けちゃいそうですっ♡」

その様子はとてもいやらしく官能的で、  
後ろで抑えている百代の心とアソコに強く訴えかける  
淫靡さがあった。

良く見えないが……なんていやらしい音なんだっ。  
わ、私もアソコが疼いて……んんっ♡



今は燕の番。

そう思って邪魔しないように声を抑えるが、  
アソコからは愛液が流れ出し、椅子に水たまりを作っていた。

「っ、燕……そろそろ、イクよ……！」

「んんっ♡はいっ♡」

「わ、私も、い、「一緒にっ♡イキますっ♡」

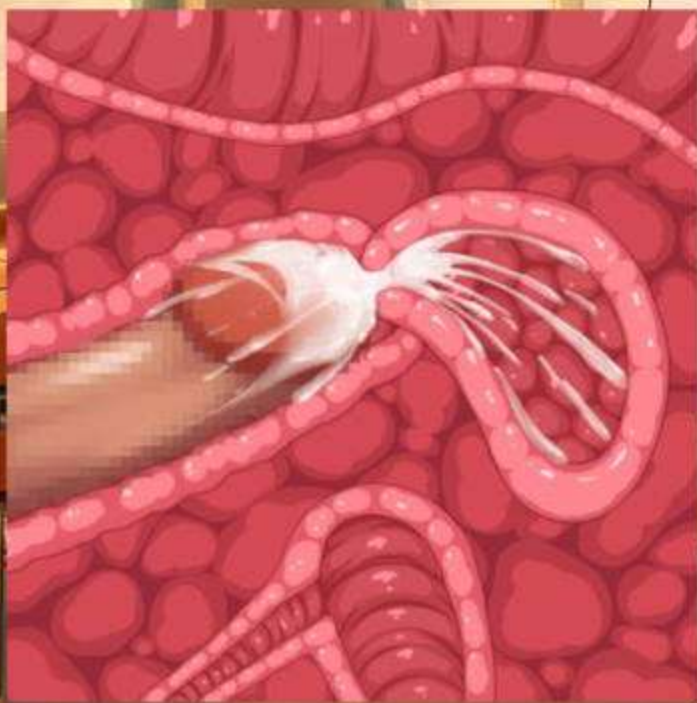
「あ、ああ……うっ、イク……で、ごめよー」

「ああああっ♡」

高い喘ぎ声が部屋中に響いた瞬間、彼女の膣内へと亀頭から噴出した溢れんばかりのザーメンを注ぎ込んだ。

断続的に膣内に放出される白濁液を子宮が受け止めるたびに彼女はフルフルと身体を震わせ、絶頂する。

「熱いのがたぐさぁん♡中に来てるぅぅぅ♡んはあっ！」



「い、イクっ♡」

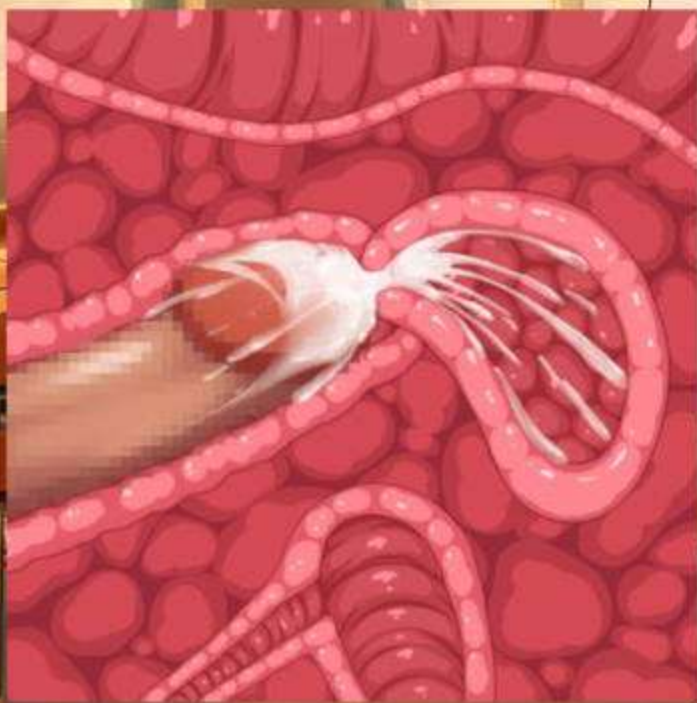
「熱いチンポからネバネバの濃い精液でまたイク♡」

「イッチャうううっ♡」

胎内で射精されるドクドクという刺激に震える彼女の膣壁は  
白い精の感触を得るたびに断続的に絶頂し  
操哉のチンポをまるで離すまいとぎっく締めつける。

「す、すっぴいっ。し、しまりがっ」

その締めつけは余すことなく  
精液を搾り取ろうとするかのようだった。



千シボを抜く時もスポンジと音がするほどの締め付けで、あれだけ精液を注いだのにそれほどこぼれはしなかつた。

「ふぁ♡お腹の中にたくさん……操哉様の精子い♡」



「ハハ、すっごい締めだったなあ」

「おかげで千シボが勃起しっぱなしだよ」

「休憩しようと思ったけど、このままもう一回百代で抜こうかな」

「はい！是非私にもオマンコっついでなから♡」





短いスパンで何度も子宮口を突かれ、  
百代も精液が欲しくてたまらなくなる。

「ああっ♡激しいっ♡ああっ♡」

「すっぴんっ♡奥がっ♡んんっ♡ああんっ♡」

「田っっんんんっ♡私の中にもっ♡」

「操様様の精液、たんけんっ♡」

「いっ言われたんですけど……なっ中に入ってますっ♡」

「へっっっ……なっあっっ♡」

「あっっ♡」

「い、イックウウウウッ♡」

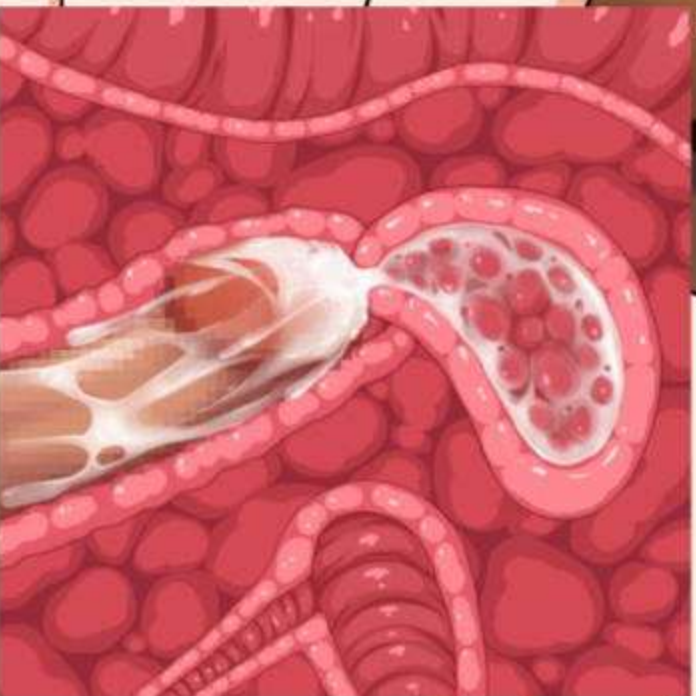
中出しされるときの膣内を満たされる幸福感。  
それは問答無用で百代を絶頂させる。

あっ……幸せ♡

操哉様の精液で……あぁ……支配されてっ♡

「はぁはぁ……ふう、たくさんでたなぁ」

「ちょっと休憩。一回抜くね」



「あ……」

千んポを抜かれた百代は物欲しげな視線を送った。

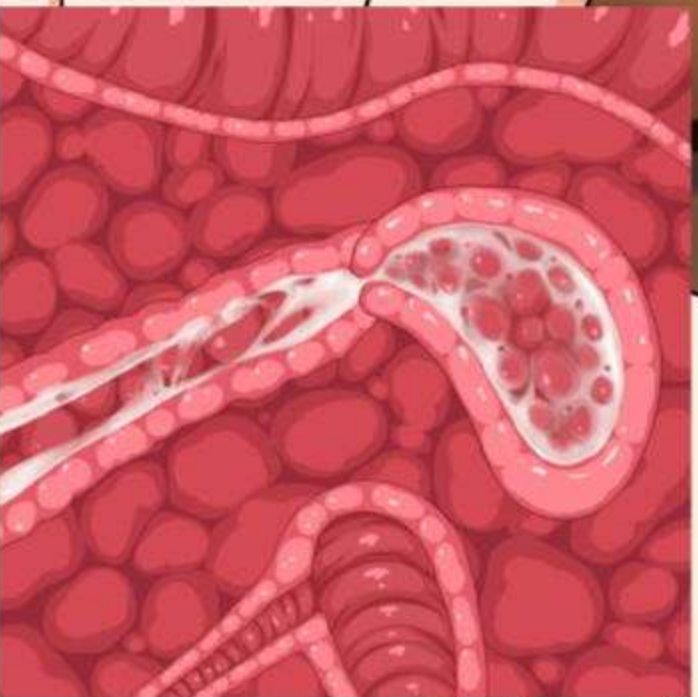
言葉にはしないが、もっとして欲しいという気持ちがありありと伝わる視線だ。

「そんな顔しないの。ポマなってるまはやりたりなんだ」

「だから……家に帰ってさっさとさっさと」

「操哉様……！はいっ♡」

「燕もいいわ」





「は、はい！」

「今すぐ帰宅の準備をします！」

「あ、それは百代にさせるから、燕はお掃除フェラね」

「かっこまりました♥」

百代と交代した燕は、早く帰宅できるように  
一心不乱にチンポをしゃぶり綺麗にした





「僕の彼女なんだから、僕のチンポで気持ち良くなるのを我慢しちゃうだめだよ」

「ふあっ♡はいっ♡」

「もうっ♡あんっ♡が、我慢しませんっ♡」

「んっ♡れろっ♡」

我慢しない。

そう言ってすぐ百代の膣壁がギョウと締め、チンポに圧をかける

「うっ！す、すごっ、こんなに締めつけが」

失神しないように快感を制御していたのをやめた途端、膣内の締めがさらに強まったのだ

「んあっ♡あああっ♡イグッ♡」

「ふふっ、これが本当の百代のマンコなんだね」

「ほ、僕も……イクよっ」



「あ……うっ！」

「イックウウウッ♡」

「はあはあ……うっ……あぁ……♡」

中出しの絶頂で百代は失神した。

ぐったりと横たわるその顔は操哉からは見えなかったが、快感の全てを全身で味わい幸せそうに笑顔をしていた。



「んっ……♡」

「モモちゃん気絶しちゃったみたいですね」

「操哉様のオチンポがよっ、ほど気持ち良かったんですね♡」

「そうだね。僕も気持ち良かったよ」

「もし……まだしたらないのなら、私が変わりますよ……っ」

「じゃあ冷蔵庫から川神氷取ってきてくれる？」

「パイヌリしてもらいながら夜景で一杯飲んで、それからまたりエツ千しようよ」

「はいっ♡今すぐ取ってきますね！」

松永燕と川神百代。

この三人を手にした操哉は毎日のようにセックスを楽しんだ。

こんな淫々な生活が続けば、  
二人の武士娘にも当然変化が生じる。

それは誰の目にも明らかで、周囲の反応は様々だった。

多くは燕と百代が操哉と男女の関係にあるのではと  
質問してきたが、交際を公表している燕は良いとしても、  
二股相手の百代ははぐらかすことじかできなかつた。

だが、首にぶら下げているものが燕と同じなのは明らかで  
はぐらかす意味は無いに等しかつた。

そして身近な人間はそういう大きな変化以外にも、  
洗脳されたことで起きた細かい変化にも気付き始めていた。

「走るの止めでどうした？」

「お姉様、最近ちょっと変です」

「悩み事してる時は指舐めてるし……」

「あ、いやこれはない……その……」

指を舐めながら考え事をする癖。  
それを一子に指摘されたのことは百代をドキッとさせた。

この癖は治す気はないが……。

いつものだと操哉様に迷惑がかかると言ってるな。

「それに最近、修行もあまり……」

川神院のメニューは普段通りこなしているが、それ以上の  
特訓をしている百代の練習量は目に見えて減っていたのだ。

どの指摘も言い訳が難しいこともあって、  
百代は操哉に今後の対応について相談することにした。

「ハハ、今も指しゃぶってるあたり、本当に悩んでるんだね」

「だって……この癖は私が悩んでいるのがわかるように操哉様が植え付けたって聞きましたよ？」

「そっだよ。彼女の悩みは僕の悩みでもあるんだから、すぐに解決できるようにしようと思って」

ひゅっひゅっひゅっ……おっぱいを揉む……

「……お気遣いありがとうございます」

操哉へ尽くすことで訓練の時間が減っているという悩みは、いずれ解消する問題だから気にするなと言われた

それには色々な意味が含まれていて、百代の周囲も洗脳すれば気にする目も無くなるというのが一つ

加えて女が増えればそれだけ百代とセックスする時間も減るので時間は確保できるようになるという意味もある。

「おならきました。今はお腹がぽんぽん鳴ってます」

「……の……」

「まだ悩みがあるんですっしょ？指しゃぶってるもんな」



「う、嬉しいです……!」

「ああ……これで私も操哉様の彼女なんだって  
みんなに知ってもらえるんですね」

「まずは百代と親しい人たち、  
風間ファミリーーだっけ? その辺から押えようか」

「そうですね。ありがとうございますっ ♡」

すっかり悩みが解決した百代は、  
気付けば指を口から離していた。

「じゃ、悩みも解決してスッキリことだし、  
今度は僕のチンポをスッキリする番だね」

「はいっ♡百代のオマンコで、  
オチンポすきりするまでパロパロくっついてやるっ♡」

このあと夜遅くまでセックスし、  
精根尽き果てた二人は寝落ちしてしまい、  
翌日は寝坊して遅刻するのだった。

後日、風間ファミリーの女性陣に対して  
百代の交際が伝えられた

「というわけで、  
百代さんとも交際させていたたぐことになりました」

「色々批判はあると思いますが、三人で  
納得していることなので応援していただけたら嬉しいです」

「もちろん、自分だけを見てもらいたいという思いもある」

「けど、燕と同じ人を愛して、どっちも愛してくれる」

「今はそれで満足なんだ」

「うん。二股っていうのは十分理解してるんだけど、  
それでもいいって私達は思ってるの」

「だって……幸せだから」

二股恋愛も公にし、  
それでも幸せだからいいと言い切る二人を前に、  
風間ファミリーの反応はそれぞれだった



「……私は口出ししないよ」

京は驚きつつも、内心はライバルが二人減ったと思っていた。それに大事な百代の恋愛を邪魔する気も無かった。

「わ、私が物申すことでもないしな」

クリスは恋愛に疎いこともあって、どう反応していいか困っている。

一方、由紀江は固まっていた。

「ふふ、ふたまた……!」

他の三人に対し、一人明確に否定的な感情を示したのは一子だ。

義理の姉であり、目標である百代が二股にかけられ、その百代は訓練にも身が入っていない。ずっと不満を抱えていたのだ。

「お姉様、正直言って私は納得できないわ」

「今が良くてもきつたといつかお姉様が傷つく気がして……  
そうなたら私、彼のことを許せないとします」



「お前……」

操哉様になんて生意気なことを！

「もっともだと思えます。年下の僕が二股をかけるなんて、おかしいですよね」

「だから僕も今すぐみなさんに認められるとは思ってません」

「でも、二人を愛しているのは本当です。だから……今すぐどちらかと別れようというつもりはありません」

操哉はもう少しの間は見守って欲しいと訴え、それに燕と百代も同調した。

一子の態度はそれでも軟化しなかったが、とりあえずこの場は解散となった。



解散になった後、京は他人事ではないと思っていた。  
同じ状況になった時、自分はどつするのか。  
これまで何度も考えたことがあった。

「二股か……大和だっ、たら……」

もし大和が別に好きな人ができても……

私のことも見てくれるなら……。

大和にもし二股でも良ければと言われたら。  
仮に言われなくてもそういう空気になったとしたら。

京は自分が受け入れてしまうと自覚があったて、  
百代を否定するようなことを言えなかったのだ。



一方、風間ファミリーが退室した後で百代は平謝りしていた。

「操哉様、

先程は妹が失礼な言動をして申し訳ありませんでした！」

「まさか一子があんな反応をするなんて……」

「気にしなくていいよ。

それだけ百代のことを大事に思っているってことなんださうし」

「それに、あの反応がむしろ普通なんじゃないかな」

「操哉様……」

叱られることも覚悟だった百代は優しい言葉をかけられ、ホッと息を撫で下ろした。

「ま、それはいいんですけど、今日は張り切ってもううございなるよ」

「張り切る……ですか？」

「うん。明日から家にこもって研究したいことがあるんだ」

「多分、三日くらいは必要になるぞと思う」

「だから今日は三日分やるからな」

「かっ！まりました♥」

「そっ！言っ！事でしたら、いん！ご！でも張！り！ま！っ！す！い！ま！す！よ！♥」

「そうと決まれば、帰りに食べ物とか栄養ドリンクを買って行って行きましょーう」

「そうだね。」

「じゃあ僕は先に帰ってるから、燕は食料の買い出し」

「百代はそうもなあってオナホでも買ってまで」

「三日分ね。買う時に顔隠しちゃダメだよ？」

「は、はい……！わかりました」

「許したって言うてたけど、これはモモちゃんへのお仕置きだね。」

「……いいなあ、私もお仕置きされたいかも♥」

「操哉は先に帰宅し、燕と百代は部室の掃除をしてからそれぞれ買い物を済ませ、マシジーンへと向かった」



「あら、偶然」

「燕、お前も今来たところか」

操哉の家に来た二人は  
ちやうど同じタイミングでロビーにいた。

「モモちゃん、オナホ買ったの？」

「ああ……まあな」

「この制服だし、恥ずかしかっただけでオナホ買ったぞ」

「ぞっか、私達十八歳以上だから  
そういうお店も制服に入れるんだわ」

「ごちゃごちゃなんぞ」

見たが、なな一、モモちゃんが恥じかへんぞっか

その後二人は約束通り、  
夜通しのセックスで操哉の性欲を発散。

三日後に改めて集まることになった。

「待ってだよ二人とも」

操哉はこの三日間、ある物を作っていたようだ。そしてそれは燕と百代へのフレスメントだという。

「ど、操哉様からフレスメントは……フレスメント……？」

「嬉しいすぎて……んあっ♡」

「ど、それ聞いただけで濡れちゃいますよ♡」

「ど、お前達にフレスメントだよ。これなんだけどね」



二人に渡されたのは、燕の戦闘スーツをモデルに改良し、より頑丈で様々な機能を備えたポテスーツだった。

それに加えて、脳波コントロールを可能にするイヤリングも二人に渡された。

「嬉しい……！」

「操哉様が私達の為に三日もかけて作ってくれたフレスメント、ありがとうございます」

「今までの人生で一番のフレスメントです」

「ふふ、実は自分のも作ってあるんだよ」

「まずは僕が着たところを見せてあげるね」

二人のスーツはついで作った物だということば伏せて、  
自分のスーツを纏ってた

「んっしょ……」



「じゃん！」

「か、可愛い……！」

「か、カッコいい……！」

白基調のボディスーツは専用だけあって完璧にフィットしては本人も納得の出来だった。

「どうかな？いい感じでしょ？」





「はい。とても似合っていると思います」

「白を選んだのがセンスあるなあって」

「操哉様のイメージにピッタリ♡」

「でしょ？ふふ、自分でも納得のできる出来栄えなんだ」

「三日間、籠った甲斐がありましたわ」

「うん！」

自信作を二人に絶賛され、操哉も満足気だった。

「でも……あれ？」

「操哉様、一個だけ質問してもいいですか？」

「このスーツのいい？」

「はい。私達はともかく、操哉様用の戦闘服を作られたってことは……その、つまり」

「む？燕、それってもしかして」

「……うん。操哉様が戦わなきゃいけないことが今後あるってこと……なのかなって」

「察しが良いね。その通りだよ」

「ぞ、そんな！？戦いならそれこそ私達の本分です！」

「操哉様が戦う必要があるなら、私達が変わりに戦います！」

「それはそうなんだけどね、避けられない戦いってあるじゃない？」

「僕の最終目標的に、多分戦わないって無理なんだよね」

「ぞ、最終目標……？」

操哉は今の質問を良いきっかけとして、自分が目指している未来と胸の内を明かした。

それは百代と燕にとってあまりにも意外なものだった。

「僕の最終目標は、九鬼グループをぶっ潰すことなんだよ」

九鬼を潰す。  
その言葉を聞いた二人の表情は心なしか固くなる。  
今や世界最大企業となった九鬼を潰すなど、  
出来るはずがないからだ

「小さい頃、天羽の家はそれなりに名家だったんだ」

「けど、ある事業が失敗して会社が傾いた時があったね、  
その時に取引先だった九鬼が手を差し伸べてくれたんだ」

「でもそれが農だったんだ。気付いたら天羽の主力企業は  
買収されて九鬼の看板背負ってた」

「大人の事情ってやつだろうけど、両親は凄く悔しがってたし、  
裏切られたって九鬼を恨んでたね」

「だから代わりに僕が九鬼をぶっ潰して、  
逆に吸収してやるって……それが夢なんだよ」

これを聞いた二人は複雑な心境だった。

操哉の抱いている感情は  
逆恨みも多分に入っているのは間違いない。

だが、今となっては  
自分の全てを捧げてもいいと思える男が抱いている恨みだ。

自分達もそれを共有するべきだといふことはわかっている、  
だがその夢は到底現実的ではない。  
先に口を開いたのは燕だった。

「……ひょっとしてそのために洗脳装置を？」

「うーん、その聞き方だと半々って感じかな」

「九鬼を潰して吸収するって夢の為にはもちろん使うよ」

「けどね、僕はそもそも人に人を操って弄ぶ……」

「それ自体が大好きなんだ」

「だから、趣味と目的、半々かな」

「なるほど……趣味と実益を兼ねているのは  
操哉様らしくて好きです」

「ですが、九鬼はあまりにも……」



「この装置だけでどうにかできる企業じゃないってことは僕だってわかってるよ」

「でも諦めたくはないんだ。だからいつかは九鬼と正面から戦うことになるかもしれない」

「その時には僕個人も強さが必要になる場面がきつと来ると思ってるね」

「でも鍛えてどうにかなる体じゃないから、いっそ科学の力だけで強さを得ようって思ったんだ」

話しを聞けば聞くほど不安が募る内容だったが、操哉用の戦闘スーツはあくまでいざという時の為の物で、戦闘は支配した人間に任せるつもりと聞いて二人は安堵した。

「だから僕は無謀って言うのは理解していても感情で九鬼と争うんだ」

「それを承知の上で、二人にも協力して欲しい」

「力、貸してくれるよね？」

この質問への返事をするのに、二人は迷わなかった。

「もちろんです！」

「私達を使って、夢を叶えてくれたかい！」

「ありがとう！」

「……まあそう言ってくれれば思ってたし、嫌とは言わせるつもりなかったんだ」

「でも、自分から快く受け取ってくれて嬉しいよ」

「そんな二人だったら、これも付けてくれるよね」

協力を快諾した二人に、操哉は先に渡していた脳波コントロール用のイヤリングも付けるように言った。

それを付けるということは、大きな意味を持つらしい。

「そのイヤリングはね、付けた人間の脳波を

僕がコントロールして勝手に操れるようにするものなんだ」

「要はいつでも体と頭を乗っ取れるってこと」



「元々は支配した人間が反抗した時に制御するための物なんだ」

「いわば保険みたいなものとして作ったんだけど、僕の支配下だつて目印にもなる」

「ただ一個だけ難点あって、操る時に相手が拒絶すると脳への負荷が大きいんだ」

「だから頻繁に使うには受け入れてくれる人にしかつけさせられない」

「けど……二人なら僕が好き勝手操っても拒否しないよね？」

「つまりこれを付ければ、  
本当に全てを差し出すことになるんですね」

「なんか、人権没収されちゃうって感じですね」

「その響きいいね。確かに人権没収と変わらないかも」

「人権……没収……」



「で、どうかな」

「これを聞いた上でイヤリング付けてくれる？」

改めて聞かれた燕と百代は無言でお互いに視線を送り合い、  
お互いの気持ちが一致していることを確認したあと、  
イヤリングとポティスリーブを着るといふ行動で返事をした。

「操哉様、これが私達の答えです」

「御主人様の本心とその大きな野望を聞いて、私達もそれに全力でお力添えさせていただきます」

「その為だっ、たら立場を改めても構いません」

「うん。このイヤリングを付けたっていうことは、身も心も人権も全て差し出して、操哉様に支配されるってことなわけだから……私達はもう恋人じゃないね」

「操哉様の所有物……」  
「一応は人間だから奴隷って呼ばないのかな？」

「奴隷……ああそうだな、今から私達は奴隷です」

「どうか私達を使って、夢を叶えてください。御主人様……」

「二人で一生懸命尽くしますから♡」



「良い答えだね」

「それじゃあ全員の気持ちも一致したわけだし、  
パーッとヤッチャおうか」

「お前達が奴隷になった記念も兼ねてね」

「はいっ♡奴隷らしい御奉仕をさせていただきます」

「新しい誕生日が出来たみたいで嬉しいです♡」

「あ、スーツは脱いでね。一着しかないのを汚したくないから」

「かっぴまりました、今すぐ脱ぎますね」

こうして元々奴隷のようなものだった彼女二人を  
名実共に奴隷とした操哉は、二人とのセックスを楽しんだ。

まずは燕に挿入しつつ、尻の穴を百代に舐めさせる。

「あんっ♡」

「う、御主人様の……いつもより大きいかもっ♡」

「どっかまね。だってっ……んんっ！」

「んんんっっっ、わうっ」

（ひたひたの尻を舐めるの……い、意外と悪くない。）

「百代にも尻舐めさせているから快感が二重で……っ！」

「わーっ……んんんっ」

（んんんん……んんんん。）

（んんんん……んんんん……んんんんっ♡）

三香二様に悶えながら、セックスは続いた。

尻を舐めさせている操哉は自分で動けないので、燕が腰を動かすことでピストンをする。



「あひっ♡イクッ♡」 「わっっ、あんっ」

「自分で動かしなさいっ♡いっ♡いっ♡イクッ♡」

「ああっ♡♡」

「あっっっっっ、いっ♡イクマンロが、しきって……」



自分でピストンしているわけではないので、快感が一方的にチンポに加わる

ペース配分の出来ない受け身の快感は高まっていって一方で、これまでとは別の射精感の高まりだった

「んっっっ……んあっ」

「っっっっっ、んっっっっ」

「んっっっっ、射精かな？」

「んっっっっ……飛び切り新鮮な良い射精してあげます♡」





「ちゅるっ、んっ、れろれろっ♡」

舌を絡ませながら、ピストンを続ける。  
好きな時に燕と甘いキスをしながら  
自分のペースで百代を抱く。

やはり攻め手のセックスが性に合っていることを操縦は思った。

「んっ♡ひゃあっ♡お、おくっ♡」

「あひっ♡ああっ♡んんっ♡」

「そうだ、さっき僕のお尻舐めさせた時に思ったんだけど、  
百代にはこれからたくさん無様なことをさせてあげるね。」

「ふあっ♡あっ♡ありがとうございますっ♡♡」

「たくさん無様な目に合わせてくださいっ♡♡」

「私の尊厳っ♡ああっ♡せ、全部奪っってくださいっ♡♡」

「燕はより道具に近い扱いしてあげるね」

「たくさん扱き使ってあげるから、頑張ってね」

「嬉しいですよっ♡いつでも好きな時に使ってたわいっ♡」

「ふふっ、二人ともどんどん僕好みになっていくから嬉しいよ」

「次は見た目も変えてあげる」

「でもまずは……とりあえず二発抜いてからね」

「イクから、百代も一緒にイクんだよ」

「はいっ♡イキますっ♡」

「御主人様の射精と一緒にイキますっ♡♡」



「あああああ~~~~ツツ♡」



容姿も強さも最高ランクの女を二人同時に抱く、  
誰もが羨むような男の夢を体験。

だがそれで満足することはなく、  
あくまで最終目標は九鬼の打倒だ。

いつか九鬼の女を同じように抱いてやる。  
そう心の中では思っていた。

「じゃっつるっ♥すっるんっ♥」

「百代にさせているお掃除フェラ、九鬼揚羽にさせたら  
征服欲と復讐心……すっごく満たされるんだろうなあ」

「御主人様、私とモモちゃんがその気になったら  
九鬼揚羽くらいならいつでも捕まえてきて  
無理やりにもオチンポしゃぶらせちゃいますよ」

「ほは、それも楽しそうだね」

「ところでさ、  
自分から彼女をやめて奴隷に成り下がってくれた二人は、  
とっておきの御褒美があるんだ」



「そんな、御褒美なんて……私達は搾取される側。御褒美をいただくなんて滅相もありません」

「あ、いえ！ いうらないという意味じゃないですよ？ ただ、そんな施していただいて本当にいいのかなって」

「じゃるっ♡んっほ♡じゃっほ♡」

燕の気持ちもわかる。確かに奴隷が御褒美を頂くなんて……とは私も思う。

「奴隷にだって御褒美はちゃんとあげるよ。僕は優しいからね」

「ありがとうございます♡」

「では喜んで頂きます♡」

こんな機会はまたとないかもしれないし、これ以上断るのも失礼だよな



「あ、そうだ。例えばもし好きな御褒美がもらえるなら、燕は何が欲しいの？」

あれま。これは予想外！  
まさかのリクエストOKとはね。御主人様……本当に素敵♡  
こんな奴隷に好きな御褒美なんて……もっと好きになっちゃいますよ♡

「そうですね、もし好きな御褒美をいただけるなら……消えない刻印が欲しいです」

「刻印？」

「じゃるるっ♡れろれろっ♡」

「はい。私が御主人様の所有物だってわかるような刻印……タトゥーを体に入れて欲しいです♡」

「なんだ、そんなことだ。たらいっつでもしてあげるのよ」

「僕の発明品に良いのがあった。タトゥーを入れてあげるよ」

「百代もいいね？」

「れろっ……はい♡」

「もう私達の意志なんて確認しなくても、  
どんなことだろうと拒絶なんて絶対にしませんよ」

「それが御褒美なら尚更です♡」

「良い子だね。わかった、それじゃあ御褒美付けてあげるから、  
まずは燕からね」

「はい！ありがたく頂戴します♡」



「これでよし、と、……痛かったかな？」

「いえ……大丈夫です♥」

燕は腕にナンバーと股間上部に淫紋タトゥーを入れられた。

特殊なインクを使用して、受精すると体に起きる微弱な変化に反応して中央の♥が浮かぶようになっている。

「これで妊娠したらうすんわかるからな」

「ピアスはどうか？なかなか存在感あるでしょ」

「はい♥この重さが……御主人様の物になった……」

「凄く実感できて嬉しいです♥」

「それはあげた甲斐があるね。」

「百代にも同じことしてあげるから、交代して」

「ありがとうございます♥」

こうして二人の武士娘はそれぞれ消えることの無いタトゥーを体に刻まれ、女の象徴である胸にも乳首ピアスを装着された。

心身名実共に奴隷になった二人は天羽操哉の為に尽くし、何もかも捧げる生活をスタートさせた。

だが、それは少なからず周囲の波紋を呼ぶことになる。

しばらくが経ち、  
燕と百代は服装の乱れや公にしている二股恋愛など、  
武士娘として問題視されつつあった。

普段から腕に包帯を巻くようになった二人だが、  
その下にはタトゥーが入っているとも噂されていた。

だが操哉含め、誰も周囲の反応や噂を気にしていない。

それ以上の秘密を多く抱えている彼女達にとって、  
今の噂など些細な事だったからだ。

「今日はどうしますか？」

「そうだね百代は昨日のセックスで孕んだことだし、  
今日からは燕メインで中出ししようかな」

「ありがとうございます♡」

「では御主人様、私は燕が妊娠するようにと祈りを込めて、  
お口で勃起させて差し上げるといのはどうでしょうか？」

「いいねそれ。よろしく♡」

「かしこまりました♡」

「ありがとうございます♡♡」

「気に入るな。」

「燕にも早く御主人様の子を孕む幸せを知って欲しいんだ」

「じゃるるっ、ぢゅるっ♡」

たくさん元気な精子を出してくださいね。

燕が御主人様の子供を孕みますように♡

百代の腕にはナンバーが刻まれている。

燕には2の数字が刻まれていて、これは操哉の物になった順番を示している。

「じゃるっ♡わらわっ♡♡」

首には装着依頼一度も外していない首輪がぶら下がり、乳首には大きなピアスが付いている。

股間にはタトゥーが刻まれ、中央にハートが浮かんでいるのは妊娠している証だ。

さらにはイヤリング、腕のタトゥーと全裸になっても操哉の物であることがはっきりわかる状態にされていた。

「ぢゅるっ、んっほ♡ずっほ♡♡」

「百代、そろそろ。燕も股開いといて」

「はいっ♡♡」

「んはっ♡……ぶっ♡」







「ああっ♡すごいっ♡」

「おくっ♡はっ♡オマンコの奥♡」

「突かれてっ♡ああ、ああんっ♡」

こんな奴隷を孕ませようと御主人様が必死になっている。

張りきって腰を振る操哉の姿を見ながら抱かれるのは、燕にとって至福の時間だった。

「あひっ♡んんっ♡ああっ♡」

燕は何度も軽い絶頂はしているが、本イキは操哉の射精に合わせる為していない。

だからこそ何度もぎゅうぎゅうとチンポを締めつけ、それがまた気持ち良い。

「あうっ、き、気持ち良すぎ……っ」

「本当……ぎゅーふわっ♡感じる良マンマン♡」

「ふあっ♡ああっ♡」

「そろそろ、イク……っ！」

「はいっ♡い、一緒にっ♡」

「私も一緒にイキますっ♡」





「うん、僕と一緒に...」

「僕のザーメン...」

「孕みますっ♡」

「ああっ♡イッタンクン♡」

「へっ...」



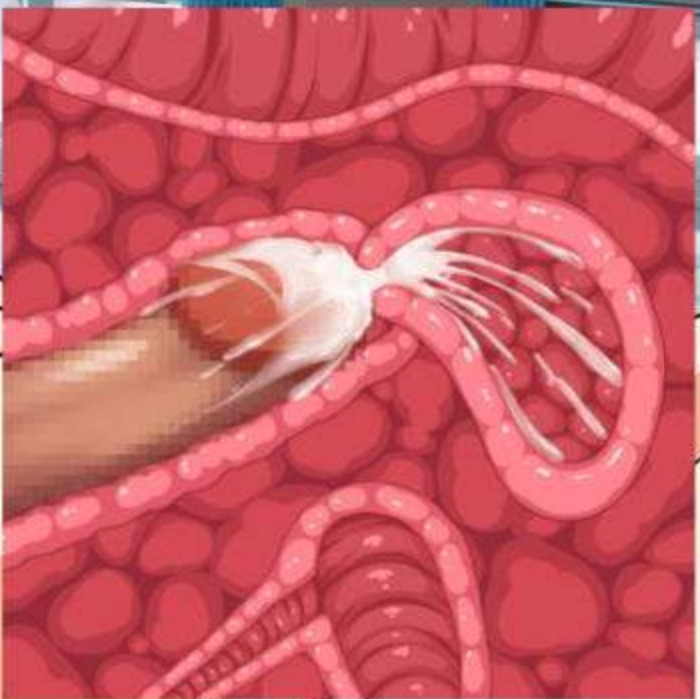
「ああんっ♡御主人様の精液がいっぱいっ♡」

孕ませるといふ意気込みが入っているからか、  
射精量はいつもより多いように感じた。

ふふ♡精液注いでさぶさぶするたびに幸せ……♡

もう何度も中出しされてきているが、  
いつも中出しされても最高の喜びを感じる。

それは洗脳によって植え付けられたもので、  
強い自己暗示の両方がそうさせていた。



「今……精子がアソコの中で泳いでるんですね」

「ああ……御主人様の精子……頑張ってくださいっ♡」

「そうだね。頑張って燕も孕ませないだね」

「それじゃ、このままさっ一回……」

そう言っって腰を動かそうとしたその時だった。

「あ、燕！お前っ」

「あうっ……っ？」

「これって……も、もっかっつっ」



「ああ、間違いない！御主人様、これは……！」

「そうだね。ふふ、おめでと〜燕」

「お前も僕の子供を孕んだみたいだよ」

「ほ、本当ですか!？」

「ああ……嬉しいわね」

「御主人様の子供……できたんだ……！」

「タトウの中心に浮かんだハートマークで燕が受精したことがわかり操哉はもちろん百代も飛び跳ねて喜んだ。」

「そうだ。二人の子供の名前も考えてあるんだ」

「私達の子供の名前……！」



「うん。二人とも孕んでから言おうと思っただけだよ、ほとんど同じタイミングで妊娠してくれたよ。」

「で、名前なんだけとね……」

子供の名前はそれぞれ母親の名前を一字取って、百華と妃燕に決めたという

このことは二人の奴隷を強く感激させた。

「奴隷の分際で御主人様の子を孕めるだけでも幸せなのに、子供の名前まで授けていただけなんて……」

「嬉しすぎてどう表現していいのかわかりません」

「私達……これからたくさん御主人様に恩返ししますね♡」

「そうだな！  
それ以外この感謝の気持ちを表現する方法はないな！」

「ハハ、あんまり張り切り過ぎると失敗するよ」

「でも、せっかくだしお祝いセックスは張りきっちゃおうか」

「はいっ♡燕の妊娠、盛大にお祝いしましょ♡」

「ふふ、モモちゃんのお祝いもだよ♡」



「おほっ♥あひっ♥ああっ♥」

「今日は好きだけいっていいからな」

「はいっ♥ありがとうございますっ♥」

「ああっ、んあっ♥イクッ♥」

「モモちゃん良い表情するなあ……」

「私もそれくらい乱れてみたいよ」

「何言ってるの。燕もこれくらいアへ顔になってるよ」



「えっ、本当ですかっ♥自分じゃ気付きませんでした」

「ああひっ♥ああっ♥ふあっ♥」

「それもそっか。じゃあ、今度二人のアへ顔をムービーで撮って見比べさせてあげるね」

「はいっ♥お願いしますっ♥」

この後も日が暮れるまでセックスし続けた操哉だが、その胸の内に抱いた野望をさらに強めていた

まずは燕と百代の妊娠によって支障が出るであろう学園生活を維持するため、二人の腹が膨らむまでに川神学園を支配する計画を実行に移すことにした

まずは百代を使い、風間マツリに手を出した。

「お、おねえさ……ま……」

「喜べ、これでお前も操哉様の女になれるぞ♥」

「う……う……」



百代の体ですらどうしようもなかった洗脳装置は、付けられると人格をいとも簡単に書き換えられてしまう。

川神三子は百代と操哉への不信感を全て取り除かれ、全ての価値観を操哉第二に書き換えられた。



「なにこれ……う……」

親友以上の絆で結ばれた風間ファミリーは、  
それ故にお互いへの警戒心が無い。

だからいとも簡単に装置を取り付けることが出来てしまう。



ファミリー以外へは警戒心の塊である椎名京もその毒牙から  
逃れることができず、胸に装置を付けられてしまう。

京はまず強すぎる直江大和への愛を削除され、  
ぽっかり空いた穴に操哉への愛情で埋められてしまう。

「安心しろ京」

「大和なんかより操哉様を愛する方が幸せになれるぞ」  
♥

京の全てと言っても良い大和への愛を置き換えることは、  
京の全てを変えることに等しい。

そしてその愛を一度自分に向けさせてしまえば、  
今度は京自身に仲間を毒牙にかけさせることも容易だった。

事実、京はクリスに装置を取り付けるように命じられた。なんの躊躇いもなく実行した。

「ふふ、クリスもすぐに私達と同じようにしてしまえばいいわね」「頭の中、全部変えてもらうわね ♡」

元々油断だらけのクリスは装置を簡単に取り付けられてしまった。だがこの時の問題は別にあった。

クリスも一般人とはかけ離れた戦闘力を持つ武士娘。そんな彼女が装置を取り付けられれば所謂「氣」を大きく乱すことになる。

その変化を察知できる人物が、京やクリスの住む下宿にはいたのだ。

大艦巨砲主義



「クリスさん！大丈夫ですか!？」  
異変を察知して心配した黛由紀江が、  
部屋に入ってきてしまったのだ

「あー……みっちゃったかあ」

「京さん?い、一体何してるんですか!？」

クリスの胸に謎の異物が取り付けられ、  
それを見下ろすように眺めている京、

その様子はどう見ても普通ではなく、  
京がクリスに何かしたのは明らかだった。

「みんないよもせうっかど、待機してあげてまうっか、って良かった」  
「ど、どっかいらんじやあーっ」

「すべてわかるよ」

大艦巨砲主義



京がスッと手を上げると、部屋の標と天井の一部が空き、  
そこからバツと二人の人物が現れた



「マントマント、これも御主人様の為なんだ」



「悪いね、さすがにキェックメイトだよね」

突如現れた燕と百代に動揺する由紀江。

危険を感じ咄嗟に逃げようとするが、格上の二人相手にはそれもかなわず、取り押さえられてしまう。



「あ、ダメダメ……」

「ダメだ。諦めようマントマント」

「ふふ、しっかり押えておませちゃん」

「ああ、任せろ」

「い、嫌あ……」



抵抗しても百代の力の前に振りほどくことができず、由紀江も胸に装置を付けられてしまう。

「あ……う……」

「装着完了、だな」

「二人の手を煩わせてごめんなさい」

「ううん、いいの。これが私達の仕事だからねん」



「ああ。確かに面倒なことになるが、結果的にはクリスとまとめて処理できて良かったよ」

「どっ言っってもうんねない」

こうして武道四天王は四人中三人までもが天羽操哉の手中に落ち、風間フアミリーを皮切りに次々と川神学園の支配を拡大していった。

支配はねずみ算式に広がり、わずか数か月間で生徒教師の大半が支配されるに至った。



それを同じ部屋にいた百代が聞いていた。

「燕、どうかしたか？」

「義経から連絡があって、川神学園の支配が完了したんだって」

「本当か！」



「うん。私たち抜きじゃ予定通りに事が進むか心配だったけど、クローンズはほんと優秀だね」

「これで川神学園の巨大戦力の全てと、九鬼の二人も御主人様の支配下……」

「ふふ♥思ったより早く夢叶っちゃうかも♥」

「それは素晴らしい報告だ」

「今はお楽しみ中の操哉様だが、  
割ってご報告するべきことだな」

「そうだね♥今から報告してくるね」

「ああ、頼む」





「あひっ♡ああっ♡んんっ♡」

「ご、御主人様のオチンポっ♡ごすれてえっ♡」

「い、イクッ♡んああう♡」

「う、いいね。いい締めだよ」

「御主人様ぁ♡」

「次は私とまゆっちに御奉仕させて頂きたいわっ♡」

「そうだね。じゃあ、由紀江のマンコでも舐めながら、京には跨ってもらおうかな」

「オチンポ担当させても頂けるんですか？」

「嬉しいっ♡がんばりますっ♡」

「はっ……ごうやって御主人様に奇り添えるだけで幸せなのよ、オマン」舐めて頂けるなんて……♡」

「し、幸せすぎて頭爆発しちゃいそうですっ♡」

旧風間ファミリーを集めてのハーレムセックスを  
楽しんでいると、風呂の扉が開く。

「御主人様、お楽しみ中に失礼します」

「燕、どうしたの？」

「ちよっと!?!  
御主人様のセックスを邪魔するなんてどういうつもり!?!」

北奴隷が主である操哉のセックス中に割り込む。  
あてはならないことだけに京が激しく怒りを露わにする。

「京、僕はいいよ。話を聞こうか」

「御主人様がそう仰るなら……」

「申し訳ありません。実は、義経から連絡が入りまして」

「先程までに川神学園の支配が  
完全に終了したとの報告があったんです」

「本当!?!」

「それは凄いですねー スんひゃああっ♡」

「へえ! 早かったね!」

「ああっ♡んんあっ♡」

「お前達がポテ腹産休入っちゃったから、  
もつと時間かかるかと思ってたよ」

「はい。正直私もまだ時間がかかるかと思っていました」



「どうしてじゃあはっぴー……」

「そうだね。川神学園の戦力は世界でも最高クラスの戦力」

「その力があれば……九鬼とだって戦える」

「川神院も忘れないでっ♡」

「みんな総出で御主人様の為に戦います♡」



「わ、私の国も協力は惜しみませんっ♡」

「私も……どんなことでもしてみせます。御主人様の為なら♡」

「そうだね。牝奴隷みんなの協力があれば、九鬼だって倒せる気がするよ」

「ふふ、あはは……!!」

夢の実現が近くなっ、たこととで気を良くした操哉は、腰を振り始める

「ああんっ♡ああっ♡」

「ふあっ♡は、激しいっ♡」

「そりゃあ激しくもなるよ！」



御主人様、あんなに興奮して♡

でも確かに、今の戦力なら九鬼ともそれなりに戦える。

九鬼紋白も英雄もこのうの支配下となっ、た今なら……

興奮する操哉のセックスを眺めながら、これからのことを考えている燕

すると、突然燕の体に激しい快感が流れてきた。

「ひゃあんっ!?!」

「ああんっ♡一子ちゃんとクリスちゃんの快感がっ♡」

「感じます♡お二人が感じている、御主人様のオチンポの感触を……♡」

「んんっ♡私も感じるっ♡」

操哉は牝奴隷達の快感共有をONにしたのだ。

それによって牝奴隷達の性的快感が連動し、特に挿入されている状態の二子とクリスの快感が一斉に伝達されたのだ。

全員ONにしたので、イヤリングを付けている牝奴隷は全員一斉に悶えている。

それはここにいない者も全員だ。

「良いよーすっく締る……!」

「ひゃあっ♡ああっ♡」

「御主人様っ♡こ、これ……や、やばっ♡」

「ぎ、気持ち良すぎてっ♡あ、あたまっ♡」

「ほ、僕もだよ……ちよっとな動かしただけで、あうっ!」

単にクリスと一子の快感だけではなく、オナニ中の牝奴隷もいたのだから。その快感も共有されたことで、牝奴隷達は次々に絶頂する。挿入している二人の膣もビクビクと痙攣しながら断続的にぎゅゅと締め、腰を動かす操哉のチンポを快感で包む。

「あぁっ♡ひぁあう♡」

「んいっ♡あっ♡あぁっ♡」

「も、もうイキそう……!」

「んあっ♡んんっ♡」

今御主人様に出しされたら、全員同時にイッちゃうかも♡  
あぁっ、それ、最高ですっ♡

「ふぁあっ♡んんっ♡」

「だ、出すよ!み、みんな一緒に……!」

「はいっ♡イキましようっ♡」

「皆さんと御主人様とで……一緒にっ♡」

「あぁっ♡」

「イグッ♡御主人様と一緒に、全員イかせてくださいっ♡」



「あぁっ……いい、イクッ！」

「あああああっ♡」

「ふああああっ♡」

「あひいいいっ♡」

「イクウウウウッ♡」

「おほっ♡ああひいいいっ♡」

「んんんああっ♡」

操戯の中出しと同時に、牝奴隷達は一斉に絶頂した。

この場にはいない者達には仕事や用事の最中の者も当然いたが、それらの牝奴隷達も例外なく絶頂していた。

「すごい……♡みんな一緒にイクって……♡」

「ああんっ♡れ、連帯感がうまれて……♡」

「最高ですっ……♡こんなに素敵なこと……あるんですね♡」



「はあはあ……ふう」

「燕、百代も連れてきて」

「かしこまりました♥」

「あう……♡ご、御主人様あ……」

「せっかくですから牝奴隷の方を呼べるだけ呼んでは……♡」

「そうだね。お祝いパァッとかやらないさね」

「みんなで……素敵だな♥」

「はあはあ……!」

「い、いっしょにっ♥」

「ま、まだみんなと一緒にイケるのわっ♥」



「まゆっちがそんなこと言うなんて……」

「でも、それ本当に素敵♥」

「よし!それじゃあ燕、他の牝奴隷達にも召集かけるんだ」

「来た順に抱いてやるから、今日は他の用事がある僕とのお祝いセックスが最優先って通達出して」

「全員抱くよ!一人の例外も無くね!」





「かじごまりました」

「御主人様の……仰せのままに♥」

燕は命令通り牝奴隷を招集し、200人を超える牝奴隷が次々と操哉の家に集まることとなった。

酒池肉林という言葉がふさわしい淫欲の宴が一晩で終わるわけもなく、三日三晩続くのだった。

それから何年後か先、天羽操哉は夢を叶えた。洗脳という手段、ただそれだけで夢を叶えて見せたのだった。

真剣が私に  
隷属しなさい!!

終わり

